

財団法人ライフ・プランニング・センター

年報 2007

平成19年度
(2007.4~2008.3)

事業報告書

35

目次 (2007年度年報)

はしがき	日野原 重明 ... 1
ライフ・プランニング・センターのあゆみ	3
健康教育活動	7
1 ■ 第34回財団設立記念講演会「いのちの語らい 生かされて今を生きる」・7	
2 ■ 「いのちの教室」活動・9	
3 ■ 専門職セミナー・講演会・12	
4 ■ 一般セミナー・13	
5 ■ ホームヘルパー2級養成講座・17	
6 ■ 電話による健康相談・17	
7 ■ ハーベイ教室・17	
8 ■ 血圧自己測定講習会・18	
9 ■ 資料・備品の整備・18	
10 ■ 出版広報活動・18	
11 ■ 厚生労働省委託事業「がん患者のリハビリテーション」・19	
「新老人運動」と「新老人の会」の運営	21
1 ■ 世話人会の開催・22	
2 ■ 拡大世話人会の開催・23	
3 ■ 地方支部の設立・25	
4 ■ 地方支部規約の制定・25	
5 ■ 地方支部の運営と活動・25	
6 ■ 海外講演会・ツアー・28	
7 ■ 「新老人の会」設立7周年フォーラム・31	
8 ■ 第1回「新老人の会」ジャンボリーの開催・33	
9 ■ 本部サークル活動・34	
10 ■ 本部事務局主催・37	
11 ■ 新老人の会 ヘルス・リサーチ・ボランティア・37	
12 ■ 2007年度支部の活動状況・38	
ヘルスボランティアの育成と活動	51
1 ■ ヘルスボランティアの育成・51	
2 ■ SPボランティアの活動・53	
3 ■ 血圧測定ボランティア研修(グランドシニア)・55	
4 ■ 血圧測定ボランティアの活動・55	
カウンセリング 臨床心理ファミリー相談室	56
1 ■ 健康教育サービスセンター(砂防会館)での個別カウンセリングについて・56	
2 ■ 聖路加看護大学の学生職員を対象にしたカウンセリング・56	
3 ■ 企業におけるメンタルヘルス対策への取り組み・56	
4 ■ 聖路加国際病院カウンセリング・57	
5 ■ 新老人のためのコンサルテーション・57	
6 ■ 葉っぱのフレディヘルパーセンター, モレコーポレーションにおけるメンタルヘルス対策への取り組み・57	
国際フォーラム&ワークショップ	58
1 ■ 音楽療法・58	
2 ■ いのちの畏敬と生命倫理・58	
海外医療事情調査	60
教育的健康管理の実践(ライフ・プランニング・クリニック)	61
1 ■ クリニックの目指すもの・61	
2 ■ 診療の概要・63	
3 ■ 各種検査数の推移・64	
4 ■ 総合健診(人間ドック)・65	
5 ■ 集団の健康管理・67	
6 ■ 健康担当者セミナー・67	
7 ■ クリニックにおける看護の役割・68	
8 ■ システム開発・69	
9 ■ 食事栄養相談・70	

10 ■ 禁煙外来・71	
ピースハウス病院 (ホスピス)	72
1 ■ 診療・72	
2 ■ 相談・外来・デイケア・往診・73	
3 ■ 入院ケア・74	
4 ■ 遺族ケア・74	
5 ■ ボランティア活動・74	
ピースハウスホスピス教育研究所	77
1 ■ 活動の全体像・77	
2 ■ 教育研究活動の実際・79	
3 ■ 「日本ホスピス緩和ケア協会」事務局として・81	
訪問看護ステーション千代田	82
1 ■ 訪問看護業務 利用者の利用保険別推移・82	
2 ■ 介護保険利用者の利用時間内訳と年齢別・疾患別内訳・83	
3 ■ 看護内容と連携・83	
4 ■ 紹介先・84	
5 ■ 実施指導・84	
6 ■ 居宅介護支援事業所としての業務・85	
7 ■ その他・85	
訪問看護ステーション中井	86
1 ■ 訪問件数およびケアプラン作成・86	
2 ■ 業務時間外の電話相談件数と緊急訪問件数・86	
3 ■ 利用者の年齢分布, 住所・86	
4 ■ 紹介者・87	
5 ■ 訪問看護内容・87	
6 ■ 介護保険対象者の介護度・87	
7 ■ 主な疾患・87	
8 ■ ピースハウスが主治医で, 当ステーション利用者の亡くなった場所・88	
9 ■ まとめ・88	
学会参加活動	89
会 員	90
1 ■ 健康教育サービスセンター会員・90	
2 ■ 健康教育サービスセンター団体会員・90	
3 ■ 財団団体維持会員・90	
4 ■ 財団個人維持会員・91	
5 ■ 「維持会員の集い」から・91	
6 ■ 「新老人の会」会員の動向・92	
役 員	94
財団報告	95
1 ■ 評議員会・理事会報告・95	
2 ■ 寄附・96	
3 ■ フレンドの会・96	
4 ■ 第22回 LPC バザー・96	
5 ■ 第25回 LPC 美術展・97	
6 ■ 『研究業績年報 (2006)』 (27) の発行・97	
7 ■ memento mori 2007の開催・97	
8 ■ ボランティアグループの活動・97	
9 ■ LPC ボランティア研修会・99	
10 ■ ボランティアクリスマス会・99	
11 ■ ボランティア表彰式・100	



はしがき

理事長 日野原 重明

21世紀に入って早7年が経過し、当財団も設立以来34年を経過したことになります。本誌において2007年度に当財団の各部署が取り組んだ活動について報告いたしますので、みなさまにぜひご一読いただきたいと思ひます。

まず、港区三田のライフ・プランニング・クリニックについてですが、一般診療、総合健診（人間ドック）、集団健診ともに受診者数が増加に転じてきました。2008年4月1日から実施される「高齢者の医療の確保に関する法律」による特定健診および特定保健指導においては、これまで当クリニックが推進してきた予防的・教育的医療で培ってきた知識や経験を生かし、なお一層受診者の側に立った効果的診療を提供したいと考えています。

ピースハウス病院、訪問看護ステーション千代田（千代田区平河町・砂防会館内）と訪問看護ステーション中井（神奈川県中井町・ピースハウス病院内）においても、地域のニーズをよく汲み取り、住民の支持をいただいている様子がうかがえます。日本の医療経済が緊迫している中であって、ピースハウス病院、訪問看護ステーション中井の健闘はスタッフの努力によるものと感謝しています。そしてまた、訪問看護ステーション千代田は、都心の夜間人口の減少と著しい高齢化・単身世帯の中にあって、新しい都市型訪問看護の活動形態を模索しているところですが、いずれこれからの在宅医療のあり方について現場からの提言ができるものと期待しています。

さて、千代田区平河町の砂防会館にある健康教育サービスセンターの活動ですが、2007年度は私が現地の小学校（一部中学校、父兄）に出向いて授業する「いのちの教室」が48回にも及びました。本誌にも訪問校の一覧を掲載しましたが、全校生徒数わずか8名の岡山県高倉小学校と同じく13名の宇治小学校の全校生徒合わせて21名を対象とした授業から、平塚市の市立湊小学校・太洋中学校全校生徒900名の体育館での授業まで、そして、米国フィラデルフィア市の日本人補習校やメキシコ市の日本人小学校でも授業を行うなど、私にとっても初めての体験をいくつも重ねることができ、あわせてこれからの世界を担う小学生・中学生の素晴らしい可能性に気づかされ、たいへん頼もしく感じた次第です。また、2007年度に実施した国際ワークショップの一つは「いのちの畏敬と生命倫理 医療・看護の現場でもとめられるもの」というもので、アフリカのガボン共和国のシュバイツァー病院の管理責任者をしておられるハーバード大学のフォロー準教授、木村利人恵泉女学園大学学長、そして手島恵千葉大学大学院教授を迎えて開催しました。また、ピースハウスホスピス教育研究所で設立以来開催している「ホスピス国際ワークショップ」の主題も「ホスピス緩和ケア 東洋と西洋の対話 - スピリチュアリティと倫理に焦点を当てて - 」というものでした。これらの企画にみられるように、当財団の目指すところも医療・保健の究極の目標は「いのちへの尊厳」であるということ、そしてそのために私たちは何をなすべきなのかということ、今の時代にあって改めて問い直すよい機会となったのではないかと思います。

そして、活動に大きな勢いをつけたのが「新老人の会」です。2000年9月の発足以

来7年半が経過しましたが、6,000名余の会員数と全国の22支部は、今盛んに細胞分裂のような増殖を繰り返しているところです。特に地方支部の主催する「新老人講演会」は、その地方会員の息の合った企画にみられるように、いずれも地方色豊かな演奏会、合唱、フラダンスなどと私の講演とがコラボレーションされ、1,000名を超す聴衆を集めるところも少なくありません。願わくばこれらの会に参加された方々みなさんに、シニア、ジュニア、あるいはサポート会員として「新老人の会」を盛りたてていただけるように、積極的な勧誘とあわせ、魅力的な活動内容の充実とを図っていかねばならないと思っています。

私は1911年10月の生まれですから、2008年10月には97歳を迎えることとなります。私の父が私に語ってくれたように、「天にできるだけ大きな円を描け。そして自分はその円の一部のアーチ（弧）となれ」（ブラウニングの詩の一節）を胸に、当財団の将来を大きく思い描いていきたいと思えます。

どうぞ当財団の活動に関心をお寄せいただき、今後とも引き続き応援していただくように心からお願いしたいと思います。

2008年5月



ライフ・プランニング・センターのあゆみ

* 1973年度から2003年度までの年表は『財団法人ライフ・プランニング・センター30年の軌跡 - 私たちは何を指して歩んできたか』に詳述しましたので、本年報ではその間のあゆみを略記しました。

年	月 日	事 項
1973	4. 3	財団法人ライフ・プランニング・センターが厚生省より公益法人として認可取得
	4. 19	附属診療所アイピーシークリニック，東京都麹町保健所より開設許可取得
1974	4. 20	財団設立1周年記念講演会開催（以降毎年開催）
1975	5. 24	アイピーシークリニックを笹川記念会館に移転
	7. 3 - 5	第1回「医療と教育に関する国際セミナー」を開催（以降1996年まで毎年開催）
	10. 1	砂防会館に健康教育サービスセンターを開設
	12.	機関誌「教育医療」発行開始
1976	7. 5 - 16	第1回「国際ワークショップ」を開催（以降毎年開催，1997年より国際セミナーと統合）
	9. 20	平塚富士見カントリークラブ内にフジカントリークリニックを開設
1977	7. 1	アイピーシークリニックをライフ・プランニング・クリニックと改称
	8. 24	第1回「LP会員の集い」を開催（以降毎年開催）
1979	2. 18	第1回「医療におけるPOSシンポジウム」を開催（「日本POS医療学会」として独立）
	3. 3	「たばこをやめよう会」スタート
1980	2. 2	米国で開発されたハーベイシミュレーターを日本で初めて設置，心音教育プログラムスタート（1999年5月に新しいハーベイシミュレーターを設置）
1981	9. 10	血圧測定師範コースを開講
	10. 16	「健康ダイヤルプロジェクト事業部」発足
1982	4. 1	「医療におけるボランティアの育成指導」事業開始
1983	11. 7	WHO事務総長ハーフダン・マラー博士を招聘，「生命・保健・医療シンポジウム」を開催
1984	3. 1	笹川記念会館10階にLP健康教育センターを新設，運動療法の指導を開始
1985	12. 1	「ピースハウス（ホスピス）準備室」を設置
1986	2. 5	第1回「ボランティア総会」開催
1987	10. 1	笹川記念会館の11階を拡張，10階のLP健康教育センターを移転
1989	4. 20	ピースハウス後援会解散，募金2億5,989万円をピースハウス建設資金として財団が継承
1991	9. 15	神奈川県中井町にピースハウス建設予定地約2,000坪の賃貸借契約締結
1992	2. 3	神奈川県医療審議会，ピースハウス建設を了承
	3. 31	ピースハウス開設にかかわる寄付行為を改正，厚生省の認可取得
	6. 24	ピースハウス病院，神奈川県の開設許可取得
	11. 2	ピースハウス病院，建築確認取得・着工
1993	4. 19	ライフ・プランニング・クリニック，新コンピュータシステムテストラン開始，5月6日，本稼働開始
	5. 15	財団設立20周年記念講演会「心とからだの健康問題のカギ」をシェーンバッハ砂防で開催
	8. 27	ピースハウス病院竣工式
	9. 23	ピースハウス病院開院式および創立20周年記念式典をピースハウス病院で開催
	12. 28 - 30	第1回ホスピス国際ワークショップ「末期癌患者の疼痛緩和および症状のコントロール」をピースハウスホスピス教育研究所で開催（以降毎年開催）
1994	1. 18	創立20周年記念職員祝賀会を笹川記念会館で開催

年	月 日	事 項
	2 . 1	ピースハウス病院, 厚生省より緩和ケア病棟認可, 神奈川県より基準看護, 基準給食, 基準寝具承認取得
	4 . 16	第20回財団設立記念講演会「人間理解とコミュニケーション」をシェーンバツハ砂防で開催
	9 . 23	ピースハウスホスピス開院 1周年記念式典開催
1995	3 . 3 - 5	第 1 回アジア・太平洋地域ホスピス連絡協議会を国際連合大学で開催
	5 . 13	第21回財団設立記念講演会「患者は医療者から何を学び, 医療者は患者から何を学ぶべきか」をシェーンバツハ砂防で開催
1996	5 . 18	第22回財団設立記念講演会「医療と福祉の接点」をシェーンバツハ砂防で開催
1997	5 . 17	第23回財団設立記念講演会「今日を鮮かに生きぬく」を聖路加看護大学で開催
	11 . 13	砂防会館内に「訪問看護ステーション千代田」を開設
1998	5 . 16	第24回財団設立記念講演会「私たちが伝えたいこと, 遺したいこと」を千代田区公会堂で開催
1999	4 . 1	神奈川県足柄上郡中井町に「訪問看護ステーション中井」を開設
	5 . 15	第25回財団設立記念講演会「老いの季節...魂の輝きのとき」を千代田区公会堂で開催
	8 . 21	日本財団主催ホスピスセミナー「memento mori 長崎1999」を長崎ブリックホールで笹川医学医療研究財団と共催
2000	5 . 20	第26回財団設立記念講演会「明日をつくる介護」を千代田区公会堂で開催
	9 . 24	日本財団主催ホスピスセミナー「memento mori 香川2000」を高松市民会館で笹川医学医療研究財団と共催
	9 . 30	「新老人の会」発足。発足記念講演会「輝きのある人生をどのようにして獲得するか」を聖路加看護大学で開催
	10 . 17	日本財団主催ホスピスセミナー「memento mori 静岡2000」を浜名湖競艇場で笹川医学医療研究財団と共催
2001	2 . 23	厚生労働省から評議員会の設置が認可された評議員会設置等に係る寄附行為変更について, 厚生労働省の認可を取得
	5 . 19	第27回財団設立記念講演会「伝えたい日本人の文化と心」を千代田区公会堂で開催
	8 . 9	日本財団主催ホスピスセミナー「memento mori 三重2001 - 『死』をみつめ, 『今』を生きる - 」を津競艇場「ツッキードーム」で笹川医学医療研究財団と共催
	8 . 18 - 19	音楽劇「2001フレディ - いのちの旅 - 」東京公演を五反田ゆうぼうとで開催
	8 . 22	音楽劇「2001フレディ - いのちの旅 - 」大阪公演を大阪フェスティバルホールで開催
	10 . 7	日本財団主催ホスピスセミナー「memento mori 宮城2001 - 『死』をみつめ, 『今』を生きる - 」を仙台国際センターで笹川医学医療研究財団と共催
	10 . 8	「新老人の会」設立 1周年記念講演会「『いのち』を謳う」を千代田区公会堂で開催
2002	6 . 2	日本財団主催セミナー「memento mori 北海道2002 - 『死』をみつめ, 『今』を生きる - 」を旭川市民文化会館で笹川医学医療研究財団と共催
	6 . 22	日本財団主催セミナー「memento mori 広島2002 - 『死』をみつめ, 『今』を生きる - 」を宮島競艇場イベントホールで笹川医学医療研究財団と共催
	6 . 29	第28回財団設立記念講演会「いのちを語る——生と死をささえて語り継ぎたいもの」を千代田区公会堂で開催
2003	3 . 31	フジカントリークリニックを閉鎖
	6 . 7	ホスピスセミナー「memento mori 島根 - 『死』をみつめ, 『今』を生きる - 」を松江市総合文化センターで日本財団, 笹川医学医療研究財団と共催
	6 . 11	財団設立30周年記念講演会「魂の健康・からだの健康」並びに30周年記念式典・感謝会を笹川記念会館で開催
	7 . 6	ホスピスセミナー「memento mori 埼玉 - 『死』をみつめ, 『今』を生きる - 」を戸田市戸田競艇場で日本財団, 笹川医学医療研究財団と共催
	8 . 9 - 10	LPC 国際フォーラム「高齢者医療の新しい展開 - 健康の維持, 増進から終末期医療まで - 」を

年	月 日	事 項
		聖路加看護大学で開催
	8. 31	ホスピスセミナー「memento mori 富山 - 『死』をみつめ、『今』を生きる -」を富山国際会議場で日本財団、笹川医学医療研究財団と共催
	9. 13	「新老人の会」設立3周年記念講演会「21世紀を“いのちの時代”へ」を千代田区公会堂で開催
	9. 20	ホスピスセミナー「memento mori 山口 - 『死』をみつめ、『今』を生きる -」を下関市下関競艇場で日本財団、笹川医学医療研究財団と共催
	10. 5	ピースハウスホスピス開設10周年記念講演会をラディアン（二宮町生涯学習センター）で開催
2004	2. 14 - 15	第11回ホスピス国際ワークショップ「ホスピス緩和ケア その実践と教育 - ニュージーランドとの交流 -」をピースハウスホスピス教育研究所で開催
	5. 29	財団設立記念講演会「心に響く日本の言葉と音楽」を千代田区公会堂で開催
	6. 19	セミナー「memento mori 青森 - 『死』をみつめ、『今』を生きる -」をぱ・る・るプラザ青森で日本財団、笹川医学医療研究財団と共催
	7. 4	セミナー「memento mori 福岡 - 『死』をみつめ、『今』を生きる -」を若松競艇場で日本財団、笹川医学医療研究財団と共催
	8. 28 - 29	LPC 国際フォーラム「ナースによるフィジカルアセスメントの実践」を聖路加看護大学で開催
	9. 11	第2回全国模擬患者学研究大会「模擬患者学の目指すもの」を聖路加看護大学で開催
	9. 19	セミナー「memento mori 滋賀 - 『死』をみつめ、『今』を生きる -」を滋賀会館で日本財団、笹川医学医療研究財団と共催
	10. 30	セミナー「memento mori 新潟 - 『死』をみつめ、『今』を生きる -」を新潟テルサで日本財団、笹川医学医療研究財団と共催
	11. 16	「新老人の会」4周年記念秋季特別講演会を赤坂区民センターで開催
2005	2. 11 - 12	第12回ホスピス国際ワークショップをピースハウスホスピス教育研究所で開催
	5. 8	財団設立記念講演会「今こそいのちの問題を考えよう」を銀座プロッサム（中央会館）で開催
	6. 26	セミナー「memento mori 福井」 - 『死』をみつめ、『今』を生きる -」を福井県民会館で日本財団、笹川医学医療研究財団と共催
	7. 23	セミナー「memento mori 宮崎」 - 『死』をみつめ、『今』を生きる -」を宮崎市民プラザで日本財団、笹川医学医療研究財団と共催
	8. 6	LPC 国際フォーラム・全国模擬患者研究大会合同企画「医学・看護教育における模擬患者の活用」を聖路加看護大学で開催
	9. 17	セミナー「memento mori 徳島」 - 『死』をみつめ、『今』を生きる -」を鳴門市文化会館で日本財団、笹川医学医療研究財団と共催
	10. 9	セミナー「memento mori 山梨」 - 『死』をみつめ、『今』を生きる -」を山梨県民文化ホールで日本財団、笹川医学医療研究財団と共催
	10. 15	「新老人の会」5周年記念講演会を銀座プロッサム（中央会館）で開催
2006	2. 4 - 5	第13回ホスピス国際ワークショップ「緩和ケアの可能性 - 特別な場所・対象を越えて -」をピースハウスホスピス教育研究所で開催
	5. 27	財団設立記念講演会「私たちが、いま呼びかけるおとなから子供たちへ——いのちの循環へのメッセージ」を銀座プロッサム（中央会館）で開催
	6. 17	セミナー「memento mori 岩手」 - 『死』をみつめ、『今』を生きる -」を岩手教育会館で日本財団、笹川医学医療研究財団と共催
	7. 8 - 9	LPC 国際フォーラム「マックマスター大学に学ぶ医師、看護師、医療従事者のための臨床実践能力の教育方略と評価」を女性と仕事の未来館ホールで開催
	7. 22	セミナー「memento mori 岡山」 - 『死』をみつめ、『今』を生きる -」を倉敷市児島文化センターで日本財団、笹川医学医療研究財団と共催
	9. 23	セミナー「memento mori 兵庫」 - 『死』をみつめ、『今』を生きる -」を兵庫県看護協会と日本財団、笹川医学医療研究財団と共催

年	月 日	事 項
	10. 7	セミナー「memento mori 栃木」 - 『死』をみつめ、『今』を生きる -」を栃木県教育会館で日本財団、笹川医学医療研究財団と共催
	10. 22	「新老人の会」6周年記念講演会をシェーンバツハ砂防で開催
2007	2. 3 - 4	第14回ホスピス国際ワークショップ「エンドオブライフケアと尊厳」をピースハウスホスピス教育研究所で開催
	3. 22	ホスピスデイケアセンター竣工式を執り行う
	4. 22	日本財団主催セミナー「memento mori 広島」 - 『死』をみつめ、『今』を生きる -」を広島エリザベト音楽大学セシリアホールで笹川医学医療研究財団、「新老人の会」山陽支部、広島女学院、シュバイツァー日本友の会と共催
	6. 2	財団設立記念講演会「いのちの語らい - 生かされて今を生きる」を日本財団主催セミナー「memento mori 東京」を兼ねて東京国際フォーラムC会場で笹川医学医療研究財団と共催
	6. 16	日本財団主催セミナー「memento mori 埼玉」 - 『今』を生きる～いのちを学び、いのちを伝える～」を秩父市歴史文化伝承館で笹川医学医療研究財団と共催
	7. 18 - 19	「新老人の会・あがたの森ジャンボリー」を松本市で開催
	7. 21	日本財団主催セミナー「memento mori 石川」 - 『死』をみつめ、『今』を生きる -」を金沢市文化ホールで笹川医学医療研究財団と共催
	8. 10 - 11	LPC 国際フォーラム「いのちの畏敬と生命倫理 - 医療・看護の現場で求められるもの -」を女性と仕事の未来館で開催
	10. 14	日本財団主催セミナー「memento mori 秋田」 - 『死』をみつめ、『今』を生きる -」を秋田市文化会館で笹川医学医療研究財団と共催
	11. 11	「新老人の会」7周年記念講演会をシェーンバツハ砂防で開催
2008	2. 2 - 3	第15回ホスピス国際ワークショップ「ホスピス緩和ケア 東洋と西洋の対話 - スピリチュアリティと倫理に焦点をあてて -」をピースハウスホスピス教育研究所で開催



健康教育活動

当財団は2008年5月には発足35年目を迎えるが、当初より健康教育は一般の方々と医療職を対象としており、一般の方々が聴診器を用いて自分の血圧を測定するという「血圧自己測定」を推進していたが、その運動は現在も継続されており、ボランティア講座やヘルパー養成講座受講生にとって自分のバイタルサインを医療職と同様の手技で測定する方法が学べると評判が高い。このように歴史のある講習会に加えて、「いのちの授業」を健康教育分野の活動に組み入れて取り組んだことは2007年度の特記すべき事業となった。

今や、健康とは身体に疾患がないだけでなく精神的にも健全であることといわれるが、それを実現させるには、いのちの意味、いのちの価値をどのように扱っていくかが、子供から大人までにとっての課題である。これに応えるべく日野原理事長の「いのちの授業」の内容を収録したDVDを、本年度はmemento mori事業の中で作成し、次年度はこれを用いた教職向けのワークショップを展開することが予定されている。

さらに、厚生労働省の委託事業として「がんのリハビリテーション」事業を事務局としてサポートした。この事業は2007（平成19）年度のがん推進事業を受けて行われたもので、がん患者の療養生活のQOLを高めるために、早期にそして体系づけられたリハビリテーションの実施を目指すための事業である。「がんのリハビリテーションの実践の研修会」として、ピースハウス病院とともにがん医療従事者の教育の場として貢献できる活動として今後の発展が期待される。

所在地：東京都千代田区平河町2-7-5 砂防会館5階

I 第34回財団設立記念講演会 「いのちの語らい 生かされて今を生きる」

日時 2007年6月2日(土) 13:30~16:30
会場 東京国際フォーラムホールC
主催 日本財団
 (財)笹川医学医療研究財団
 (財)ライフ・プランニング・センター
講師 日野原重明 (当財団理事長)
 星野 富弘 (詩人・画家)
参加者数 1,528名

プログラム

- 13:30~13:40 開会のことば
.....三浦 一郎 (日本財団常務理事)
- 13:40~14:00 合唱 コーラス (LPC 混声合唱団)
中館 伸一 (指揮)
星野富弘さんの作品と初演コーラスの
コラボレーション
「たんぼぼ」
「母の手 (ばら・きく・なずな)」
- 14:00~15:00 対談
生かされて今を生きる
.....星野 富弘 vs 日野原重明
- 15:20~16:20 講演
いのちのめぐみに応える
.....日野原重明
- 16:20~16:30 閉会のことば

設立記念講演会

星野富弘さんと日野原先生の対談は大きな感動を呼んだ



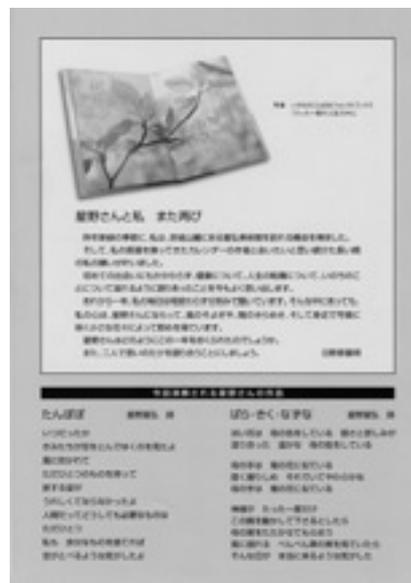
……紀伊國献三（笹川医学医療研究財団専務理事）

2006年春、群馬県みどり市の富弘美術館での対面から1年後の2007年6月、再び財団設立記念と memento mori 事業共催の講演会として、星野富弘さんと日野原理事長の対談が実現した。1年前の対談以来星野さんになって、風のそよぎや身近で可憐に咲く小さな花々によって慰めを得ているという日野原理事長の言葉に星野さんは「木とか草というのは、私も動けない、彼らも動かない、何となく同じ仲間のような気がします。しかし、今私は動けないけれども、そのことが不自由ということではなく、心が動かないことの方が大変だという気がするのです。そして、「私に心が動くということを感じさせてくれたのが、絵を描いたり、文章を書いたりすることなのです」と語られた。文字を書き始めたきっかけについては、「ただ口を開けて食べさせてもらうだけの存在だった自分に最初に筆記用具を口にくわえて文字を書くきっかけを与えてくれたのは看護学生であり、最初の一文字が書けた時に、何か光が見えてきた。とにかく将来のことが考えられるようになってきた」と、その時の心の動きを話された。

「『初めに言葉ありき』と聖書にあります、書かれた言葉があなたの魂にタッチするというような感じなのでしょうね」と日野原理事長が尋ねると、「それまでは自分の力で生きているのではないかと錯覚していたところがあったのが、今の医学ではこの体はどうしようもない。そう思った時に、何か大きなものに委ねたい、この体を委ねたい、助けてもらいたい、そんな気持ちになりました」と、星野さんは当時の心の葛藤を振り返られた。最後に、日野原理事長が、「あなたがこれから5年間、さらに元気を續けて作品ができる、5年先となれば私は100歳になります。そこでもう一度、みなさんにこのように2人でお会いできればと思っています」と講演会での再会を述べると、「そうですね、またぜひお会いしたいと思います」と星野さんも応じ、このまたとない貴重な対談を締めくくった。

以下にアンケートにつづられた参加者の声の一部を紹介したい。

- ・お二人がお元気で語られるのを聞き元気をいただけた。
- ・お二人とも素敵に生きていらっしゃる。その生き方に感動しました。
- ・信仰に基づく人生の意義と目的を解りやすく、ご自分の体験を含めておっしゃいました。



当日のプログラムから

- ・お二人とも笑顔でユーモアたっぷり、生きる希望を頂きました。明るく語り合う「生」が印象深かった。
- ・和やかな中にも、星野先生のすばらしい人生経験（苦しみの中）からの強い生き方を教えられ感謝です。日野原先生の聞き役も大変素晴らしい。
- ・高いテーマと笑い（スマート）と和やかさで語られたこと、生きていることはすばらしい、喜びは人をいきいきとさせる。
- ・ユーモアに溢れたお2人のお話も楽しく引き込まれると共に笑顔の素晴らしさも見習いたい。
- ・お2人とも心豊かで生かされていることを自分でも実感。
- ・お2人の年齢を超えた暖かい会話の端々に今更ながら命の大切さ、生きることの大切さを学ばせていただきました。

2 「いのちの教室」活動

1) いのち・家族を考える

日時 2007年10月19日(金) 10:00~12:30

会場 健康教育サービスセンター

講師 袖井 孝子 (お茶の水女子大学名誉大学)
日野原重明 (当財団理事長)

参加者数 56名

「利便性を優先させた社会環境が子供たちを取り巻く環境に大きな変化を与えている」と講師の一人である袖井孝子講師は導入で語り、また、核家族によって家族間のつながりの意識が薄れ、家族の概念もあいまいになってきているとも指摘した。こうした中、子供の自殺、虐待、いじめ、殺人といったことが世間を騒がせているが、昔と違ってその動機がはっきりしないことが現代の事件の特徴であるという。このようにいのちが軽く扱われる

2007年度「いのちの授業」



湯野小学校 (山口県) からのプレゼント



2007年9月13日 横浜市立駒林小学校



2007年11月15日 山口県湯野小学校



2007年9月12日 日本女子大学付属豊明小学校



2008年2月21日 中央区立明石小学校



2007年11月19日 岡山県吉備高原小学校

ような時代では子供たちにいのちの大切さを伝えることが最も重要であるといえる。一方、おとなにとっても死に接する機会は少なくなっており、年齢にかかわらず「いのちの教育」が必要な時代になったといえる。さらにいのちの大切さを知ることは「平和な社会」をつくることに結びつくことでもあることの認識を深めて、社会全体で取り組んでいきたいと講演の中で訴えられた。

2) 各学校を訪問しての「いのちの授業」

2007年度は48校を訪問し、「いのちの授業」を行った。45人ークラスの少人数授業から全校300名の講演まで、全国を巡り直接子供たちに「いのちはどこにあるの?」「自分の時間を人のために使うということ」「大切なものは目に見えない」などについて語りかける対話的進行で、いのちの大切さ、いのちの使い方を話された。

次ページにこれまでの訪問学校の一覧を記す(表中のAMIかけ部分は2007年度実施分)。



2007年 5月 7日 世田谷区立八幡小学校



2007年 8月 18日 メキシコシティ日本メキシコ学院



2008年 2月 26日 世田谷区・和光小学校



2007年 5月 26日 フィラデルフィア補習校



2007年 7月 3日 中央区城東小学校



2007年 7月 14日 浜松市立有玉小学校

「いのちの授業」訪問学校一覧

暦年	No.	学校名	都市・地方名							海外 国名	参加 者数	父兄数	印は LPC主催
			九州	中国	四国	近畿 神戸	中部	関東	東北				
1987	1	神戸市立諏訪小学校											
1988	2	私立和光鶴川小学校							鶴川				
2003	3	御茶ノ水女子大付属小学校							東京		38		
2004	4	子どものための日本文化教室							東京				
	5	府中第十小学校							府中				
	6	武蔵野学園小学校(府中市)							府中		70		
2005	7	中央区明石小学校							東京				
	8	子どものための日本文化教室							東京				
	9	松本市立五常小学校							松本		37		
	10	広島市立牛田小学校		広島									
2006	11	福岡県箕子小学校・玄海小学校	福岡										
	12	札幌市山の手南小学校								札幌			
	13	子どものための日本文化教室							東京				
	14	大阪教育大学附属池田小学校						池田					
	15	百合学院小学校(尼崎市)						尼崎			60		
	16	仙台市立通町小学校								仙台	68		
	17	名古屋市立星が丘小学校						名古屋			35		
	18	桐朋小学校(国立市)							国立				
	19	青山学院初等部							東京				
	20	府中市立府中第十小学校							府中				
	21	オーストラリア・シドニー日本人学校 Sydney Japanese School										323	
	22	オーストラリア・メルボルン・コーフィールドスクール Caulfield Primary School									オーストラリア	120	
	23	杉並区桃井第4小学校							東京		オーストラリア	50	
2007	24	自由学園							東京		120		
	25	学習院初等科							東京		790		
	26	豊島区立目白小学校							東京		99		
	27	練馬区立上石神井小学校							東京		300		
	28	東洋英和女学院小学部							東京		480		
	29	学芸大学附属世田谷小学校							東京		117		
	30	神戸海星(かいせい)学院小学校						神戸			44		
	31	聖心女子学院初等科							東京		84		
	32	東京学芸大学附属小金井小学校							小金井		160		
	33	秦野市立渋沢中学校							秦野		150		
	34	和光小学校							和光		65		
	35	姫路市立英賀保小学校						姫路			38		
	36	滋賀県高島私立今津東小学校						今津			110		
	37	神戸市立小東山小学校						神戸			139	200	
	38	福島市立福島第四小学校								福島	32		
	39	慶應義塾大学「生命の教養」							東京		70		
	40	世田谷区立八幡小学校							東京		70		
	41	芦屋市立岩園小学校						芦屋			120		
	42	フィラデルフィア補習校									米国	89	
	43	富山市立東部小学校						富山					
	44	慶応幼稚舎							東京		244		
	45	渋谷区立中幡小学校							東京		113		
	46	北海道大学附属函館小学校								函館	160		
	47	中央区立城東小学校							東京		20		
	48	久山町(久原・山田)小学校									216		
	49	筑前町・町内4校合同	福岡								295		
	50	滑川市立寺家(じけ)小学校	福岡								42	100	
	51	高岡市立下関(しもげき)小学校						富山			105	100	
	52	蒲田ルーテル幼稚園						富山		東京	102	200	
	53	浜松市立有玉小学校							浜松		38	10	
	54	講演会「95歳の私から10歳のきみたちへ」								東京			
	55	諏訪市立湖南小学校								諏訪	30		
	56	全国の小学生向き 光の家(飯田橋)								東京			
	57	福島市立飯坂小学校								福島	47		
58	桑名市立大山田北小学校							伊賀		43			
59	日本女子大学付属豊明小学校							東京		120	50		
60	横浜市立駒林小学校							横浜		170	30		
61	宮崎市広瀬小学校	宮崎								77			
62	八王子市立みなみ野君田小学校							八王子		361			
63	熊本市立託麻西小学校	熊本								470			
64	啓明学園								昭島	330			
65	山口県湯野小学校		山口							79			
66	岡山県吉備高原小学校						吉備			31			
67	岡山県高梁市立宇治小学校						高梁			32			
68	平塚市立港小学校・太洋中学校								平塚	590	300		
69	立教小学校(池袋)								東京	120			
70	立教中学高校(新座市)								新座		500		
71	鹿児島市立田上小学校		鹿児島							94			
72	静岡県磐田市立磐田中部小学校								磐田	206			
73	埼玉県所沢市清進小学校								埼玉	112	100		
74	伊丹市立鈴原小学校							伊丹		40	250		
75	静岡県立沼津豊学校							沼津		50			
76	学習院幼稚園・初等部(父兄のみ)								東京	0	200		
77	中央区明石小学校								東京	64	30		
78	和光小学校								和光	70	100		
79	江戸川区立下小岩小学校								東京	59	20		
80	青山学院初等部								東京	120	100		
81	桐朋学園小学校(仙川)								東京	72			
82	姫路市荒川小学校							姫路		33			
83	田園調布双葉中学・高校								東京	120			
84	秋田県上小阿仁小・中学校								秋田				

8,876 2,290 合計11,166

3 専門職セミナー・講演会

1) ナースのためのフィジカルアセスメント

講座「基礎から学ぶフィジカルアセスメント」

第1回

日時 2007年5月12日(土) 10:00~16:00

講師 徳田 安春 (聖路加国際病院副院長, ライフサイエンス臨床実践研究推進センター副センター長)

参加者数 67名

プログラム 身体の診方, バイタルサインの評価(1)・全身の診方, バイタルサインの評価(2)

第2回

日時 2007年5月19日(土) 10:00~16:30

講師 馬島 徹 (化学療法研究会化研病院呼吸器センター部長, 国際医療福祉大学教授)

参加者数 61名

プログラム 呼吸器総論・胸部の打診・胸部の聴診

第3回

日時 2007年5月20日(日) 10:00~16:30

講師 宮川 哲夫 (昭和大学大学院保健医療学研究科呼吸ケア領域教授)

参加者数 58名

プログラム 呼吸リハビリテーション - 最新の知見と近年の動向科・EBMに基づく排痰法他・スクイーピング実習

第4回

日時 2007年11月17日(土) 10:00~15:00

講師 竹中 星郎 (元浴風会病院副院長, 放送大学客員教授)

参加者数 71名

プログラム 精神症状と異常行動を考える・異常行動と問題行動のケアと治療

第5回

日時 2008年1月26日(土) 10:00~15:00

講師 富山 博史 (東京医科大学循環器内科准教授)

参加者数 55名

プログラム 血圧と脈拍・不整脈・心不全 (ハーベイドールを用いたシミュレーション)

日野原重明理事長は既に30年前からこれからのナースに必要なのは「フィジカルアセスメント」能力であり、ナースがもっと積極的に診断に参加すべきであると提唱された。しかしながらナースの教育にフィジカルアセス

メントが取り上げられるようになったのは1980年代に入り、在宅医療や臨床の現場でナース独自の判断を専門家として問われるようになってからである。在宅医療の現場でナースは主治医や介護者、家族などとチームを組んでケアにあたり、患者の病態の変化に臨機応変に対応しなければならない。フィジカルアセスメント能力はインタビュー、身体所見などから得られた情報を統合して分析査定する知識と技術であり、そのようなフィジカルアセスメントに基づくナースの判断能力は患者により良いケアを提供するためには不可欠である。

当講座は1996年にナースのフィジカルアセスメントを向上させることを目標に「在宅ケアに必要なフィジカルアセスメントとケアの実際」として7年間行われた夜の講座を、新たに「基礎から学ぶフィジカルアセスメント」とタイトルを変更し、基礎的なフィジカルアセスメントの知識の向上と技術の習得を目標にした。春の講座として5月に3回、秋の講座として11月に1回、冬の講座として1月に1回計5回開催した。土、日の開催とし、どの講座も前半を講義、後半を模擬患者やハーベイなどシミュレーターを駆使しての実習を中心に組み立て、受講生には満足度の高い内容となった。講師陣には臨床の第一線で活躍中の医師をそろえ、どの講師も独自の資料を用意され、熱心に講義、指導していただいた。

「バイタルサインの評価」ではバイタルサインの異常、例えば血圧の低下からそれをショックと診断するには末梢循環不全が伴っているか否か、また頸動脈が虚脱しているか、怒張しているか、視診と触診で低容量性のショックか、血管拡張性のショックか、閉塞性のショックか、心原性のショックかが分かること。また38.5度以上の発熱は悪寒戦慄を伴うと敗血症を示唆することなど、在宅で検査ができなくても視診や触診、聴診によって多くの情報が得られ、的確なアセスメントができることを学んだ。

「呼吸器総論」では模擬患者を活用し、聴診の技術と肺音を実際に聞き分ける練習を行った。呼吸リハビリではEBMに基づいたスクイーピングの理論を学び、経験と勘にたより行われていた看護技術には根拠のないものが多く、エビデンスに基づいたケアのあり方の重要性が示された。スクイーピングの技術については、講師が受講生の一人一人の手を取り教授していただいた。

秋の講座は受講生からリクエストの多い「認知症の理解とケアのあり方について」竹中星郎先生より講義していただいた。受講対象者を介護職まで広げ、認知症の患

者によく見られる特徴的な徘徊や弄便、夕方症候群といった症状が周囲の正しい疾患の理解と対処の仕方での認知症という疾患を抱えながらも穏やかに過ごしていけることを、具体例をいくつも挙げて強調された。夕方症候群や徘徊は患者さんが自分の居場所がどこかわからなくなる見当識障害が根本にあり、安心できる居場所と周囲の温かい見守りで解決していくこと、また認知症の患者に訓練としてたとえば洋服の着せ方や整理をさせようとするのが患者の心理的な圧迫となり弄便などの症状が出ることなど話された。また介護の現場では高齢者によく起こるせん妄が認知症と混同され、現在、認知症と診断され施設に入所している高齢者の中に一時的なせん妄の患者が多くいることなど、介護の現場での現実を考えさせられる講座でもあった。

冬の講座としてはこれも要望の高い循環器を取り上げ、対象も介護職を含め幅広く募集した。血圧・脈拍・心音の聴取などいずれも日常の現場ですぐに活用できる基本的・実践的な内容で行われた。受講者からは「心音を今まで聞くことはなかったし、心拡大も心尖拍動を触れてみることはなかったのでとてもよい勉強になった」「今まで拡張期血圧がどうしても聞こえないのが疑問に思っていたことがよく分かった」などの評価が得られ、基本に振り返りの多い講座となった。

2) 地方看護セミナー

「新時代のナースに求められるフィジカルアセスメント」と題し、広島と大阪で開催した。

日野原重明理事長は現在の看護のあり方が誤った古い固定概念がブレーキとなって非合理的な教育体制が続いており早急に革新されなければならないと力説された。その一つが基礎看護学がいまだに古い非効率な方法で初心者には教えられており、先輩から教えられた古い知識や技術が再検討されることなく若手に伝授されていることは大きな問題であると指摘された。また現在社会問題となっている医師不足のことも触れられ、ナースがフィジカルアセスメント能力を身につけ、診断に参加して小児科の専門ナースとして働いたり助産師が主体的に出産に携わることで医師不足を解消できるのではないかと述べられた。

広島では名古屋大学医学部教授山内豊明教授に「呼吸・循環のみかたのポイント」について、大阪では聖路加国際病院内科副院長の徳田安春先生に「バイタルサインの異常からアセスメントできること」について講義いた

いた。両講師とも分かりやすくフィジカルアセスメントの方法について講義された。受講者から「目からうろこであった」、「看護の役割を自分なりにもう一度考えてみたい」、「これからはドクターの介助をするだけではなくエビデンスに基づいた診断ケアを行っていかなければならないと思いました」、「明日から実践していきます」と多くの刺激を日野原理事長や講師から受けたセミナーであった。

広島セミナー

日時 2007年6月17日(日) 13:00~16:15

会場 広島市東区民文化センター

講師 日野原重明・山内 豊明

参加者数 415名

プログラム

- ・新時代のナースに求められるフィジカルアセスメント
.....日野原重明 (当財団理事長)
- ・呼吸循環のみかたのポイント
.....山内 豊明 (名古屋大学医学部教授)

大阪セミナー

日時 2008年2月23日(土) 13:00~16:15

会場 クレオ大阪北

講師 日野原重明・徳田 安春

参加者数 394名

プログラム

- ・新時代のナースに求められるフィジカルアセスメント
.....日野原重明 (当財団理事長)
-徳田 安春 (聖路加国際病院副院長、ライフサイエンス臨床実践研究推進センター副センター長)

4 一般セミナー

1) 障害があっても、豊かに暮せる社会をめざそう「認知症の正しい理解」

日時 2007年4月18日(水) 13:00~15:30

会場 健康教育サービスセンター

講師 吉井 文均 (東海大学医学部神経内科教授)

参加者数 60名

高齢化が進むわが国では、何らかの介護や支援を必要とする認知症の高齢者は2025年には323万人に達する(厚生労働省)といわれている一方で、いまだに認知症を病

気ではなく単なる老化現象ととらえる人も多く、病気としての正しい理解が十分でないのが現状である。この大きな社会問題に対して、認知症は「老化現象と共に発生し、進行する病気である」という理解を広め、医療・福祉・コミュニティの多方向からの支援が急務だといえる。セミナーには、この分野を専門とされる吉井文均先生をお招きし、その病気の成り立ちから、最新の治療と地域で暮らすうえで私たちが心がけなければならないことを、医学、生理学的な解説を交えてお話をいただいた。

2) 継続講座「新老人のための健康講座」

ポジティブ・シニアライフのために

新老人のための健康講座 - アドバンス編

日 時 2007年4月25日～2月20日 13:30～16:00

会 場 健康教育サービスセンター

講 師 道場 信孝 (LPC 研究教育部最高顧問)

講座回数 10回

全講座延べ参加者数 500名

一昨年1年を通して開催し好評を得た「新老人のための健康講座」のアドバンス編を、2007年度4月より10回コースで行った。本年度の講座は4年間にわたりヘルス・リサーチ・ボランティアの協力を得て蓄積してきた高齢者における身体状況・生活・健康に関する情報のなかで、健康問題として頻度の高いテーマを主に取り上げて講座を構成した。以下に講座のテーマを記す。

プログラム

開催日・時間帯	テーマ
4月25日(水) 13:30～15:30	1. 医師の選び方:安全な薬の使い方
5月30日(水) 13:30～15:30	2. 病院を受診するとき:手術を勧められたとき
6月20日(水) 13:30～15:30	3. 医学的情報をどう考えるか:癌への対応
7月25日(水) 13:30～15:30	4. 健忘:うつ
9月26日(水) 13:30～15:30	5. 栄養:サプリメント
10月31日(水) 13:30～15:30	6. 骨粗鬆症:転倒と骨折
11月28日(水) 13:30～15:30	7. 関節症:運動
12月12日(水) 13:30～15:30	8. かぜ:ワクチン
1月23日(水) 13:30～15:30	9. 快眠:失禁
2月20日(水) 13:30～15:30	10. 皮膚のケア:足のケア

3) memento mori 広島 「生かされて今を生きる」

いのちの尊さを考える - シュバイツァー博士の唱えた「生命への畏敬」をいま胸に -

主 催 日本財団

笹川医学医療研究財団

ライフ・プランニング・センター

広島女学院

日本シュバイツァー友の会

「新老人の会」山陽支部

日 時 2007年4月22日(日) 15:30～18:00

場 所 広島エリザベト音楽大学セシリアホール

参加者数 600名

プログラム

・アフリカ・シュバイツァー病院を訪ねて

.....紀伊國献三(笹川医学医療研究財団専務理事)

4) ヘルパー・公開講座

一般の方々の介護の基礎知識の習得のためにホームヘルパー2級養成講座との合同講座を実施した。

①上手に医療を受ける秘訣

日 時 2007年4月26日(木) 13:30～16:00

会 場 健康教育サービスセンター

講 師 日野原重明

参加者数 6名

②健康チェック

日 時 2007年5月17日(木) 13:30～16:00

会 場 健康教育サービスセンター

講 師 和田 忠志(あおぞら診療所新松戸医師)

参加者数 7名

③からだの成り立ちと機能

日 時 2007年5月23日(水) 13:30～16:00

会 場 健康教育サービスセンター

講 師 道場 信孝(LPC 研究教育部最高顧問)

参加者数 7名

④脳卒中・精神障害

日 時 2007年5月29日(火) 13:30～16:00

会 場 健康教育サービスセンター

講 師 本多 虔夫(助ライフ・プランニング・センタークリニック医師)

参加者数 3名

⑤心機能障害・高血圧

日 時 2007年6月21日 13:30～16:00

会 場 健康教育サービスセンター

講師 相馬 正義 (日本大学医学部教授)

参加者数 7名

5) カウンセリング講演会

「健全なセルフイメージはよりよい人間関係の土台」

日時 2007年5月16日(水) 13:30~16:30

会場 健康教育サービスセンター

講師 丸屋 真也 (IMF (家族・結婚研究所) 相談室室長)

参加者数 60名

セルフ (自己) とは何かということを理解することは人間関係を築く上で大切なポイントであり、自分がどんなセルフイメージを持っているかをしっかりと知ることで、普段から無意識に行ってきた行動やどのような言動を発してきたを知ることができる。本講座では、セルフイメージはどのように形成されるか、健全なセルフイメージに必要な要因、よりよい人間関係に不可欠なスキルとセルフイメージの関係、人間関係の問題の克服法と予防法についての4段階に分けて、セルフイメージの捉え方、より良い人間関係の土台についての学びが行われた。

以下に受講生の感想を紹介する。

- ・セルフイメージは私自身の課題。この学びの機会により深く理解し、より良い人間関係をつくっていききたい。
- ・セルフイメージの形式について、親子関係の大切さ、重要さがよく理解できた。
- ・セルフイメージが低い (自分に自信がない) ことが人間関係に影響があったとわかり、今回の講義を活用して改善したいと思う。
- ・セルフイメージが低めの自分にとって、とても勉強になった。今後、家庭や職場で役立てたい。
- ・人間としてどう生きるか、大切なことを学ばせていただいた。

6) memento mori 埼玉

「いのちを学び、いのちを伝える」

日時 2007年6月16日(土) 13:00~16:30

会場 秩父市歴史文化伝承館

講師 日野原重明 (当財団理事長)

高橋 史朗 (親学推進協会理事長 / 明星大学教授)

参加者数 330名

7) memento mori 金沢

「死」をみつめ「今」を生きる

主催 日本財団

笹川医学医療研究財団

ライフ・プランニング・センター

日時 2007年7月21日(土) 13:30~16:00

会場 金沢文化ホール

参加者数 1,000名

講師 日野原重明 (当財団理事長)

村上 和雄 (筑波大学名誉教授)

8) 尊厳ある生き方を支える

認知症のひとの理解

日時 2007年7月30日(水) 13:30~16:00

会場 健康教育サービスセンター

講師 三宅 信史 (株式会社楽浪代表取締役)

参加者数 41名

三宅講師は、認知症の現れ方や症状は個性的で多彩であると語る。つまり、認知症とはこういうものだという決めつけは危険であり、避けなければならない。重要なのはその精神世界の変容、こころの方向を理解して関わることである。それができてはじめて援助が可能ともいえる。特異な行動は原因を除くことで治めることもできる。家族が懸命になりすぎて問題行動を引き起こすこともあり、最も重要なことはどんなにその方が変わっていても、やさしく受け入れる態度が必要であると、周りでケアにあたる人たちの心構えを述べた。それには、時としてプロの力を借りることが効果的な場合もあり、「よい」か「悪い」一面のみで見ればかりでなく、病んでいても老いていても幸せを感じる訓練を私たちはもっと行わなければならないと結ばれた。その言葉に、参加者は介護者の基本的な姿勢を学んだと好評であった。

9) 患者と家族のための薬の基礎知識 I

疾患と薬

日時 2007年9月5日(水) 13:30~16:00

会場 健康教育サービスセンター

講師 道場 信孝 (ライフ・プランニング・センター研究教育部最高顧問)

参加者数 31名

健康はセルフケアが基本であるとの観点から、そのための薬の基礎知識について 安全な薬の使い方、薬の

有害作用を減じるため実行すべきこと、高齢者における薬物療法、不適切な処方、ジェネリック医薬品の各テーマについて解説をされた。

10) 患者と家族のための薬の基礎知識Ⅱ

食品やサプリメントの相互作用・服薬管理の仕方

日時 2007年9月12日(水) 13:30~16:00

会場 健康教育サービスセンター

講師 山崎 学 (やよい調剤薬局薬剤師)

参加者数 29名

国民の健康意識の向上とともに、健康食品やサプリメント需要が増加し、その経済規模も年々増加している。臨床薬剤師の山崎講師は医薬品とサプリメント・健康食品との違いを説明され、医薬品と食品の相互作用についての注意と薬局で薬を買ったとき、薬品名、その薬の服用の仕方、服用する量、服用した時の注意点、他の薬との相互作用などを確認することが必要だとアドバイスした。また、同じ薬局で薬を求めようとし、かかりつけ薬局を持つことで、個人別の薬暦がつくられ、薬の重複投与や相互作用による副作用などの健康被害を防ぎ服薬指導をいつでも受けることができると講演した。

11) 口から食べるための援助実践セミナー

食べるための機能障害をもつ方への食事ケア

日時 2007年9月19日(水) 13:30~16:00

会場 健康教育サービスセンター

講師 江頭 文江 (地域栄養ケア PEACH 厚木代表)

病院からの退院時に食事援助についての基本的な情報が与えられず、うまく食事を摂ることができないために回復が進まず再入院というケースが少なくない。食事援助には医療からと福祉から見た両側面があるが、まず相手の状況に応じて環境に合わせて対応することが重要である。

江頭講師はそのための要点として、口のはたらき、食べるプロセスの理解、食事開始時の注意事項などを理解すべきであり、最も大切なのは「美味しい食事+食事環境+食べる機能(医療・福祉)+心身の健康状態が良く保たれていること」だと市販の食事援助食品を用いて具体的な講演をされた。

12) memento mori 秋田

「死」をみつめ「今」を生きる

日時 2007年10月14日(日) 13:00~16:00

会場 秋田市文化会館

講師 日野原重明 (当財団理事長)

山崎 章郎 (ケアタウン小平クリニック院長)

沼野 尚美 (六甲病院チャプレン)

参加者数 1,020名

13) カウンセリング講演会

人とうまくかかわるために～「対人関係のトラウマから解放されるには」

日時 2007年11月16日(金) 13:30~16:30

会場 健康教育サービスセンター

講師 丸屋 真也

(IMF (家族・結婚研究所) 相談室室長)

受講者数 65名

家族間、夫婦間、職場、学校など、人間関係を構築する場で上手く関係が築けず、心が不安定になったり、悩んだり、病気になったりする原因はトラウマにある場合もある。本セミナーでは、生活する上で人と関わることの重要性を説明し、トラウマとは何か、トラウマへの対応、トラウマからの解放と対人関係の3段階に分けて、トラウマが発生する仕組み、どんな影響を与えるのか、トラウマから解放されるための対処方法を学んだ。

以下に受講生の感想を紹介する

- ・トラウマの詳しい解説により、何とか過ごしてきた人生に対して反省し、人間関係の大切さを知り、これからも勉強しながら人と関わりたいと感じました。
- ・トラウマについて、筋道の通った説明でとてもわかりやすかった。色々と思いがたることがあったので、整理してみたい。ただ、トラウマというものを専門知識なく、勝手に判断することで、本質的な問題が隠されてしまう場合もあるのではないかと思います、難しさを感じた。
- ・いろいろなトラウマで悩んでいる現在、とてもわかりやすい講義で、自分自身のカウンセリングに役立った。
- ・友人関係で、言葉で痛手を受け長い間苦しんだことがある。幸い、長い年月を経て、現在はいい状態になれた。まだ解決への途上にあるものもあり、意気地のない自分の性質を情けなく思っているが、この講座に出て、自分の感情の経過を理解したり、今後、どう対処

すべきかの考え方を教えられ、感謝である。

14) 第22回 バザー講演会

「健康な生き方とは、あらためて考えよう」

日 時 2007年11月20日(火) 13:45~15:00

会 場 健康教育サービスセンター

講 師 日野原重明(当財団理事長)

参加者数 79名

5 ホームヘルパー 2 級養成講座

本講座は、1976年にホームケア・アソシエイト(協働者)養成講座として、家族の健康管理や家庭介護を担う人を養成する目的でスタートしたものである。その後、社会の変革に対応して、1993年からは内容の一部改訂を行い、厚生労働省の定めるホームヘルパー養成研修2級課程の指定が取得できるようにした。今年で31年目を経過した。

講師は、医療・介護・福祉の専門領域を代表する講師が担当している。講座内容は「生涯を通してヘルスプランしそれを実行する」という従来のホームケア・アソシエイトの趣旨と精神を生かした独自のプログラムとして、「自己血圧測定」や「救急法」などを厚生労働省の定めるカリキュラムに加えた講義を実施している。

本年度の全課程は142.5時間(施設実習30時間含む)であった。施設実習は、練馬のキングスガーデンで特別養護老人ホームとデイサービスのケアの体験を、葉っぱのフレディヘルパーセンターでヘルパーとの同行訪問が行われた。

本講座で修得する知識と技術は、訪問介護員として広く社会に活用できるばかりでなく、家族のためにも大いに役立つものと好評を得ている。

2007年度は募集20名ところ16名の受講生でスタートした。そのうち男性4名、女性12名で、平均年齢51歳であった。

受講動機は「将来、家族・近親者の介護に携わっていくため」が50%と一番高く、「介護ヘルパーとして働きたい」は17%であった。その他「ボランティアをするために介護能力を身につけたい」「高齢者・福祉・介護に関心があり自分の教養のために」「家族・近親者の健康管理のために」というのが本講座を受ける主な動機として挙げられた。

本年度の特徴は高齢者マンションなどを運営する企業

から社員の教育としての派遣を2名受け入れたことであったが、資格取得者は1名であった。本講座で受講生の関心の高い講義は「共感的理解と基本的態度の形成」で、ヘルパーとしてだけでなく、あらゆる人と上手に関わるためのテクニックを学ぶことができたことが挙げられ、この講座がヘルパーとしての知識、技術のみならず、幅広い人間教育としての場ともなっていることを実感する。終了後のアンケートでは「これからもこの学びをしっかり次の実行につなげていけるようがんばりたいと思います。実習もとても貴重な体験でした。少しでも自分を磨きながら社会にお役に立てるように人生を歩んでいけたらと思っています」とか、実習を通して「10年先、20年先の自分を考えたこともなかった自分を大勢の立派な高齢者の姿を見て自分の将来の姿が重なりました」等の感想が寄せられた。

15名が東京都よりホームヘルパー2級の資格が授与され、そのうち1名が終了後すぐにヘルパーとして活動を始めている。その他ホスピスでのボランティア活動を始めた方が2名いた。

6 電話による健康相談

当センターでは会員を対象に電話による健康相談を実施している。本年度は残念ながら1件の相談だけであった。相談内容は「頭痛がして病院に行ったら漢方薬を処方され飲んでいますが血圧が下がらない。すぐに病院に行ったほうがよいのか」といった内容であったが、よく聞くと一人暮らしで不安が強いことが問題であった。

インターネットの普及で医療情報が簡単に手に入る昨今、電話相談の役割も時代とともに縮小してきている。

7 ハーベイ教室

今年度は、日本大学医学部学生6年生を対象にした「ハーベイドールを用いた心音聴取実習」を5回(延べ106名参加)、駿河台日本大学病院看護部を対象にした「ハーベイ教室」を1回(37名参加)、自衛隊中央病院高等看護学院3年生を対象にした「ハーベイドールを使用している心音聴取の基本的技術習得の実習」を2回(延べ70名参加)実施した。

講師は久代登志男先生(駿河台日本大学病院循環器部長)と高橋敦彦先生(日本大学医学部総合健診センター医長)が担当した。

8 血圧自己測定講習会

当センターでは1976年から一般の人を対象に聴診法で血圧の測り方を指導し、これまで7,696名が受講した。

最近では自動血圧計のめざましい普及により、聴診法による血圧の測り方を習得しようという人は少なくなっている。しかし、血圧について関心はあるが、血圧についての理解や血圧計の正しい取り扱い方を知らないために、自動血圧計を購入したにもかかわらず活用されていないことが多い。

本講座では、聴診器を用いた血圧の測り方のみではなく、血圧についての理解や自己管理の方法についても指導するため、自動血圧計を用いる場合でもたいへん有効である。

指導法は個別的に行うため一人につき2時間を要するが、二十数年前から血圧の測り方を指導できるボランティアを養成し、その方々にマニュアルに沿って技術指導をしてもらっている。指導法は、まずビデオを見て全体を把握していただき、つづいてマニュアルに沿って技術指導をする。測定した血圧値を健康管理に活用できるように個別的に自己管理の方法を指導する。

本年度は「ホームヘルパー2級養成研修講座」受講者15名を含めた18名に対して指導を行った。また、血圧測定ボランティア（師範）養成講座は参加希望者が少なく、開講しなかった。

9 資料・備品の整備

健康、看護、栄養、医療、教育等に関する専門月刊誌を4種定期購読したほか、関係図書を37冊、DVD1種（「不都合な真実」）を購入して、健康教育サービスセンターの図書コーナーに整備し、会員が閲覧できるようにした。

なお、購入図書以外に寄贈図書を33冊受け入れた。

10 出版広報活動

1) 月刊『教育医療』（各号6,300部/12頁）

財団の9つある施設は、生涯の健康と自主的に取り組むための「健康教育サービスセンター」、聖路加国際病院のサテライトクリニックとして早期予防と治療のための「ライフ・プランニング・クリニック」、終末期のための全人的医療を提供する「ピースハウス病院」と「ピースハウスホスピス教育研究所」、在宅ケアのための訪問

看護ステーション「千代田」と「中井」、心身ともの健康を目指す「臨床心理・ファミリー相談室」、そして第三の人生を豊かに生きるための「新老人の会」など多岐にわたる。機関誌『教育医療』では、この各施設の活動やトピックス、またセミナーや講習会などの案内と報告をはじめとして、それぞれに関係する医療と福祉のトピックスなどを掲載している。

また2008年3月で52回の連載となった大阪市立大学名誉教授の儀我壮一郎先生の「歴史と医療」もたいへん好評である。

2) 月刊『新老人の会』会報（各号6,000部/8頁）

全国の「新老人の会」会員約6,000名の交流を目的に発行。巻頭は主に日野原会長の活動を写真で紹介し、その月ごとのメッセージを掲載した。

本文では全国22支部から送られてくる「支部ニュース」から抜粋して掲載し、全国の支部の活動をトピックスとして紹介している。また会員の動向や交流を図る目的で、会員から投稿いただいた「会員の近況やお便り」、毎月本部で開催している「サークル活動の報告と予告」などを掲載している。俳句の会では木下星城先生、短歌では川合千鶴子先生、川柳では大野風柳先生に添削をお願いし、会員の作品を掲載している。

2008年2月号からは、「新老人運動」を若い方々にも理解してもらうためにページ数を増やし、59歳以下のサポート会員に向けて隔月で「サポート会員NEWS」を掲載することにした。

3) 小冊子『第2版 高血圧と降圧療法——よりよい血圧管理と個別治療のために』（久代登志男著）800部

2006年3月に発行した本書は同年8月に増刷・改定したが、2007年度に最新のデータを挿入して第2版として発行した。医学校、看護学校をはじめ、医師会などの講習会のテキストとして活用されている。

4) 『セルフケアの能力を高める新老人のための健康学入門』（日野原重明、道場信孝著）500部

「健康は与えられるものではなく、自らがちとるものである」という当財団設立以来のスローガンを healthy literacy（健康に関する読み、書き、そろばんの能力道場）を踏まえて最新の医療について解説を加えた。特に「新老人の会」会員が自分の健康情報について客観的に把握できるように、加齢に伴う心身の変化について詳

述した。誰もが座右に置きたい一冊となっている。

5) 2007年 LPC 国際フォーラム『いのちの畏敬と生命倫理——医療・看護の現場で求められるもの (ハーバード大学の医学・看護学における倫理教育)』500部

2007年8月10、11日の両日にわたって開催された上記のワークショップの中から、講師として招聘したハーバード大学のラックラン・フォロー先生 (Director, Medical and Ethics Support Service) の講演と持参された資料2種を日本語に訳してまとめた。本誌は希望者に頒布するほか、2008年度のLPC国際フォーラムのテキストとして活用する予定である。

6) 『健康ダイヤル』の発行

『健康ダイヤル』京阪神版を2007年8月、当財団健康ダイヤルプロジェクト編集により発行。キャンペーンテーマは「アンチエイジング (抗加齢への挑戦)」。

同じく9月、同上『健康ダイヤル』原稿をベースに日野原重明・道場信孝共著として、「新老人の会」でのヘルス・リサーチ・ボランティアの調査・研究データ収録による書籍『高齢者の健康学』(創英社/三省堂書店)を発行、併せて同書籍表紙裏に日野原重明理事長の色紙収録の特装版を発行した。

7) 『「新老人」の生き方とは』(日野原重明著) 8,000部

「新老人の会」の会の趣旨を広く理解していただくために、A5版10ページのリーフレットを作成し、講演会などの場で積極的に配布している。

8) その他

既刊の小冊子のうち、『健全な家庭を築くカギ』『健全な夫婦になるカギ』『セルフ・イメージの心理学』『新しいかたちの自立の実践 バンドリーの確立を通して』『スピリチュアル・ペインと向かい合うケア』の5種についてそれぞれ増刷した。

11 厚生労働省委託事業

がん患者のリハビリテーション

2007年4月1日に「がん対策基本法」が施行され、この理念において国及び地方公共団体は、がん患者の療養生活の質の維持向上のために必要な施策を講ずるものと規定された。本基本計画の目標の一つに、「すべてのがん患者及びその家族の苦痛の軽減並びに療養生活の質の維持向上」が定められており、これはがん患者の運動機能の改善や生活機能の低下予防に積極的に取り組むことで、日常生活動作の障害を予防及び改善し、療養生活の質を維持向上させていくことを求めるものである。このためがん患者に対するリハビリテーションに精通する医療従事者を育成し、さらにがん患者へのリハビリテーションが普及を図ることで、がん患者の療養生活の質の維持向上の更なる推進を目指す教育事業が求められることとなった。

当財団では「がんのリハビリテーション実践セミナー」事業の実施事務局として厚生労働省の委託を受けて、本年度以下のような活動に協力した。



2007年8月4・5日の「第1回研修会」。実技を主体にした研修会は好評であった

1) 研 修 会

名 称	日 時	参加人数・参加構成	会 場
第1回 研修会 がんのリハビリテーション実践セミナー	2007年8月4日(土) 9時20分～16時40分 8月5日(日) 9時20分～16時40分	参加人数 58名 (内) 医 師：2名 看 護 師：12名 理学療法士：28名 作業療法士：13名 言語聴覚士：2名 音楽療法士：1名	国立看護大学校 (東京・清瀬市)
第2回 研修会 がんのリハビリテーション実践セミナー	2007年11月24日(土) 9時00分～18時20分 11月25日(日) 9時00分～16時00分	参加人数 33名 (内) 医 師：5名 看 護 師：2名 理学療法士：18名 作業療法士：7名 言語聴覚士：1名	国立病院機構大阪 南医療センター看護 学校 (大阪府・ 河内長野市)
第3回 研修会 がんのリハビリテーション実践セミナー	2008年1月19日(土) 9時00分～18時10分 1月20日(日) 9時00分～14時50分 (必修講座) 14時50分～17時00分 (オプション講座)	参加人数 68名 (内) 医 師：2名 看 護 師：20名 理学療法士：33名 作業療法士：9名 言語聴覚士：3名 音楽療法士：1名	国立看護大学校 (東京・清瀬市)

2) 講演会

がん医療変革の時代 QOL と尊厳を支えるリハビリテーション

日 時 2008年3月2日(日) 10:30～16:00

会 場 聖路加看護大学講堂

参加者数 396名

プログラム

- ・開会挨拶
.....加藤 雅志 (厚生労働省健康局 がん対策推進室)
- ・がん医療の変革とリハビリテーション
- 患者のニーズに応える医療の実現のために -
.....辻 哲也 (慶応義塾大学医学部)

・QOL と尊厳を支える医療・ケア

.....日野原重明 (当財団理事長)

- ・デモンストレーション / がんリハビリテーションの実際
その1 基本動作, 歩行障害, リンパマッサージへの
アプローチ
担当: がんのリハビリテーション委員会委員
- ・デモンストレーション / がんリハビリテーションの実際
その2 日常生活動作障害, 廃用障害へのアプローチ
担当: がんのリハビリテーション委員会委員
- ・質疑応答
- ・閉会挨拶
報告 / 平野 真澄 (健康教育サービスセンター所長)



「新老人運動」と「新老人の会」の運営

所在地：東京都千代田区平河町2-7-5 砂防会館5階

ライフ・プランニング・センターの日野原重明理事長が提唱された「新老人運動」に賛同する方々の集まりとして2000年9月に「新老人の会」が発足した。当財団は、設立以来、日本の医学医療改革と生活習慣病の予防を目的に“自分の健康は自分で守る”“賢い患者になろう”という運動を提唱し、さまざまな啓発活動をつづけてきた。これらの延長線上に位置づけられるものとして「新老人運動」を加えることになったのである。

「新老人運動」とは、世界に誇る長寿国となった日本の高齢者が、健やかで生きがいを感じられる生き方をしただけのための具体的な提案である。会の発足当時は、21世紀を目前にして少子高齢化がにわかに社会問題として取り上げられ、老人が社会の活性化を阻み、ひいては医療保険や年金の破綻をもたらす存在として、次世代の人々の夢を砕くかのような論調がみられた。しかし、高齢になっても自立して、これまでの人生で培った知恵や経験を社会に還元できる方々は大勢おられる。半世紀前にWHOが老人の定義を65歳以上としたことはすでに社会の実情に合わなくなっているため、それを10年底上げし、75歳以上の方々を「新老人」と名づけ、まったく新しい老人像を創出しようとしたものである。

この提案が社会の関心を呼び、新聞、雑誌、テレビなどで数多く紹介されて全国的な反響を呼び、大勢の賛同者を得ることになった。その当時の風潮を物語るものとして、「新老人」および「新老人の会」という用語が2002年版『現代用語の基礎知識』（自由国民社刊）に収録されたこと、また、日野原会長が「新しい老人文化の構築に貢献した」として2003年度朝日社会福祉賞を受賞されたことがあげられる。このような反響が続いている理由としては、まず、この運動が高い理想を掲げながらも、具体的でわかりやすく誰にも納得のいくものであることがあげられる。また、文化勲章受章者であり「新老人の会」会長としての日野原理事長の発言や活動がマスメディアに取り上げられる機会が多く、その結果として「新老人の会」の認知度も高まっているものと思われる。

「新老人の会」の目標を実現するためのさまざまな活動を推進する中で、当初75歳以上を正会員、それより若い方々を準会員としたが、2005年度からは75歳以上を「シニア会員」、75歳より若い方々を「ジュニア会員」とし、合わせて会員とした。さらに、昨年度からは、60歳

より若い方々を「サポート会員」と称し、「新老人運動」の趣旨に賛同する方々には年齢の下限を設けず入会していただき、活動の拡大化を図っていくことにした。ジュニア会員、サポート会員は、シニア会員と共に活動することで、10年先、20年先の自分のモデルを見つけていただき、その方々を通して年齢を重ねることについての具体的なイメージを描いていただくことができると考えたのである。

発足から7年半を経た現在、これらの反響はますます全国的な広がりをみせ、2007年3月31日現在、会員数は6,038名、地方支部は22カ所に設置されるに至った。また会員の構成比率はシニア会員65%、ジュニア・サポート会員合わせて35%であるが、これを早く半々にまで持っていくことを目標に掲げ、ジュニア会員、サポート会員の勧誘を積極的に行っている。

「新老人運動」の趣旨

少子高齢化の道をまっしぐらに進んでいる日本において、高齢者はどのような生き方をすればよいかを、1999年作成の当財団のリーフレット『新老人 - 実りある第三の人生のために』を作成し世に問いかけた。これらは日野原会長が長年にわたり日本の医学医療界を革新するリーダーとして培ってきたものをベースに、日本の高齢者が健やかで幸せな生涯を送ることができるよう願ったものである。

高齢者が自立して生きがいを感じられる生活を送り、しかもこの年代でできる社会貢献をする。そのために次のような「生き甲斐の3原則」と「一つの使命」、そして「5項目の行動目標」を掲げている。

生き甲斐の3原則（ヴィクトール・フランクルの哲学より）
と一つの使命

愛すること（To love）

創めること（To commence）

耐えること（To endure）

そして2006年度から、一つの使命として「子どもたちに平和と愛の大切さを伝えること（To give children messages to appreciate Peace and Life of All on Earth）」をつけ加えた。

5つの行動目標 (2006年3月一部訂正)

自立：自立とよき生活習慣やわが国のよき文化の継承

本会は、75歳以上をシニア会員、75歳未満をジュニア会員、60歳未満をサポート会員とし、老後の生き方を自ら勇気をもって選択し、自立とよき生活習慣をそれぞれの家庭や社会に伝達するとともに、次の世代をより健やかにする役割を担う。

世界平和：戦争体験を生かし、世界平和の実現を
20世紀の負の遺産である戦争を通じて貧しさの中から学んだ体験と人類愛を忘れた生き方を反省し、そこから得られた教訓を次の子どもや孫の世代に伝え、世界平和の実現に寄与する。

自分を研究に：自分の健康情報を研究に活用（ヘルス・リサーチ・ボランティアの志願）

自らの健康情報（身体的、精神的および習慣的情報）をヘルス・リサーチ・ボランティアとなって研究団体に提供し、老年医学、医療の発展に寄与する。

会員の交流：会員がお互いの中に新しい友を求め、会員の全国的な交流を図る

健やかな第三の人生を感謝して生きる人々が、さらに新しい自己実現を期して交流し、心豊かな老年期を過ごす。

自然に感謝：自然への感謝とよき生き方の普及

過度に発達した不健全な文明に歯止めをかけ、与えられた自然を愛し、その恩恵に感謝し、その中によき生き方の普及を図る。

「新老人の会」とは、これらの趣旨に賛同する方々を会員として、広く社会に啓発活動を展開していこうとするものである。

本年度は、地方支部として新たに岡山と三重の2支部が加わり全国22支部となった。また、海外講演会も米国フィラデルフィア、メキシコ、韓国の3カ国で日野原会長講演会を開催し、多くの会員有志が同行参加し、現地の方々と交流することができた。

本部におけるサークル活動も新たに3種類が加わって29種目となり、多彩で充実した活動を展開している。また、地方支部の躍進もめざましく、22カ所の各支部が毎年趣向をこらしたフォーラムを開催し、1,000人を超える大きな会場にいっぱいの参加者を集めている。地域に根ざした啓発活動としては、九州支部の「樹人千年の会」の活動に触発された信州支部の「いのちと平和の森」活



新しいリーフレット

動が NPO 法人の認可を得て発足した。

さらに、小・中学校での「いのちの大切さを伝える授業」（兵庫支部、岡山支部）、市民を対象にした「戦争体験を語り継ぐ会」の開催（熊本支部）、会員の戦中戦後の手記『われらの日々』の出版（北東北ブランチ）など精力的な取り組みもみられた。

支部ニュースの発行は支部により隔月から年1～2回発行までさまざまであるが、支部活動が反映された充実した内容となっており、支部同士の情報交換と交流の資源として活用されている。

これらの詳細を以下に報告する。

1 世話人会の開催

本部では事業の遂行に関する重要な事項を検討し決定する機関として本部世話人会を年間5回、拡大世話人会を1回開催している。メンバーは日野原重明会長、道場信孝財団最高顧問、朝子芳松財団常務理事、本部世話人15名、事務局から3～4名が出席する。

本年度は本部世話人会を5月23日、7月11日、9月27日、11月28日、2008年1月23日に、「第9回拡大世話人会」を3月11～12日に東京の本部において開催した。

本部世話人は、長澤美栄子世話人が病氣療養を理由に辞任されたため、新たに黒田薫氏が就任された。

本部世話人（15名、五十音順）

吾郷 慶一	江崎 正直	儀我壮一郎
黒田 薫	佐伯 正博	鈴木 章弘
玉木 恕乎	寺岡美由紀	土井 荘助
丹羽 茂久	橋本 美也	藤田 貞
藤野 貞子	松原 博義	宮川ユリ子

2 拡大世話人会の開催

拡大世話人会は、会の運営と活動の展開について話し合い、支部の運営と活動のための情報交換を目的に、本部の世話人にあわせ全国の支部世話人代表にも参加していただくものである。

これまでは年2回（地方支部で1回、本部で1回）開催してきたが、本年度から全国の会員交流を目的にジャンボリー（全国大会）を開催することにしたため、本部で1回、1泊2日の日程で開催した。

第9回拡大世話人会

日時 2008年3月11・12日
ところ ライフ・プランニング・センター（砂防会館）
宿泊・懇親会 ホテル・ラポール麹町
レストラン・ラブリコ

プログラム

3月11日(火)

13:00～

- ・会長挨拶
- ・本部からの報告と提案
- ・会計の実績と予算
- ・会員の動向
- ・意見交換

14:00～

- ・各支部からの報告
- ・まとめ

18:00～

- ・懇親会
- ・地方支部世話人代表は宿泊

3月12日(水)

9:30～ ・グループワーク（前日にあげられたテーマについて）

11:20～ ・報告（グループワークのまとめ）と意見交換

13:00～ ・昼食懇親会

参加者は本部世話人15名、地方支部世話人代表・世話人24名、本部スタッフ8名、合わせて47名であった。21支部（1支部欠席）、3 brunchの代表が一堂に会して親交を温め、各支部、brunchの現状と抱えている問題点について報告し、話し合うことができた。設立から6年



全国21支部3 brunchからの代表が集まって対議

半ばを経過した九州支部から、まだ半年余りの三重支部までが、お互いの問題をシェアすることができる上に、さまざまな解決のヒントを得ることができる絶好の機会でもある。

今回は、会の発足から7年半を経た現在、全国の会員数6,000人余りから当面10,000人を目指していくこと。支部の中には順調に活動を展開しているところもあるが、中には膠着化している支部もある。お互いの支部が抱えている問題点を率直に開示し、情報交換するために6グループに分かれてグループワークを行い、これらのまとめを報告し合い、意見交換を行った。

各支部からの報告は、支部の概要、世話人会の開催状況、支部ニュースの発行、支部主催の活動、サークル活動、支部運営、活動における問題点、今後の課題に沿ってA4サイズ1枚にまとめたものをもとに5分で報告していただいた。報告された中から次の8項目が問題点として抽出された。

問題点として抽出されたこと

会員増強、退会者を減らしていくにはどうしたらよいか

会の魅力づくりについて

支部運営の活性化について

支部活動の展開の仕方

支部相互の交流について

世界に視野を広げた活動の展開

「いのちと平和」の大切さをどう運動として具現化するか

2008年度の活動のテーマ

からは会の活性化について各支部からの問題提起であり、からは日野原会長から出された将来に向け

ての課題である。

グループワークから生まれた戦略

グループワークは設立の早い支部と遅い支部を組み合わせ、本部の世話人も加わって6グループとした。テーマはあげられた問題点を集約し、会員増強と退会者を減らす、特徴を生かした魅力ある会づくり、支部の運営の活性化の3項目に絞って話し合い、その内容を発表していただいた。各グループから具体的な提案が提示され、それらはすぐにも取り入れられるような実践であり、よいヒントとなるものである。

会員増強と退会者を減らす

- ・支部主催の「新老人の会」講演会ばかりではなく、地域での日野原会長招聘の講演会があれば協力を申し入れて、会のPRをする。
- ・日野原会長を招いての会員の懇親会は、これに参加したいという入会者が多くあり効果的であった（兵庫支部）。
- ・マスコミを上手に使う方法として、地方の新聞社の記者クラブ、テレビ局に講演会や活動の情報を流し、協力を得るのも効果的である（信州支部、宮崎支部、静岡支部など）。
- ・サークル活動を体験してもらい、会員の予備軍をつくる。
- ・ジュニア、サポート会員を増やすために、親の介護問題の知識や情報を提供する企画。健康でいきいきと老いるエッセンスを得られることをPRする。

特徴を生かした魅力ある会づくりについて

- ・小中学生への「いのちの授業」や「平和の森」づくり、「戦争体験を伝える会」など社会に目を向けた活動を。
- ・環境保護のために無駄な消費をしない取り組み。

支部運営の活性化

- ・支部事務局に、事務作業に困っている支部には、転送電話を活用する、事務ボランティアを募る、他支部の世話人会に参加させてもらう、世話人に若い人を入れる。
- ・運営資金については本部からの地方活動交付金は年度内に消化することが原則であるが、講演会収入などで得た支部の収入はこの限りではない。会員を増やすことで交付金が増え、支部主催講演会の集客を増やすことで収益が見込める。
- ・講演会のプログラムなどに会のイメージを壊さない

範囲で広告をとることも可能。

事務局よりのコメント

今回のまとめとして、事務局より次のようなコメントをした。

- ・「新老人の会」の名称を変えてもらえないかという意見はたびたび出されるが、「新老人」の名称は日野原会長の造語であり、先にも述べたように2002年版『現代用語の基礎知識』にも採録されるなど、会の根幹を表す名称である。この名称であったからマスメディアにも注目され、一目でどのような会かが伝わり全国的な反響を呼ぶことができた。このようなプラス面を生かして活動を広げてほしい。
- ・名簿管理について、本部と支部との連絡に手作業を含めていたが、新年度からシステムを構築しなおし改善される予定である。
- ・マスメディアを上手に使うことに成功している支部から教を請うて、ノウハウを学ぶとよいのではないか。
- ・支部運営が上手く行っているところへ実際に訪ねて行き、交流しながら学ぶ。
- ・会費納入はいろいろと検討したが、コンビニからも納入できるように準備中である。
- ・国際交流については、2007年8月に海外支部第1号としてメキシコ支部が設立された。2008年度は「台湾・新老人の会」が発足、「オーストラリア・新老人の会」の発足が予定されている。
- ・世論を変えるような運動を推進するには会員数が力となるため会員増加がどうしても必要である。

日野原会長の閉会のことばから

今回はいろいろな提案がなされたが、具体的な目標を設定したらそれに対する戦略を立てて行動に移さなければならない。机上のプランではなく現場に出て動きながら実験し、効果を評価しながら練り直していく。私たち“新老人”が普遍的な真実を伝える世論をつくっていかなければならない。そのためには会員数が10万人を超す必要がある。社会のために日本の世論をつくるのだというパッション（情熱）を持つことが必要であり、これが若さの秘訣でもある。「近隣の支部と支部とがお互いに活動を補い合いながら、より有機的に連携し、積極的に大胆に活動していただきたい」と熱く語られた。

3 地方支部の設立

6,000人を超える会員の約60%が地方在住の方々である。本部でのさまざまな催しや活動に参加できない地方の会員が、地域において活動や交流ができるように、当会では当初から全国に10ブロックくらいの支部を設立することを謳ってきた。しかし、支部の単位が大きすぎると、活動の中心地から遠隔地に在住する会員は活動に参加しにくいという問題が起こり、数年前から県単位くらいまで支部を小さく分割する方針に変更した。そのため、今年度は7月に岡山支部、8月に三重支部が設立され、国内22支部となった。これらの支部は「地方支部規約」に基づいて運営されている。

支部の財政は、本部より会員数に応じて年会費の50%を「地方活動助成金」として交付し、これをもとに運営される。支部を設立することによって当該地域の会員数は確実に増加するが、これは対面した上での勧誘が効果をあげていることと、地域に根ざした活動が求められているものと思われる。今後、いかにして会の目標に沿った支部活動を展開し、会員の満足度を高めていくかが課題であるが、そのためにも「拡大世話人会」は非常に有意義な機会となっている。

4 地方支部規約の制定

全8箇条からなる規約は、地方世話人会の設立、地方支部設立後の地方世話人会の権限、義務、財政などについて定めるものである。条項の主なものは下記の通りである。

第3条

地方世話人代表1名を会長が任命する。
地方世話人は地方世話人代表が5～10名の範囲で選出し、会長の承認を得る。

第4条

一つの管轄地域には一つの地方支部のみ設立することができる。

第6条

重要な業務執行に関して、会長の承認を得る。
1年に1回、会長に活動報告と会計の報告を行うこと。
1年に1回、地方支部世話人代表が本部における拡大世話人会に参加すること。

第7条

本部からの地方活動助成金を4月、10月の2回に分けて交付する。

地方支部においては、これらをもとに支部の事情を考慮して 支部規約を制定し運用しているところもある。

5 地方支部の運営と活動 (表1)

地方支部は規模、交通の利便性、地域の特性が異なり一概に論じることができないが、運営は地方世話人会で相談し、会員のアンケートなどから得られたニーズ、本部における活動を参考に会員が主体的に運営することが望まれる。また、地域に根ざした社会に働きかける大きな活動に取り組んでいる支部もいくつか生まれている。例えば信州支部の「いのちと平和の森」の活動、北東北ブランチの会員による手記『われらの日々 - 戦前戦中の子どもたち』の出版、熊本支部の舞台劇「医聖宗巴は立ち上がる」の公演予定(2008年5月6日)などがあげられる。

最近では各支部が情報伝達、会員交流のために支部ニュースを発行することが通例となっている。隔月発行から年1～2回発行までとさまざまであるが、地域性があり支部活動が読み取れる充実した内容になっている。発行されたニュースは数十部を本部に送付していただき、本部から各支部に分配するシステムをとっており、支部同士の情報交換と交流の資料ともなっている。



「いのちの樹」を植樹

1) 地方支部フォーラムの開催 (表2)

年1回は「周年記念フォーラム」として日野原会長講演会を支部主催で開催しているが、講演のみではなくアトラクションに管弦楽、楽器演奏、独唱、合唱、バレエなどのコンサートを組み合わせ、格調高く感動を与えるものとなっている。そのため、ほとんどの支部が1,000名を超える大会場で満席の盛況となっている。

本年度は、静岡支部のシニアの市民合唱団2グループと幼稚園の園児、保護者の合唱を合わせて3グループ、二百数十名の大コーラス、神奈川ランチ主催の「小田原フォーラム」における日野原重明祝祭管弦楽団の演奏、鹿児島支部フォーラムの子どもと少女たちのバレエ公演などがあげられる。

参加者数では、福島支部フォーラムの2,100名を最高に山陽支部の福山市フォーラム、周南市フォーラムはともに1,800名、信州支部の長野フォーラム1,800名という参加数であった。本年度の延べ開催数は24回、延べ参加者数は2万3,989名であった。

2) 子どもたちに「いのちの大切さ」を伝える

昨年度から「新老人の会」の3つのモットーの一つの使命として「子どもにいのちと平和と愛の大切さを伝える」ことを付け加えた。日野原会長は昨年にも増して全国各地の小学校で精力的に「いのちの授業」を行った。地方支部においても地方支部フォーラムの前後に「いのちの授業」を企画・実施するところが多くなった。本年度は、5月に芦屋市立鈴原小学校、7月に浜松市立有玉小学校、8月に桑名市立大山田北小学校、10月に宮崎市立広瀬小学校、熊本市立詫麻小学校、11月に山口県湯野小学校、岡山県宇治小学校、高倉小学校、吉備高原小学校、12月に鹿児島市立田上小学校、翌2008年3月に姫路市立荒川小学校と支部会員の協力により開催した。またマスメディアの取材を受け、地域の新聞、テレビなどで報道されることにより「新老人の会」の日野原会長の活動をアピールすることができた。

また、これらをモデルに、支部活動として独自の「いのちの授業」を展開することを計画している支部もある。既に実施している支部は、兵庫支部、信州支部、岡山支部などであるが、会員たちの戦争体験を中心にした方法で、数人のチームをつくり工夫を凝らした授業を展開している。

3) 戦争体験を伝える

熊本支部では、一般市民を対象にした「戦争を語り継

ぐ会」を開催している。本年度は3回開催し、二十数名から三十数名の参加があり、新聞紙上でも紹介された。

また、北東北ランチでは、吉田豊世話人代表を中心に会員の戦争体験を手記にして、『われらの日々 - 戦前・戦中の子どもたち -』を出版した。刊行にあたって吉田豊氏は「私は昭和5年生まれ77歳。戦争の実体験はないが、歳が少し足りなかったため戦争にかり出されることもなく、いわば運のよかった人たちである。しかし、私の父や兄たちは徴兵で戦地に出かけ、数多くが命を失った。私どもは楽々と子ども時代を過ごしたかということ、決してそうではない。今の同年代の子どもたちには想像もつかないほどのつらい思いの日々があったのである。終戦直前の青森大空襲で凄惨な状況の中を命からがら逃げ、助かった者もいる。戦争は国の隅々まで、老人から子どもに至るみんなに貧しさや苦しさや、悲劇をもたらした。会の趣旨に添って、各自が経てきた戦前・戦中・戦後の幼少年時代や小中学校時代の生きざまを語り、記録に残したいと考えた(中略)」と書いておられる。会員15名の手記を収録、1,500部を刊行し完売した。

4) 「樹人千年の会」と「いのちと平和の森」の活動

数年前に九州支部が自然環境保護を目的に「お墓の代わりに樹を植えよう」と始めた活動が「樹人千年の会」である。会員を対象に福岡市郊外の地に約200本の樹が植えられ、会員たちの手で管理されている。

これに触発された信州支部の会員が中心になって「いのちと平和の森」構想に取り組んで2年余りになる。長野県松本市郊外の北アルプス連峰を背景に、美しい安曇野平野を見下ろす松本市アルプス公園近くの市有地を借り上げ、ここを中心に自分たちが生きた証として「いのちの樹」を植えて森をつくり、次の世代に継承していこうというものである。これを長野県に特定非営利活動法人(NPO)として申請し、2007年5月1日認証登記された。

土地整備のために松本市や林野庁の助成金を受け、樹寿会員を募集して資金を集めるなど、「新老人の会」の活動としては経済規模が大きくなりすぎるためNPO法人として独立した組織にした。日野原会長は特定非営利法人「いのちと平和の森」の名誉会長として、「新老人の会」と協力しあうことを協定している。地域の方々の理解と協力を得ながら周辺の土地を求め、広く樹寿会員を募り、趣旨に賛同するボランティアの応援を得ながら、会員が自分たちの手で運営を進めることになる。



三重支部



鳥取支部



福島支部



鹿児島支部フォーラム

地方支部・ブランチの講演会から



福島支部フォーラムで本部の
フラダンス・サークルが披露



神奈川ブランチ小田原フォーラム



宮崎支部「いのちの授業」広瀬小学校



山梨支部・ゴルフサークルに
日野原会長も参加

5) 地方支部世話人代表 (設立順)

1. 九州支部：原 寛
2. 兵庫支部：冨永 純男 (阪神支部を改め)
3. 京滋支部：森 忠三
4. 山陽支部：二宮 義人 (中国支部を改め)
5. 東海支部：榊 米一郎
6. 北海道支部：松本 脩三
7. 阪奈和支部：阿部 裕
8. 信州支部：横内祐一郎
9. 東北支部：阿部 圭志
10. 山梨支部：小林 茂
11. 島根支部：森山 勝利

12. 四国支部：内田 康史
13. 鳥取支部：入江 伸二
14. 新潟支部：笹川 力
15. 福島支部：佐藤 勝美
16. 熊本支部：小山 和作
17. 静岡支部：室久敏三郎
18. 宮崎支部：青木 賢児
19. 鹿児島支部：鹿島 友義
20. 富山支部：前田 昭治
21. 岡山支部：河田 幸男
22. 三重支部：鈴木 司郎

6 海外講演会・ツアー

本年度は、5月のフィラデルフィア講演会、8月のメキシコ講演会、10月の韓国講演会と、海外講演会を3回開催し、これらに会員の同行参加を募ってツアーを組み、3カ国合わせて全国から153名の会員が参加した。訪問した国々では日野原会長講演を通して「新老人運動」の趣旨を伝え、同行参加の会員と現地の方々とが親しく交流するという実りの多いツアーであった。メキシコでは、これを機会にメキシコ支部が設立され、海外支部第1号となった。韓国ソウルでは逐語通訳を入れ、韓国の方々の参加が900名余りと大盛況であった。それぞれの詳細を以下に記す。

1) フィラデルフィア市講演会・ツアー

日 程 2007年5月25日(金)～31日(木)

スケジュール (米国日程)

5月25日(金)

- ・フレンズ校(フィラデルフィア補習校)にて「いのちの授業」

5月26日(土)

- ・日野原会長講演会(オーバーブルック教会)
- ・バーンズ美術館見学

5月27日(日)

- ・フィラデルフィア日本人教会での日野原会長礼拝
- ・現地日系人と同行会員との交流会
- ・フィラデルフィア美術館見学
- ・ペンシルベニア州立大学キャンパス見学

5月28日(月)

- ・フィラデルフィア市内観光

5月29日(火)

- ・オーバーブルック盲学校見学

- ・ケンドール・リタイアメント・ハウス見学
- ・ロング・ウッド・ガーデン見学

フィラデルフィア市はアメリカ合衆国の建国の地であり、古きよきアメリカの歴史がたくさん残っている地域。ペンシルベニア州立大学をはじめ多くの大学、カレッジが集まっており、また、世界の大手製薬会社の8割までがこの地に本社をおいているという化学産業の中心地でもある。デュボンに代表される富の集積が、石づくりの教会や街並みの見事さ、さらに見学した美術館、施設などが充実した豊かな社会資産を生んでいるが、旅行者ではなかなか見学できないこれらの施設を現地に在住される方々の手配により限られた時間内に効率よく見学することができた。

今回は、フィラデルフィア市の日本語補習校と日系の教会が共同して日野原会長を招聘し、講演会を主催された。視察、見学先についてもすべて下見をして計画し、引率からガイドまでを引き受けられるという手作りの心のこもったツアーであった。ホテルもフィラデルフィア市内は1カ所に連泊し、毎日の夕食は現地の婦人たちがボランティアで日本食を手づくりしてもてなして下さった。そのため、視察、見学はバラエティーに富み、タイトなスケジュールであったが、同行した30名の会員は体調を崩すこともなく全員無事に帰国することができた。本部事務局から石清水由紀子、平野真澄が同行した。



フィラデルフィア訪問



メキシコ市訪問

2) メキシコ市講演会・ツアー

日 程 2007年8月13日(月)～22日(水)

スケジュール

8月14日(火)

- ・クエルナバカ市観光
- ・桧山邸にて「新老人の会」会員と在墨日系人との交流会

8月15日(水)

- ・ソチカルコ遺跡観光
- ・阿部邸にて歓迎・交流会

8月16日(木)

- ・メキシコシティへ移動
- ・カサ・デ・ラ・アミスタ (小児がんの施設) 視察

8月17日(金)

- ・国立博物館など市内観光
- ・日野原会長はメキシコ学院, ユニセフ支援事業視察, メキシコ医師会, 日系医師会主催の講演会で講演

8月18日(土)

- ・テオティワカン・ピラミッド, グアダルーベ寺院観光

8月19日(日)

- ・移民110周年記念・日野原会長講演会 (日墨会館)
- ・メキシコ支部設立セレモニー, 交流会

8月20日(月)

- ・プエブラ, チョルーラ遺跡観光または自由行動
- ・さようならパーティー

8月21日(火)

- ・帰国の途へ

メキシコ市講演会ツアーは、2年前に在墨40年になる村田美穂子さんが本部を訪れ「いつかは日野原会長をメキシコにお招きし講演会を開催したい」と夢を語っておられたが、その後、メキシコの日系人の方々を熱心に説得され、村田さんの情熱に感化された協力者が次々と現れた。その一人、印刷業で成功しておられる桧山文彦氏を世話人代表として27名で「メキシコ支部」を設立された。今後、当支部は海外支部規約に基づいて運営され、メキシコの日系人の中で「新老人の会」の目標に沿った活動を展開することになった。

今回の訪問は、飛行時間も長くメキシコが高地にあるため、高齢の参加者には身体的な負担がかかりかなりハードなツアーとなった。参加会員は33名、道場信孝顧問、本部事務局から平野真澄、福井みどりが同行した。

3) 韓国ソウル市講演会・ツアー

日 程 2007年9月30日(日)～10月3日(水)

スケジュール

9月30日(日)出発

- ・全国の会員交流夕食会

10月1日(月)

- ・ソウル半日市内観光
- ・日野原会長講演会・交流会 (ロッテホテル・ワールド)

10月2日(火)

- ・ソウル郊外観光

10月3日(水)

- ・ソウル市内観光を経て帰国

今回のソウル講演会は、日本と同様に少子高齢化が進んでいる隣国の韓国において、日野原会長の講演会を開催し、日本の「新老人運動」を紹介しようという計画が、ニューヨーク講演会を実行された吉田礼三会員、韓国側では日本循環器学会会員でもある金三寿会員など日韓の有志によって提案され、実現に至った。

高齢化は両国共通の問題であり、これによって生じる社会問題は高齢者自らが積極的に解決していこうという「新老人運動」の趣旨を韓国に紹介し、日本の「新老人の会」会員と、韓国の高齢者が協力して活動を進めることは、日韓両国民の友好親善に寄与するところがきわめて大きい。また、将来、韓国においても「新老人の会」を発足させ、両国会員の自由な交流を実現できればと、「新老人の会」としてこれを受けすることにした。開催経費の多くを日本側で準備するという大きな問題があったが、韓国で事業展開をしている日本の大手企業に寄付を依頼し、また会員の有志からも寄付をいただくなど、総額311万5,000円を集めることができた。

本講演会を大成功に終えることができたのは両国の多くの関係者、協力者、なかでも韓国側主催者を代表された車興奉教授の強力なリーダーシップあってのこと。また、韓国側主催者と日本の「新老人の会」事務局の間に立って橋渡しをしていただいた在韓30年のビジネスマン秋山英一氏のご尽力があったことを特記したい。

韓国ソウル市講演会

日 時 2007年10月1日(月)

開催場所 ロッテホテル・ワールド

主催団体 韓国老人科学学術団連合会, ソウル大学老化高齢社会研究所, ハンリム大学高齢社会

総合研究院, 「韓国・新老人の会」設立準備委員会, ライフ・プランニング・センター「新老人の会」

後援 在韓日本大使館, ソウル・ジャパン・クラブ, ユニセフ韓国委員会, 旭化成株式会社, 株式会社講談社, 株式会社資生堂, 株式会社総社, 東レ株式会社, 学校法人原学園原看護専門学校, 原土井病院, 富士ゼロックス株式会社, 八千代病院, 株式会社ユーキャン, USY Consulting, Inc., 「新老人の会」会員有志 (五十音順)

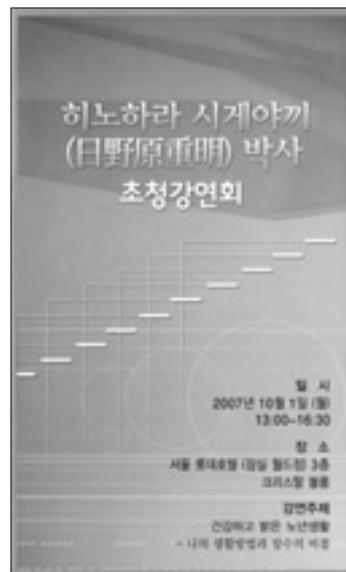
協力 韓国ヤクルト, 東洋経済日報社, ロッテホテル

参加者数 1,000名

プログラム 逐語通訳付き

- 14:00 開会の挨拶.....車興奉教授
祝 辞
.....安弼準「韓国老人会」会長
- 14:20 講演
長寿に輝いて生きるには - 私の生きかたと長寿の秘訣 -
.....日野原重明「新老人の会」会長
- 15:30 閉会の挨拶.....金三寿医師
終了後, 両国の参加者で懇親会

講演会は韓国側の周到的な準備により, 現地で製作した韓国語のプログラム, 日本語の冊子, 「『新老人』の生き方とは -」に韓国語訳をつけて合わせて配布した。日野原会長の講演には会場からたびたび拍手が湧き起こり, 韓国の聴衆の共感を大いに得ることができ大成功であった。終了後, 韓国側主催者を代表して, 2013年に韓国で



ハンガルのプログラム



開催される第20次世界老年学・老人医学大会の組織委員長でもある車興奉教授から謝意とともに同大会の記念講演に招聘したいとの申し入れがあった。

会員同行者は全国にわたっており, 成田, 中部, 関西, 福岡各空港から韓国入りした会員90名 (平均年齢76.3歳), 本部事務局から石清水由紀子, 平野真澄, 福井みどり, 岩下美恵子の4名が同行した。



韓国・ソウル市訪問

7 「新老人の会」設立7周年フォーラム

テーマ こどもたちに残したい未来のために

日時 2007年11月11日(日)

会場 シェーンバッハ砂防

プログラム

オープニング 「新老人の会」とは

- ・活動紹介
- ・フラダンス
- ・第1回表彰式

22支部の活動から「九州支部」と「信州支部」
個人の活動の中から「■地三郎さん」

講演1

「豊かさ」を探し求めて - 宇宙へ、そして大地へ -
.....秋山 豊寛 (日本初の宇宙飛行士)

講演2

こどもに残したい未来のために - 新老人の生き方が未来を創る -
.....日野原重明 (「新老人の会」会長)

ミニコンサート

今野尚美さん (ピアノ演奏), 里中トヨコさん (ソプラノ独唱)

参加者数 415名

7周年を迎えた「新老人の会」は、全国22支部、会員数は5,784人を数え、各支部の活動も充実してきた。そこで今回は、会員の中から前向きで斬新な企画を推進し、「新老人の会」の発展に尽くしてこられた2支部と一人を表彰した。

表彰対象および事由

九州支部

- ・2001年9月「新老人の会」地方支部第一号として発足
- ・環境問題への取り組みの契機となった「樹人千年の会」の発足
- ・オーストラリア講演会ツアーの開催協力
- ・第1回地方拡大世話人会の開催協力
- ・会員の顔の見えるニュースの隔月発行

信州支部

- ・中学生から新老人世代まで - 世代を超えた300人の「歓喜の歌」合唱
- ・小学生にいのちの尊さを伝える『いのちの出前授業』
- ・緑化運動の一環である「いのちと平和の森」事業の推進
- ・第1回「新老人の会」ジャンボリー開催協力



7周年フォーラム



■地三郎さん

- ・101歳の現役教育者
- ・障害者のための教育施設の充実
- ・100歳を迎えた昨年から、世界一周の講演会ツアーを敢行
- ・中国でも障害者教育のモデルとして「しいのみクラス」をつくる、など

講演会

宇宙から美しい地球を見ることで、「地球環境問題を考えよう」というプロジェクトのもと宇宙に飛び立った秋山さん。宇宙で考えたことは「この美しい地球を守らなければならない」という究極的な思い。そのことが契機となって、自分自身の生活スタイルを考え直し、地球に優しい有機農業への取り組みを始めた。その田舎暮らしの生活を通して考えたことは「未来に責任を持つ」ということ。今の世代の必要を満たすだけでなく、未来世代の必要性をも満たすような生活を維持するという考え

方がなくては、地球は持たないということ。私たちの今の生き方が未来に繋がることを改めて考えさせられた。

日野原会長は、“新老人”が次世代の人たちの生き方のモデルとなるためのエッセンスを披露し、「『新老人の会』はいのちを大切にすることを伝えていくための運動。平和な社会を創っていこうというもの。すぐには難しくても、孫世代の未来のために、今何ができるか考えていきましょう」と熱く語られた。

エンディングはミニコンサート。本部サークル「クラシック音楽を楽しむ集い」でおなじみの今野尚美さんのピアノ演奏と里中トヨコさんのソプラノ独唱をお楽しみいただいた。

最後は日野原先生の指揮のもと、会場の皆さんと「新老人の歌」を合唱し、閉会した。



講演者は宇宙飛行士の秋山豊寛氏と日野原理事長



今野尚美さんのピアノ演奏と里中トヨコさんのソプラノ独唱も



■地先生は得意の棒体操を（上）、フラダンス「マハロ・フラサークル」も優雅に踊る

8 第1回「新老人の会」ジャンボリーの開催

テーマ 緑の地球を後世へ
日時 7月18(水)・19日(木)
会場 1日目
フォーラム……まつもと市民芸術館主ホール
参加者数 1,000名
懇親会・宿泊 「ホテル・ブエナビスタ」
2日目 ワークショップ……あがたの森
延べ参加者数 230名

プログラム

1日目 オープニング

- ・フラダンス
- ・菅谷昭松本市長のご挨拶
- ・「新老人の会」とは 石清水由紀子

講演会 緑の地球を後世へ

講演1 地球環境時代の森林環境と木材利用

速水 亨 (速水林業経営)

講演2 自然から学ぶ生きる力

日野原重明 (当財団理事長)

エンディング

「歓喜の歌」大合唱 第九を歌う会・第九を歌う・丸の内中学校

指揮 花岡 由裕

ソプラノ 渡辺しおり アルト 草間 裕美

テノール 金子 春雄 バス 草間謙一郎

ピアノ 渡辺かおる・臼田 香里

日野原会長の指揮で「新老人の歌」を会場の皆さんと大合唱

懇親会 「ホテルブエナビスタ」にて

2日目

- ・「いのちと平和の森」バス視察ツアー
- ・8つのグループに分かれてワークショップと報告
- ・学校法人外語学園松本第一高等学校の合唱

日野原会長発案による第1回「新老人の会ジャンボリー」は、全国の会員有志が一堂に会し緑豊かな中で交流を深めようという趣旨のもとに開催した。

1日目の講演会では、私たちが日々恩恵にあずかっている自然と、それによって生かされているいのちについて考えようという趣旨のもと、速水亨速水林業代表取締役社長に表記のテーマでお話しいただいた。木材は石油



ジャンボリーのポスター

や石炭と異なり、守り育てていくことで枯渇しない資源。森林管理の新しい考え方と守り育てていく取り組みについて紹介された。また、世界中の自然環境の悪化を紹介した映像は、言葉以上に深刻な現実を映し出していた。

日野原会長は、過去から未来へと続くいのちの循環は、人間には計り知れない大きな力によって支えられている。私たちはその大きな力を謙虚に受け止めて、与えられたいのちを精一杯生かして次世代につなげていかななくてはならないと話された。そして、韓国からの特別ゲスト朴禧善先生や台湾からこの会のために来日された王麗瓊さんを紹介され、「新老人の会」を海外へも展開したいと述べられた。

2日目は「いのちと平和の森」バス視察ツアーののち、下記のような8つのテーマに分かれてワークショップを開催した。全国の会員有志が集いそれぞれのテーマについて語り合うことで、各地域の活動と意見交換を図った。

- | | | |
|-------|-----------------------------|--------|
| グループ1 | 緑の地球を後世へ | 参加者30名 |
| グループ2 | 信州支部の「いのちについての出前授業」をめぐって | 参加者33名 |
| グループ3 | 静岡支部の「認知症の予防にとり組む」をめぐって | 参加者38名 |
| グループ4 | 兵庫支部の「戦争体験を語り継ぐ」をめぐって | 参加者22名 |
| グループ5 | 子どもたちとの交流 | 参加者8名 |
| グループ6 | テニスによる全国交流を | 参加者6名 |
| グループ7 | 本部の「さっそうクラブ」をめぐって | 参加者38名 |
| グループ8 | 「新老人の会」発展を考える Working Group | 参加者30名 |

昼食をはさんで午後からは学校法人外語学園松本第一高等学校の合唱とワークショップの報告会を行い、2日間にわたる初めての試み「ジャンボリー」が終了した。

9 本部サークル活動

「新老人の会」本部でのユニークな活動の1つに、28種類にもおよぶサークル活動がある。活動の大半が会員からの提案であり、主宰者は本部事務局と運営方法について相談し活動へと進めてきた。また日野原会長自らの経験を生かしたオリジナルのアンチエイジングのためのさまざまなサークルもたいへん人気がある。以下本年の活動を報告する。

2007年度は全部で28のサークルが活動した。以下発足順に本年度の活動について報告する。()内主宰者。

1) 俳句の会 (木下星城さん)

俳句を通して人生百歳を生き抜く知恵を楽しく修得しようという木下先生の方針のもと、全国から俳句が寄せられている。句会形式をとらずに、ハガキで投句いただき、木下先生の添削後、隔月で会報に掲載している。毎回好評で、50名以上が参加している。

2) パソコン教室

健康教育サービスセンターで育成されたパソコンボランティアの有志により、マンツーマンで指導している。当初はインターネットやメールの送受信に限っていたが、現在は初心者の指導が中心となっている。

毎週金曜日午前、午後 500円 (機材使用料として)

3) テニス愛好会 (玉木恕乎さん)

長年慣れ親しんできたテニスを年齢に合わせて生涯楽しもうと愛好家が集まった。本年は第1回「新老人の会」ジャンボリーで全国交流も実現した。偶数月の第2水曜日、国立競技場西コートを利用し開催している。それぞれ糖尿病や前立腺症など持病を抱えているが、テニスが好きで元気にテニスコートを走り回っている。登録者15名。

4) コーラス (指導者 指揮 桑原妙子さん、ピアノ伴奏 鴛田 恵さん)

毎月2回、原則として第2・第4火曜日に、聖路加国際病院のトイスラーホールで練習している。登録メンバー87名と最も人気の高い活動である。現在ソプラノが47名、アルト31名、テノール・バリトン9名という構成である。11月8日には横浜みなとみらいホールで開催された恒例の「ヴィサン (人生百歳) ・ジョイント・コーラスフェ



本部サークル活動のリーフレット

スティバル」に参加した。

5) スローピッチソフトボール (小泉清昭さん)

スローピッチソフトボール (SPSB) を楽しみ「健康と生きがい」をモットーとして親睦を深めている。9月15・16の両日には『第3回日野原カップ争奪戦』が東京の大田スタジアムにて開催された。登録者は7名。現在会員募集中である。

練習日 毎週水曜日10時～12時まで 本郷台球場にて

6) 共に語ろう会 (実行委員)

毎月テーマを決めて、気軽に自由に話し合いをもっている。

今年度のテーマは「人生の目標」「日本人の長所と短所」「物忘れを防ぐ：脳トレ」「年寄りの不満を吐き出そう」「体力をつけよう」「日本人の優秀性と欠点」「発想を変えよう」「私の今年の大ニュース」などが取り上げられた。

7) クラシック音楽を楽しむ会 (井上太郎さん)

毎回モーツァルト愛好家の井上さんが、テーマを選び選曲と曲にまつわるエピソードをご紹介くださっている。また、今野尚美さんのピアノ伴奏にあわせた87歳の小島亮一さんのバイオリン演奏、二期会のパス歌手として活躍されている新保堯司さんの歌声もお楽しみいただいている。今年度のプログラムは次の通りであった。「近代フランス音楽とナポリ民謡」「涼しさを呼ぶ音楽」「秋に探るロマンの薫」「名演奏家の至芸」「ワルツの歴史」。

8) 詩吟の会 (指導者 古田優龍さん)

6月から日本吟導学院の古田先生の指導のもと再スター

トを切った。吟道は「気を養う」道。声を出すことはストレス発散にもつながり、健康づくりにも繋がる。12月には古田先生が「にじの会」と命名。毎月第1・3金曜日の午後開催している。現在登録者14名。

9) 山の会 (藤田 貞さん)

山登りの経験者が、高齢者でも無理のない山登りを楽しんでもらおうと企画している。元気な方でも年齢的に体力の減退があり、引き返しも含めて安全に務めた登山を心がけている。隔月に開催。最高齢の参加者は92歳の男性。毎回10名~15名程度で開催している。

- ・ 5月16日(水) 「三つ峠」
- ・ 7月24日(火) 「霧ヶ峰・車山」
- ・ 9月19日(水) 「那須・茶臼岳」
- ・ 11月14日(水) 「足柄・八倉岳」
- ・ 1月23日(水) 「南房総高塚山」
- ・ 3月19日(水) 「ジダンゴ山」

10) 生け花を楽しむ会 (峯岸千栄子さん)

峯岸さんが稽古場を開放して開催している。稽古場の練習以外にも、自然散策や花展などの見学などを試みている。現在3名が参加。

稽古場 世田谷区世田谷教室・大泉教室。月2回第2・4木曜日

11) 漢字書道を楽しむ会 (加藤良行さん)

「書はその人の生きてきた人生で書くもの。新老人の方たちの書は、その人生が現れているから素晴らしい」と加藤先生はその上達ぶりを評している。お正月には床に和紙を広げて、お書き初めも楽しまれた。

毎月第1・3木曜日の午後、漢字書道を開催。登録者10名。

12) 朗読の会 (指導者 櫛部妙有さん)

櫛部先生の指導のもと毎月第2・4月曜日に開催。

日本語を大切に、言葉の持つ意味を考えながらどう伝えるかというレベルの高い目標に妥協をせずに取り組んでいる。登録者10名。

13) 英語の会

初級、中級に分かれて開催。初級は中学生程度の英語力に合わせて会話を主に学んでいる。中級は持ち回りで毎回違うテーマをフリートーキングする。また発音はネ

イティブ・スピーカーとして藤野貞子さんから指導を受けている。毎月第1・3水曜日午前中に開催。初級登録者10名。中級登録者15名。

14) 数学の会 (宮川ユリ子さん)

元数学教師の宮川ユリ子さんが「頭の体操」として数学の会を主宰している。会では中学の初歩程度に焦点を絞り、プラスマイナスの数の計算や数学に関する面白い話などを紹介している。

第3月曜日午後。

15) 前向きに考える集い (津村和男さん)

不定期でテーマを決めて会合を持ち勉強会を開催。

- ・ 4月19日(水) ドイツテレビ番組
「神風 - 日本の若者に下った死の命令」の上映
- ・ 5月7日(月) 「ベトナムの枯れ葉剤の影響を追い続けて30年——フォトジャーナリスト - 中村梧郎先生をお迎えして - 」
- ・ 6月15日(金) 「最近の国際情勢と日本」 田久保忠衛さん
- ・ 1月16日(水) 「新老人の老後を考えてみませんか」
世話人8名。毎回参加者は20~40名

16) 歴史探訪の会 (荒木金四郎さん)

身近な歴史、風土を再確認する。現地のシルバーボランティアガイドの解説により学識を深めている。隔月開催。毎回参加者は20名程度。

- ・ 4月20日(金) 横浜の公園と遺跡を訪ねる
- ・ 6月29日(金) 金沢塩の道から鎌倉へ
- ・ 10月26日(金) 江ノ島探訪 雨天順延にて12月14日(金)に実施
- ・ 2月29日(金) 横浜の街角散歩・紅葉坂から野毛へ

17) 新老人が世界を語り合おう (吾郷慶一さん)

毎月1回開催し、内外情報を交換し合ってきた。本年は3年間の集大成として、日本をよくし、世界を平和にするための提言をまとめて「新老人の会」会報などで発表した。

提言の骨子

- 一. 人類や生物を殺傷しない。平和と共生は倫理であり、「愛」が基本である。
- 一. すべての戦争やテロを停止する。日本の憲法第九条は永遠に不滅である。

- 一. 日本は防衛省を縮小し、警察予備隊とする。
- 一. 拝金主義の資本主義体制を修正する。資源の浪費は人間や動植物の滅亡を招く。

18) フラダンスの会 (宮川ユリ子さん)

現在五十数名が、毎週楽しみながら初級とシニアに分かれて練習している。本年は「新老人の会」設立7周年フォーラムでの発表に加え、福島支部フォーラムに招かれ、約1,800名が参集したパルセいいざかホールの舞台で2曲を披露し、福島支部との交流を深めた。

19) 中高年からのスキー教室 (高橋 巖さん)

妙高高原・池の平スキー場で開催。その他12月16日には東京港区六本木の東京ミッドタウンを訪れるなど親睦を深めている。

20) 丹田呼吸法 (櫻井忠敬さん)

いつでも無理なくできる軽い動作・操作を繰り返し、普段使っていない呼吸筋を鍛錬しながら、正しい呼吸・からだによい呼吸法を身につける。日常生活の中に組み込む方法を学ぶ。丹田呼吸法は、自然治癒力、免疫力を高め、心のリフレッシュになると好評である。月2回2・4火曜日。

21) 中国生まれの諺 (山口左熊さん)

日本人にも馴染みのある中国語の諺を選び、その諺が生まれた経過や関係した人物を紹介し、諺の本来の意味や味を理解する。毎月1回第2木曜日に開催。

山口先生は本年90歳を迎えられた。

22) 水彩画教室 (指導者 茅野玲子さん)

「誰でも手軽に描けて楽しめる」そんな絵画の会を持ちたいという思いを受けてくださる適任の指導者を得て開催した。茅野さんは「絵には上手い下手はありません。それぞれの個性と生き方が感じられる豊かなもの」と。この教室ではその個性を表現するコツを学ぶことができる。1コース6回。1回1,500円。

23) 短歌の会 (川合千鶴子さん)

川合先生は、短歌を作ることは自分の心をつめること。季節に触れ、自分の心に触れて「存命の喜び」を知ることだとおっしゃいます。年齢を重ねて、外に自由に出かけられなくなったとしても、歌づくりは心の糧となり

ます。

24) 川柳の会 (大野風柳さん)

「日常生活の喜怒哀楽をことばで表現しましょう」と新潟在住の「新老人の会」会員の大野さんが呼びかけた。大野さんは「川柳は本音の文芸。ときには喜び、ときには怒り、そんな自分の正直な心情を書いてみてください。日常生活で綴る五・七・五を楽しみましょう」と一人遊びの醍醐味を語っている。

大野さんの作品

- ・旅先で定価通りの薬買う
- ・震度3我楽多だけが落ちてくる

会員の作品をご投稿いただき、添削後、隔月の会報にて発表。

25) 皆で唄いましょう

今まで挑戦したことのない「自ら作詞・作曲し自分で唄う」ことを実行し、あちこちの介護ホームに慰問している。ピアノ伴奏はプロとして活躍している東京音楽大学を首席で卒業された宇井優先生が担当。本年は原宿竹下通りのアコ・スタディオに会場を移した。また、日野原先生を招いて第1回の発表会を開催した。参加者は毎回20~30名程度。1回2,000円(会場費、講師謝金等)

26) さっそうクラブ (指導者 本田愛子さん)

日野原会長発案による。年齢を重ねても年齢を感じさせない歩き方を研究。歩き方ひとつで気持ちも若々しくなってくるという日野原先生の持論がかたちとなった。モデル出身の本田さんが、美しく安全な歩き方と姿勢、立ち居振る舞いを取り入れながら、皆の前で「ほめる」ことの利点を生かした指導をすることが好評である。1コース6回。1回500円。年4回開催。

本年度より開催されたサークル活動

27) 源氏物語購読会 (竹田照子さん)

日本古典文学の最高峰とされる源氏物語を読み解き、語り合う。

毎回十名程度が集まり声に出して読み解くことで日本語の美しさを再発見している。

28) バレエ・ストレッチ (井上みどりさん)

これも「新老人」ならではの企画。音楽に合わせて、呼吸をしながらバレエの基本にそって身体を動かすこと

で、身体のしなやかな動きを取り戻す。普段使わない小さな筋肉を動かすことで、骨盤の周りの筋肉などがしっかりと鍛えられ、歩くことも楽になるという。

29) いきいき健康体操 (小林貴子さん)

今の自分の体力を少しでも長く保持することを目的に、いろいろな音楽に合わせてストレッチ体操・ゴムチューブなどを使って脚力強化、やさしいダンス、指遊びなどをする。開催開始は2008年度から。

10 本部事務局主催

チャリティ講演会 DVD の上映と講演会

「にがい涙の大地から」映画監督の海南友子さんをお迎えして

日時 10月12日(金) 13:30~15:30

戦後日本軍が中国に遺棄した毒ガス兵器が、急成長を続ける中国の建設現場で爆発事故を引き起こしている。その後遺症で苦しむ患者や家族をとらえたドキュメンタリー映画。海南さんは1971年東京生まれ。日本では忘れ去られつつある60年前の戦争という史実が、いまだ新たな被害者を生み出していることに驚愕したという。日本の侵した事実から逃れることはできない。忘れ去るのではなく、よりよい未来のために過去を見据えようと海南さんの取り組みを応援しようと企画した。参加者 35名

講演会

「張作霖と張学良と日中関係」 儀我壮一郎先生

日時 3月16日(水) 13:30~16:30

2008年6月は、中華民国の奉天軍閥・張作霖の没後80周年の祥月命日にあたる。講師の儀我先生は、張作霖の軍事顧問であり、張作霖爆殺事件では九死に一生を得た儀我誠也を父にもつ。満蒙を日本の実質的支配に囲い込もうと、日本政府の思惑に翻弄された張作霖・学良親子。張作霖爆殺事件は、その後の関東軍暴走、軍事独裁への道を切り拓く出発点であった。戦後60年を経て、憲法九条の見直し、自衛隊のあり方など、戦後世代の行く末が問われている。戦争の歴史を繰り返さない方策を体験した歴史から学びとることも「新老人の会」の大きな活動の一つであり、意義深い催しであった。参加者48名。

11 新老人の会

ヘルス・リサーチ・ボランティア

2002年11月に本格的に調査が開始されて以来、2008年11月で5年目となる研究であるが、この間、2005年には調査の中間報告をまとめて冊子を発行したほか、関連学会への報告や学術雑誌への投稿などに実績をあげてきた。今年度は、5年後の再調査ということで種々の調査用紙による健康調査の他に、前回とほぼ同様の検査(新老人ドック)を港区三田のライフ・プランニング・クリニックで前回の遺伝子検査を除く検査項目に中心動脈圧検査と心臓ホルモン(BNP)の検査を加えた検査を実施しているところである。

報告 / 石清水由紀子 (「新老人の会」事務局長)

12 2007年度支部の活動状況

No	支部名	世話人代表	会員数	エリア	設立年月日	世話人会開催	ニュースの発行	サークル数	サークル活動その他
1	九州支部	原 寛	326	福岡, 佐賀, 長崎, 大分	2001/9/8	6/年	隔月	4	コーラス/英会話教室/韓国語講座/能古語ろう会/樹人千年の会/模擬患者の会/自分史年表/健康フェアイル
2	兵庫支部 はりまブランチ	富永 純男 天野太映子	320 (67)	兵庫	2002/2/5	ブランチごと 1/月 合同2/年	4/年	11 2	コーラス/朗読/エッセイ/戦争体験を語り継ぐ/旅の英会話/気功/散策/DVD/オペラ鑑賞/写真/ゴルフ コーラス/ヨガ
3	京滋支部	森 忠三	146	京都, 滋賀	2002/5/26	毎月第2水曜日	隔月	6	パソコン/コーラス/語る会/ブリザードドライブラワー/史蹟探索/健康講座/ハーブ
4	山陽支部 山口ブランチ	二宮 義人 金子 純	432 (62)	広島, 山口	2002/9/11	5/年 例会	1/年	1	おりがみの会/会員の集い(春, 秋)
5	東海支部	神 米一郎	191	愛知, 岐阜	2002/11/26	1/月	3~4/年	10	回懇クラブ/朗読/俳句/コーラス/ウオーキング/頭の体操・数/心と体を考える/自分史をつくる/話題の広場/ワインを楽しむ
6	北海道支部	松本 脩三	195	北海道	2002/12/6	1/月	2/年	3	歴史を学ぶ/お話交流会/パークゴルフ
7	阪奈和支部	阿部 裕	244	大阪, 奈良, 和歌山	2003/1/13	毎月第2水曜日	1/年	2	大覚寺散策/健康交番/探訪の会
8	信州支部	横内祐一郎	180	長野	2003/4/17	16/年	無	2	「いのちと平和の森」活動/いのちについての出前儒教/総会
9	山梨支部	小林 茂	85	山梨	2005/6/12	7/年	3/年	7	健康歌謡/文学に親しむ/ゴルフ/遺跡と文化財めぐり/ベトナムク/ハワイアンダンス
10	東北支部 北東北ブランチ	阿部 圭志 吉田 豊	148 (48)	宮城, 山形 青森, 秋田, 岩手	2004/10/11	3/年 5/年	1/年 1/年	無	会員総会/集会(小講演会) 読会/研修旅行/手記の出版
11	島根支部	森山 勝利	67	島根	2005/7/26	必要時	2/年		
12	四国支部	内田 泰史	153	高知, 徳島, 愛媛	2005/8/14	無	2/年	6	脳ドック(無料)受診, 懇親会/美術鑑賞/散策/ハイキング/写真/フラダンス/長(息)生き会
13	鳥取支部	入江 伸二	76	鳥取	2005/8/29	1/月	4/年	4	自然保護活動
14	新潟支部	笹川 力	131	新潟	2005/10/12	1/年	2/年	なし	会員集会/小講演会
15	福島支部	佐藤 勝三	236	福島	2006/1/28	7/年	2/年	2	会員の集い/パソコン/囲碁/道しるべ出版(講義録)
16	熊本支部	小山 和作	142	熊本	2006/4/1	1/月	6/年	5	戦争を語り継ぐ会/童謡・唱歌を歌う会/オカリナ/ゴルフ/ピースジュエリー/演劇
17	静岡支部	室久敏三郎	142	静岡	2006/7/2	1/月	2/年	1	輝きサロン(会員が講師になる)年7回
18	宮崎支部	青木 賢児	259	宮崎	2006/9/24	6/年	2/年	検討中	
19	鹿児島支部	鹿島 友義	98	鹿児島	2006/12/15	1/月	隔月	4	カナリヤ会(唱歌)/史蹟めぐり/小旅行/おしゃべり会
20	富山支部	前田 昭治	50	富山	2007/3/21	3/年	検討中	検討中	
	神奈川ブランチ	中島 良能	448	神奈川	2006/4/30	1/月	3/年	7	コーラス/クラシック音楽同好会/丹田呼吸法/五行歌/鶴形/手作りパン・スイーツ/手作りエシヤレ着物着から
21	岡山支部	河田 幸雄	85	岡山	2007/7/6	1/月	2/月	3	俳句/絵手紙/グループひととき
22	三重支部	鈴木 司郎	101	三重	2007/8/28	隔月		検討中	会員の交流会年2回を地域もち回りで開催

表1 「新老人の会」 地方支部・ランチ講演会

月	日	曜日	内 容	講師・出演者	参加者数
4	10	火	鳥取支部 会員と一緒に囲む会 倉吉未来中心会議室 鳥取支部フォーラム 倉吉未来中心大ホール 13:00~ ～生き方の選択～ ・世話人代表挨拶, 来賓挨拶 ・事務局長挨拶 ・「新老人の会」活動状況 ・講演:「生き方の選択 モデルになる人との上手な出会い」 ・フィナーレ (合唱) ・閉会の挨拶	小田 貢 (鳥取支部事務局長) 石清水 由紀子 (新老人の会事務局長) 日野原 重明 (新老人の会会長) 入江 伸二 (鳥取支部世話人代表)	1560
	14	土	新潟支部設立1周年記念フォーラム ホテル新潟2階芙蓉 13:30~16:50 ～生きがいを感じられる生き方のモデル～ ・開会のあいさつ ・「新老人の会」活動状況 ・ハートフルコンサート～なつかしさと、あたたかさと幸福感につつまれて～ 演目: 唱歌メドレー等, ノクターン (ショパン), ラ・カンパネッラ (リスト), メロディ (ノブロ), ヴェニスの謝肉祭 (ジュナン) 出演: ピアノ・田中幸治 / フルート・中林恭子 / ソプラノ・加村千晶 / 詩の朗読・戸山しのぶ ・講演:「生きがいを感じられる生き方のモデル」 ・閉会の挨拶	笹川 力 (新潟支部世話人代表) 石清水 由紀子 (新老人の会事務局長) 日野原 重明 (新老人の会会長)	800
	27	金	信州支部4周年記念長野フォーラム 長野県県民文化会館大ホール 13:30~16:30 ～「第三の人生」への挑戦～ 第一部 ・開会挨拶 ・「新老人の会」活動状況 ・講演:「若く輝く新老人を目指して」 若い人と共に 第二部 ・トリオアンサンブルコンサート フルート・中野清史 / チェロ・原香恋 / ピアノ・中野もと子 ・合唱 ゴールドハーモニー混声合唱団 曲目:「千の風になって」「アヴェ・ヴェルム・コルプス」 指揮・和田朗 / ピアノ・中野もと子 ・みんなで一緒に歌いましょう! ・閉会挨拶	横内 祐一郎 (信州支部世話人代表) 石清水 由紀子 (新老人の会事務局長) 日野原 重明 (新老人の会会長) 指揮: 日野原 重明 (新老人の会会長) 山崎 崇男 (長野フォーラム 実行委員長)	

月	日	曜日	内 容	講師・出演者	参加者数
5	9	水	第4回近畿連合フォーラム(京滋支部・阪奈和支部・兵庫支部) ~若い世代のモデルとなる新老人の生き方~ 芦屋ルナ・ホール 13:30~16:30 ・開会挨拶 ・「新老人の会」の活動について ・講演:「輝いて生きる」 励まし支えあいながら ・講演:「若い世代のモデルとなる新老人の生き方」 ・音楽:フルートとピアノの演奏「歌の翼」ピアノ:堀早苗, フルード:堀彩 :アカシアコーラス.....指揮:三宅正誼 曲目:「川の流れるように」「郭公」「そのままがいい」「千の風になって」 「ヴォランティアのうた」 ・閉会の挨拶	富永 純男 (兵庫支部世話人代表) 石清水 由紀子 (新老人の会事務局長) 高木 慶子 (「生と死を考える会 全国協議会」会長) 日野原 重明 (新老人の会会長)	618
	12	土	九州支部フォーラム2007 ~日野原重明先生特別講演会プログラム~ エルガーラホール大ホール 13:00~16:00 第一部: ・ご挨拶 ・「新老人の会」の活動状況 ・ただいま100歳 ・「樹人千年の会」報告 ・アトラクション 合唱.....コールひまわり 曲目:「そのままがいい」「タウベルトの子守歌」「千の風になって」 「みかんの花の咲く丘」「ふるさと」 シャンソン.....山本弘子 曲目:「小雨降る径」「愛の賛歌」 合唱.....福岡女学院高校音楽科 曲目:「こころに愛を」「春に」「歌のいのち」「みこころにしたがい」 「主よおわりまで」「夢のはじまり」 第二部: ・特別講演:「若い人のモデルとなる新老人の生き方」	原 寛 (九州支部世話人代表) 石清水 由紀子 (新老人の会事務局長) 昇地 三郎 (しいのみ学園理事長) 山田 洛秋 (九州支部世話人)	650
	6	3	日	島根支部フォーラム ~講演と心のコンサート~みんなであうたってお話こう 松江市総合文化センター・プラバホール 13:30~16:30 ・講演の部 「障害をもちながら健やかに生きる」 「心、ゆたかに生きたい」 ・音楽の部:日本のうた 曲目:「そのままがいい」「浜辺の歌」「夏思い出」「ゆりかご」 「母 七つの子」「この道」「みかんの咲く丘」 「Piano Solo ショパン幻想即興曲」「忘れな草をあなたに」 「テネシーワルツ」「いつかはきこう」「そのひとつともに」「ふるさと」	日野原 重明 (新老人の会会長) 宮城 まり子 (ねむの木学園主催) うた:稲村なおこ ピアノ:岡本祥子

月	日	曜日	内 容	講師・出演者	参加者数
7	6	金	<p>岡山支部設立記念フォーラム 「若い世代のモデルとなる新老人の生き方」 岡山衛生会館（三木記念ホール） 13：30～16：20</p> <ul style="list-style-type: none"> ・開会の挨拶 ・アトラクション：女性合唱（指揮：佐々木英代，ピアノ：田中優子） 曲目：「空とぶうさぎ」 両手ですくってみたら 足指でおセンチク 指輪 お母さん 空とぶうさぎ 「TOKYO 物語」 前奏曲 リンゴの歌 東京の花売娘 星の流れに 東京ブギウギ 青い山脈 銀座カンカン娘 君の名は お祭りマンボ エビローグ・ここに幸あり 「千の風になって」 ・「新老人の会」活動状況 ・講演：「若い世代のモデルとなる新老人の生き方」 ・全員の合唱：曲目「忘れな草をあなたに」 ・閉会の辞 	<p>上田 智 (岡山支部世話人代表) 黒田 輝一 (設立記念フォーラム 実行委員長) 岡山女性合唱団「華」</p> <p>石清水 由紀子 (新老人の会事務局長) 日野原 重明 (新老人の会会長)</p>	800
	14	土	<p>静岡支部創立一周年記念講演会 「新しい生き方のモデルとなろう～各年代の方々へ～」 アクトシティ浜松大ホール 13：30～16：30</p> <p>第一部：講演会</p> <ul style="list-style-type: none"> ・開会の挨拶 ・講演：「新しい生き方のモデルとなろう～各年代の方々へ～」 ・「新老人の会」活動状況 <p>第二部：アトラクション</p> <ul style="list-style-type: none"> ・親・子・孫三代300名の大コーラスと全員合唱（指揮：玉川昌幸，山崎秀夫） ・全員合唱：曲目「ふるさと」（指揮：日野原重明） ・閉会の辞 	<p>室久 敏三郎 (静岡支部世話人代表) 日野原 重明 (新老人の会会長) 石清水 由紀子 (新老人の会事務局長)</p> <p>浜松唱歌と童謡を 愛する会 浜松男声合唱団 “オーロラ” 蒲幼稚園 園児・保護者・先生</p>	1480
8	8	水	<p>新老人の会 北海道支部設立記念5周年記念フォーラム 「実りある第3の人生を考える」 札幌グランドホテル2階グランドホール 15：45～</p> <p>第一部：ピアノ演奏 曲目：バッハ，ベートーヴェンの作品など</p> <p>日野原会長と会談</p> <p>第二部：講演「生きかたの転換」 個人のユニークさをどう発揮するか</p>	<p>上杉 春雄 (札幌麻生脳神経 外科病院内科医長)</p> <p>日野原 重明 (新老人の会会長)</p>	360

月	日	曜日	内 容	講師・出演者	参加者数
8	25	土	<p>新老人の会 福島支部フォーラム 「生き方のモデルとなる新老人」 バルセイいざか 14:00~16:10</p> <p>第一部： ・「新老人の会」活動報告</p> <p>・講演：「生き方のモデルとなる新老人」</p> <p>第二部： ・ハワイアン・ダンス 曲目：「ア・ソング・オールド」「月の夜は」</p> <p>・ポリネシアン&ハワイアンフラ 曲目：「グッバイ・ホノルル」「クパランディング」</p> <p>・合唱 曲目：「風よ そよげ」「おわいやれ」「ほたるこい」「古い日本の歌」 「夏の思い出」</p>	<p>司会：福原 榮声</p> <p>石清水 由紀子 (新老人の会事務局長)</p> <p>日野原 重明 (新老人の会会長)</p> <p>マハロ・フラグループ (新老人の会 本部サークル)</p> <p>リリアフラスクール</p> <p>やながわ女性コーラス 代表：田口 洋子 指揮：板垣 忠直 ピアノ：石川 美奈</p>	1800
9	4	火	<p>新老人の会 東海支部設立5周年記念フォーラム 名古屋市名東文化小劇場ホール 13:00~16:00</p> <p>第一部：橋本やす子とYYフラグループトークと皆で楽しむフラダンス</p> <p>第二部：講演「新老人は若者に何を与え、若者から何をもらえるか」</p> <p>第三部：交流会</p>	<p>日野原 重明 (新老人の会会長)</p>	380
10	16	火	<p>「新老人の会」宮崎支部設立1周年記念フォーラム 子どもにいのちの大切さをどう伝えるか シーガイアサミットホール 13:30~16:00</p> <p>開会行事 ・宮崎支部設立1周年にあたって</p> <p>・「新老人の会」の活動状況</p> <p>記念講演 ・「子どもにいのちの大切さをどう伝えるか」</p> <p>ピアノコンサート ・曲目：「ピアノソナタ第31番」ベートーヴェン、「トロイメライ」シューマン他</p> <p>閉会行事 ・日野原会長指揮により「千の風になって」参加者全員の合唱</p>	<p>青木 賢児 (宮崎支部世話人代表)</p> <p>石清水 由紀子 (新老人の会事務局長)</p> <p>日野原 重明 (新老人の会会長)</p> <p>松田 浩子 (ピアニスト)</p>	1150
	30	月	<p>「新老人の会」熊本支部講演会 輝いて生きる 生き方上手 熊本県立劇場演劇ホール 13:00~</p> <p>・講演：「輝いて生きる 生き方上手」</p> <p>・愛の歌ミニライブ</p>	<p>日野原 重明 (新老人の会会長)</p> <p>姫 由美子 (シャンソン歌手)</p> <p>森若 三栄子 (ピアノ伴奏)</p>	1200
11	14	水	<p>「新老人の会」山口支部発足フォーラム ~輝いて生き抜きて候~ 周南市文化会館 13:00~16:50</p> <p>・世話人代表挨拶</p> <p>・「新老人の会」の活動状況</p> <p>・第一部：講演「生きかたの刷新」</p> <p>・第二部：アトラクション「般若心経からモーツァルトまで」</p> <p>・エンディング：「千の風になって」日野原先生とご一緒に大合唱</p>	<p>岩森 茂 (山口支部世話人)</p> <p>石清水 由紀子 (新老人の会事務局長)</p> <p>日野原 重明 (新老人の会会長)</p> <p>中市 博之 (音楽プロデューサー)</p>	1800

月	日	曜日	内 容	講師・出演者	参加者数
11	15	木	<p>「新老人の会」山陽支部設立5周年記念フォーラム ～日本から世界に向けて、平和に生きる生き方の提唱～ ふくやま芸術文化ホールリーデンローズ大ホール 13:00～15:30</p> <ul style="list-style-type: none"> ・世話人代表挨拶 ・「新老人の会」活動状況 ・第一部：ミニコンサート「マイ・ハート ビタミンコンサート 私の貯金箱」 曲目：We love the EARTH from HIROSHIMA, オペラ「カルメン」より「ハバネラ」、赤とんぼ、 川の流れるように、ユーモレスク、伝えよう笑顔と心 ・第二部：記念講演 「日本から世界に向けて、平和に生きる生き方の提唱」 	<p>二宮 義人 (山陽支部世話人代表) 石清水 由紀子 (新老人の会事務局長) 沖田 孝司 (「マイ・ハート弦楽四重奏団」ヴィオラ奏者) 沖田 千春 (ヴァイオリン奏者) 藤井 美雪 (メゾ・ソプラノ歌手)</p> <p>日野原 重明 (新老人の会会長)</p>	1826
	26	月	<p>「新老人の会」岩手ランチ設立記念フォーラム ～「第三の人生」への挑戦～ 岩手県民情報交流センター・アイーナ 13:00～15:30</p> <p>第一部</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「新老人の会」の活動状況 ・特別講演：「輝いて生きる」 <p>第二部</p> <ul style="list-style-type: none"> ・詩朗読：「いのちと勇気のことば」(ビデオ上映) ・詩朗読：命の詩集「形のない水」 ・創作童話朗読：「白い森のおはなし」 ・コーラス 曲目：里の秋、もみじ、ちんちん千鳥、さわると秋がさびしがる、ほろほると、 ふるさと、ニューエルダリーの歌 日野原先生と一緒に皆でうたいましょう 	<p>石清水 由紀子 (新老人の会事務局長) 日野原 重明 (新老人の会会長)</p> <p>紫波町立紫波 第一中学校1年生 生内 由紀子 (「銀の鈴」代表) 二階堂 芳子 (劇団「帯の会」代表) 岩手コーラスサークル Uの会 代表・佐々木 啓子、 指揮・齋藤 暉</p>	420
	12	4	火	<p>「新老人の会」神奈川ランチ主催・小田原フォーラム 小田原市民会館 13:30～16:30</p> <p>第一部：講演</p> <ul style="list-style-type: none"> ・開会の挨拶 ・「新老人の会」の活動状況 ・講演：「生き方の刷新」 <p>第二部：コンサート</p> <ul style="list-style-type: none"> ・女性合唱 曲目：「アメージンググレイス」、「ホワイトクリスマス」、「きよしこの夜」 ・管弦楽曲 曲目：「ネプチューンの夢」、「フルート協奏曲 二長調K314」、 「母と子の永遠の絆」 ・全員合唱 曲目：「新老人の歌」 ・閉会の挨拶 	<p>河野 顕子 (フォーラム実行委員長) 石清水 由紀子 (新老人の会事務局長) 日野原 重明 (新老人の会会長)</p> <p>マルベリー・ チェンバークワイア 指揮：桑原 妙子</p> <p>日野原重明 祝祭管弦楽団 指揮：中島 良能 フルート：平山 恵 マルベリー・ チェンバークワイア コール・アミカ 指揮：日野原 重明</p> <p>河野 顕子 (フォーラム実行委員長)</p>

月	日	曜日	内 容	講師・出演者	参加者数
12	7	金	<p>「新老人の会」鹿児島フォーラム ～どうすれば人生のよいモデルを見つけられるか～ 鹿児島市民文化ホール第一 14:00～17:00</p> <p>オープニング ・開会の挨拶</p> <p>・「新老人の会」の活動状況</p> <p>第一部 ・講演:「どうすれば人生のよいモデルを見つけられるか」</p> <p>第二部 ・パレエ講演 演目・ドンキホーテより「夢の場」、ピーターラビットとゆかいな仲間達</p> <p>第三部 ・コーラス</p>	<p>鹿島 友義 (鹿児島支部 世話人代表)</p> <p>石清水 由紀子 (新老人の会事務局長)</p> <p>日野原 重明 (新老人の会会長)</p> <p>有川泉パレエアカデミー</p> <p>鹿児島支部会員有志 「カナリア会」</p>	1300
	19	土	<p>阪奈和支部・和歌山地区フォーラム 和歌山東急イン4階末広の間 13:30～17:30</p> <p>・開会の辞</p> <p>・講演:「若い脳・朗らか脳」</p> <p>・音楽:曲目「琵琶湖周航の歌」「涙そうそう」</p> <p>・講演:「輝いて生きる」</p> <p>・歌と癒しの音楽:曲目「ヴォランティアのうた」「よき友をもちて」 「かごめかごめ～故郷」</p> <p>・閉会の辞</p>	<p>阿部 裕 (阪奈和支部 世話人代表)</p> <p>宮村 敬 (和歌山地区 フォーラム世話人)</p> <p>板倉 徹 (和歌山医科大学 脳神経外科教授)</p> <p>和歌山県立医科大学 看護学部学生)</p> <p>日野原 重明 (新老人の会会長)</p> <p>記の国音楽療法研究会</p> <p>鈴木 恵美子 (和歌山地区 フォーラム世話人)</p>	280
1	20	日	<p>阪奈和支部・奈良ランチ設立総会 ～いのちを語る～ かしはら万葉ホール 13:30～16:00</p> <p>・「新老人の会」の活動状況</p> <p>・特別講演:「いのち」</p> <p>・健康体操</p> <p>・歌と音楽</p> <p>・記念講演:「輝いて生きる」</p> <p>奈良ランチ設立記念パーティ</p>	<p>石清水 由紀子 (新老人の会事務局長) 座長:阿部 裕 (大阪労災病院 名誉院長)</p> <p>吉田 修 (奈良県立医科大学 学長)</p> <p>指導:松田 晴子 (奈良県立医科大学 附属病院リ八部)</p> <p>仲井 人土 (奈良県立医科大学 附属病院リ八部)</p> <p>東 和成 (奈良県立医科大学 附属病院リ八部)</p> <p>指導:川崎 佐和子 (奈良市社協 音楽療法推進室)</p> <p>松本 佳久子 (奈良市社協 音楽療法推進室)</p> <p>座長:八嶋 隆 (八嶋医院理事長)</p> <p>日野原 重明 (新老人の会会長)</p>	1000

月	日	曜日	内 容	講師・出演者	参加者数
3	4	火	<p>兵庫支部主催 播磨ランチ 生きかたの転換をどう行うか その具体的な方法 姫路市文化センター・大ホール 14:00~16:45</p> <ul style="list-style-type: none"> ・開会挨拶 ・市長挨拶 ・オペラとシャンソン 曲目：オペラ「オオソレミオ」「千の風になって」、 シャンソン「愛の賛歌」「見上げてごらん夜の星を」 ・講演：「生きかたの転換をどう行うか」 その具体的な方法 ・新老人の会説明・入会ご案内 ・コーラス 曲目：「ヴォランティアのうた」「霞か雲か」「ニューエルダリー」「故郷」 ・閉会挨拶 	<p>天野 太映子 (播磨ランチ 代表世話人)</p> <p>石見 利勝 (姫路市長)</p> <p>司会：石見 利勝 オペラ：篠原 良三 シャンソン：千城 恵 ピアノ伴奏：藪 慶子</p> <p>日野原 重明 (新老人の会会長)</p> <p>石清水 由紀子 (新老人の会事務局長)</p> <p>司会：井田 由</p> <p>コーラス： 播磨ランチ有志</p> <p>指揮：日野原 重明， 永木 圭子</p> <p>ピアノ：和田 晶</p> <p>西詰 吉隆 (播磨ランチ 副代表世話人)</p>	1300
	31	月	<p>山陽支部主催 下関フォーラム 輝いて生きる 山口銀行本店講堂 11:00~12:15</p> <ul style="list-style-type: none"> ・開会挨拶 ・支部代表挨拶 ・「新老人の会」の活動状況 ・講演：「輝いて生きる」 	<p>福田 浩一 (山口銀行頭取)</p> <p>二宮 義人 (山陽支部世話人代表)</p> <p>石清水 由紀子 (新老人の会事務局長)</p> <p>日野原 重明 (新老人の会会長)</p>	400

表2 「新老人の会」7周年記念講演会

月	日	曜日	内 容	講師・出演者	参加者数
11	11	日	<p>「新老人の会」7周年記念講演会 ～子どもたちに残したい未来のために～シェーンバウハ砂防 13:00～16:30</p> <p>オープニング ・「新老人の会」とは～活動紹介～</p> <p>・フラダンス「マハロ・フラサークル」 ・第1回表彰式 22支部の活動から.....九州支部, 信州支部 個人の活動から.....■地三郎さん(101歳)</p> <p>講演1 ・「豊かさ」を探し求めて 宇宙へ, そして大地へ</p> <p>講演2 ・こどのたちに残したい未来のために 新老人の生き方が未来を創る</p> <p>エンディング: ミニコンサート ・今野尚美さんのピアノコンサート 曲目: 愛の夢(リスト), 幻想即興曲(ショパン), 日野原会長のモチーフによる即興演奏</p> <p>・特別出演.....ソプラノ歌手: 里中トヨコさん 曲目: お父さまにお願い(ブッチーニ), 千の風になって(新井満), 若き日の四季の歌(日野原会長作詞・作曲)</p> <p>・日野原先生の指揮と一緒に歌いましょう 曲目: 新老人の歌</p>	<p>石清水 由紀子 (新老人の会事務局長)</p> <p>日野原 重明 (新老人の会会長)</p> <p>秋山 豊寛 (日本初宇宙飛行士, 農業家)</p> <p>日野原 重明 (新老人の会会長)</p> <p>今野 尚美 (ピアニスト)</p> <p>里中 トヨコ (ソプラノ歌手)</p>	415

表3 会員懇親会

2007年

月	日	曜日	内 容	講 師	参加者数
4	4	水	懇親会 ホテル・ルポール麹町 12:30~14:50 司会・進行:丹羽茂久 (元・文化放送アナウンサー「新老人の会」世話人) ・開会挨拶 ・乾杯 ・会食 ・皆で唄いましょう - 宇井先生のリードのもとで、大きな声で唄いましょう - ・閉会挨拶	日野原 重明 (新老人の会会長) 道場 信孝 (帝京平成大学教授) 宇井 優 (指導・伴奏) 石清水 由紀子 (新老人の会事務局長)	110
5	21	月	山梨支部親睦コンペ 春日居ゴルフクラブ 12:20~13:20 - 日野原重明会長を囲んで昼食会 - 山梨支部定期総会・親睦交流会 ベルクラシック甲府 16:00~18:00 ・平成19年度「新老人の会・山梨支部」定期総会 ・交流会 第一部:ワインセッション「ワイン王国やまなしを語る」 第二部:会員親睦交流会~日野原重明会長を囲んで~	日野原 重明 (新老人の会会長) 横内 正明 (山梨県知事) 小宮山 美弘 (元・県ワインセンター所長)	20 105
7	14	土	静岡支部会員の交流会 日野原先生を囲む懇親会 名鉄ホテル4階「芙蓉の間」 17:00~19:00		120
	18	水	第1回ジャンボリー in 松本 ホテル「ブエナ・ビスタ」 18:00~20:00 全国新老人の会会員の交流会		240
8	25	土	福島支部会員交流 ・桃狩り ・懇親会 福島ビューホテル 17:30~18:30		88
	28	火	三重支部設立発足会 三重県文化会館会議室 16:30~17:30	日野原 重明 (新老人の会会長) 石清水 由紀子 (新老人の会事務局長)	50

2008年

月	日	曜日	内 容	講 師	参加者数
1	19	土	阪奈和支部・和歌山地区会員の集い 和歌山東急イン3階桃山 17:30~18:30 懇親会		280
2	23	土	阪奈和支部会員の集い 大阪東急イン 15:00~17:00	日野原 重明 (「新老人の会」会長) 石清水 由紀子 (「新老人の会」事務局長)	80
3	3	月	兵庫支部会員の集い ホテルオークラ神戸 11:30~15:00 ・開会 ・挨拶 ・会食・懇親会 食後の音楽 クレセントハーモニー 曲目: ・宗教曲「主はわが牧者なり」「来なさい重荷を負うもの」「キリストのように考え」 ・日本の歌「雨の来る前」「雨」「ふるさとの四季より 故郷、朧月夜、われは海の子、村祭り、冬景色、雪、 故郷」 「新老人の歌」 日野原先生のお話 「私の健康10か条」 ・閉会	芝野 昭男 富永 純男 (兵庫支部代表) 指揮:洲脇 光一 伴奏:加藤 あや子 指揮:日野原 重明 (「新老人の会」会長) 畑中 九州生	145

延べ開催回数合計 9回、延べ参加人数合計 1,238名、平均入場者数 約138人

表4 ジャンボリー全国大会

2007年

月	日	曜日	内 容	講 師	参加者数	
	18	水	第1回ジャンボリー：講演会 緑の地球を後世へ「新老人は何をなしえるか」 まつもと市民芸術館主ホール 13:00～16:45 オープニング： ・フラダンス ・松本市長の挨拶 ・「新老人の会」活動状況 ・講演：「地球環境時代の森林管理と木材利用」 ・講演：「自然から学ぶ生きる力」 ・「歓喜の歌」大合唱（指揮：花岡由裕，ピアノ：渡辺かおる・白田由香里，） ソプラノ：渡辺しおり，アルト：草間裕美，テノール：金子春雄， バス：草間謙一郎 ・「一緒に歌いましょう」（指揮：日野原重明）	マハロ・フラサークル (新老人の会サークル) 菅谷 昭 (松本市長) 石清水 由紀子 (新老人の会事務局長) 速水 亨 (速水林業 代表取締役社長) 日野原 重明 (新老人の会会長) 第九を歌う会 丸の内中学校	1000	
	7	19	木	第1回ジャンボリー：ワークショップ 緑の地球を後世へ「新老人は何をなしえるか」 ・いのちと平和の森視察 アルプス公園 いのちと平和の森（車窓） 長野県立こども 病院 あがたの森文化会館 ・ワークショップ ・8つのグループにわかれてのワークショップ 緑の地球を後世 司会進行：儀我壮一郎（新老人の会世話人） 30名 「いのちについて」の出前授業 司会進行：新老人の会信州支部33名 認知予防に取り組む 司会進行：新老人の会静岡支部.....35名 戦争体験を語り継ぐ 司会進行：畑中九州生（新老人の会会員）22名 子どもたちとの交流 司会進行：亀井省三（新老人の会会員） 8名 テニスによる交流 司会進行：玉木忍平 (新老人の会サークル「テニス愛好会」主催) 6名 さっそうクラブ 司会進行：本田愛子 (新老人の会サークル「さっそうクラブ」講師)38名 ワーキンググループ 司会進行：松原博義（新老人の会世話人） 三宅信史（新老人の会阪奈和支部世話人）30名 ・合唱：曲目「新老人の歌」 ・ワークショップの報告・意見交換 コーディネイト：石清水由紀子（新老人の会事務局長） ・総評 ・閉会の辞	日野原 重明（「新老人の会」会長） 日野原 重明（「新老人の会」会長）	230

延べ開催回数合計 1回、延べ参加人数合計 230名

表5 「新老人の会」共催講演会

2007年

月	日	曜日	内 容	講 師	参加者数
5	16	水	福島支部共催：いっしょに感動しません会主催「輝いて生きる」 南相馬市民文化会館大ホール 14：00～16：15 ～日野原重明先生特別講演会プログラム～ ・開会のことば、「新老人の会」とは ・第一部：講演「輝いて生きる」 ・第二部：コンサート指揮：荒武敬，合唱：ゆめはっと合唱団 曲目：「千の風になって」「アヴェ・ヴェルム・エルプス」 (指揮：日野原重明)「故郷」	石清水 由紀子 (新老人の会事務局長) 日野原 重明 (新老人の会会長)	1,300
			山梨支部共催：山梨県児童民生委員会90周年記念大会 山梨県民文化ホール 13：45～15：30 ・特別講演：「子どもと老人の絆をどうつくるか - 世界の平和をめざして -」	日野原 重明 (新老人の会会長)	2,000
8	28	火	三重ランチ共催：三重県生涯学習センター 三重県文化会館中ホール 14：00～16：15 新しい人生を始めるビジョン - 各年代の方々のために - 第一部：日野原重明講演会 第二部：コンサート「あした見る夢」 曲目：オペラ「アリア」の中から、美空ひばりメドレー、楽しく歌とダンスを 日野原先生と一緒に「母と子の永遠の絆」「シャル・ウィ・ダンス」 皆様とごいっしょに歌いましょう「ふるさと」	日野原 重明 (新老人の会会長) 大塚 ■子 (弁護士)	900

延べ開催回数合計 3回，延べ参加人数合計 4,200名，平均入場者数 約1,400人

表6 「新老人の会」後援講演会

2008年

月	日	曜日	内 容	講 師	参加者数
3	22	土	十六銀行 創立13周年記念 JR 岐阜駅前じゅうろくプラザ 13：30～16：00 くるる講演会&コンサート ～シニア社会をいきいきと～ ・第1部：基調講演：「シニア社会をいきいきと」 ・第2部：コンサート：「歌と語りによる浅草オペラの世界」	日野原 重明 (「新老人の会」会長) ソプラノ：渡部 千枝，丹羽 道子 バリトン：石川 保，鳴海 卓 バイオリン：高橋 誠 ピアノ：山下 勝 (名古屋芸術大学講師) 語り：たかべ しげこ (名古屋音楽大学教授)	600

延べ開催回数合計 1回，延べ参加人数合計 800名，平均入場者数 約800人

表7 「新老人の会」共催スポーツ大会

2007年

月	日	曜日	内 容	講 師	参加者数
9	16	日	財団法人日本健康スポーツ連盟主催 - メイジャ・マクレ・14リーグ (60歳以上の健康スローピッチソフトボール) - 第3回日野原重明カップ争奪スローピッチソフトボール大会 大田スタジアム 9：00～ 「新老人の会」サークル・スローピッチソフトボールチチーム参加	日野原 重明 (新老人の会会長) 岩下 美恵子 (LPC 健康教育サービスセンター)	450 (新老人の会会員のチーム 1チーム・5名参加)

延べ開催回数合計 1回，延べ参加人数合計 110名

表8 本部サークル活動実績

サークル名	主催者・講師	開催回数	参加者数	活動場所
初めてのパソコン教室	丸山好子, 関紀子, 川村やよい	14	18	
テニスを楽しむ会	玉木恕乎	5	53	国立競技場西テニス場・ 鎌倉わかみや KKR 施設
コーラス・コールバンドナ	指導者: 桑原妙子, ピアノ伴奏: 鶴田恵	17	1240	聖路加国際病院トイスラーホール
スローピッチソフトボール	小泉清昭	44	311	本郷台・小菅広場
共に語ろう会	世話人	11	153	
クラシック音楽を楽しむ会	井上太郎 ゲスト: 新保堯司 (オペラ歌手) 小島亮一 (バイオリン) 今野尚美 (ピアニスト)	6	111	
詩吟の会	古田優龍	19	203	
山の会	藤田貞	6	114	弘法山ハイキング 幕山ハイキング
生け花を楽しむ会	根岸千榮子	29	82	峯岸先生宅
漢字書道を楽しむ会	加藤良行	19	155	
朗読の会	櫛部妙有	24	192	うち3回明石小学校にて朗読 ボランティア
英語でトーク		22	279	
数学を愉しむ会	宮川ユリ子, 根岸愛子	10	137	
前向きに考える集い	津村和男	8	214	
歴史探訪の会	荒木金四郎	4	80	つつじ祭りの根津神社から大 観音 (光源寺) 吉祥寺へ, あ じさい白山神社から小石川植 物園へ, 愛宕神社から増上寺 へ, 麻布界隈を訪ねる, 忠臣 蔵ゆかりの地を訪ねる
新老人が世界を語りあおう	吾郷慶一	12	229	
踊りましょう~Let's フラダンス~	宮川ユリ子	77	1893	スタジオ60・渋谷神宮前, 発表 会 (東郷記念館水交会ホール)
丹田呼吸法~よい呼吸法はよい生き方に~	櫻井忠敬	22	287	
中国生まれの諺	山口左熊	10	110	
ゆうゆうスキークラブ	櫻井靖男	1	5	
①絵画 (水彩画) 教室	茅野玲子	18	114	
②皆で唄いましょう	主催者: 田和久美 指導者: 宇井優	14	316	
③さっそうクラブ	本田愛子	20	476	
④声のおしゃれ	高井敬子	14	158	
⑤源氏物語を読む会	竹田照子	10	74	
⑦バレエ・ストレッチ	井上みどり	6	76	

総開催回数 442回, 参加者総数 7,080人



ヘルスボランティアの育成と活動

所在地：東京都千代田区平河町2-7-5 砂防会館5階

I ヘルスボランティアの育成

1) ヘルスボランティア講座

特別コース

ハンセン病とともに50年 - 差別のない社会へ -

日 時：11月7日(水) 13:00~15:00

会 場：健康教育サービスセンター

講 師：湯浅 洋 (笹川記念保健協力財団顧問)

参加者数：27名

世界のハンセン病患者数は、30年前の1,200万人から現在は20万人にまで減少し、ハンセン病のない世界の実現が近いと考えられている。しかし、ハンセン病が太古から大きな問題になってきたのは、医療面の問題だけではなく、彼らを隔離し一般社会から閉め出すという社会的問題によってであった。ハンセン病の方々に対して行ってきたこれらの行動は、自分と異なる存在を排除するものであったと湯浅洋講師は話された。さらにこれからの人類の存続に関わる課題は地球上のすべての生物、宇宙環境といかに共生できるかにかかっている。この視点から今後のハンセン病対策を学んでいく必要があるとハンセン病の治療、予防、啓蒙活動に永年にわたって尽力してこられた湯浅先生の広い視野からの貴重な講演であった。

2) LPC ボランティア入門講座

日 時：2月27日(水) 10:30~15:30

会 場：健康教育サービスセンター

講 師：平野 真澄 (健康教育サービスセンター所長)

北川 輝子 (LPC ボランティアコーディネーター)

志村 靖雄 (ピースハウスボランティアコーディネーター)

参加者：6名

これからボランティア活動を始める、あるいは開始して間もない方々のために、LPC におけるボランティア活動を紹介し、活動経験者から体験談を聞くことで今後の活動に生かす学習を行った。なお、当講座は次項「模擬患者ボランティア (SP) 養成講座」の第1回講座と合同で実施したものである。

3) 認知症サポートボランティア講座

尊厳ある生き方を支えるヘルスボランティア DS (Dementia syndrome Support) コース

障害があっても、豊かに暮せる社会をめざそう

全講座8回：1月30日(水)~2月20日(水) 10:30~15:30

延べ参加者数：550名

2025年には何らかの介護や支援を必要とする認知症の高齢者は323万人に達するといわれている。その一方で、いまだに認知症を病気ではなく単なる老化現象ととらえる人が多く、病気としての正しい理解が十分でないのが現状である。これらの実情に対して、地域で、あるいは施設でボランティアとして関わるために必要な認知症高齢者についての知識と対応の姿勢について学んだ。受講者には認知症サポーターとして「認知症サポーター」(全国キャラバン・メイト連絡協議会)のオレンジリングが贈呈された。ボランティア講座としては2007年度に初めて連続講座として開講したものである。

4) 模擬患者ボランティア (SP) 養成講座

模擬患者ボランティア養成入門講座

当財団では、「模擬患者参加による教育法」にいち早く着目し、1975年にカナダのマクマスター大学教授の Howard S. Barrow を招聘し、日本の医学看護教育に模

認知症サポートボランティア講座内容

日 程	10:30~12:30 90分講義・30分ディスカッション	13:30~15:30 90分講義・30分ディスカッション
2008年1月30日(水)	「日本の高齢者 - その実態をさぐる」 講師：袖井 孝子 (お茶の水女子大学名誉教授)	「高齢者と健康 - 認知機能障害を中心として」 講師：道場 信孝 (LPC 研究教育部最高顧問)
2月6日(水)	「認知症サポーター - の活動」 講師：千代田区保健師	「高齢者の認知機能障害のある方のサポートについて」 講師：舩松 克代 (田園調布学園大学人間福祉学部助教)
2月13日(水)	「ボランティア活動と援助の姿勢」 講師：水野修次郎 (麗澤大学教授)	「老いても輝いて生きるための秘訣」 講師：日野原重明 (当財団理事長)
2月20日(水)	「高齢者ケアと生命倫理」 講師：鶴若 麻理 (聖路加看護大学助教)	「加齢による身体機能の変化とADLの維持」 講師：長尾 邦彦 (帝京平成大学専門学校理学療法学科長)

模擬患者ボランティア養成入門講座内容

第1回 2008年2月27日(水) 参加者数 51名	
10:30~11:30	ライフ・プランニング・センターの事業と活動について 講師：平野 真澄 (健康教育サービスセンター所長)
11:30~12:30	ライフ・プランニング・センターのボランティア活動 講師：北川 輝子 (LPC ボランティアコーディネーター)
13:30~15:30	ボランティア活動Q & A 講師：志村 靖雄 (ピースハウスボランティアコーディネーター)
第2回 2008年3月5日(水) 参加者数 49名	
13:30~14:30	模擬患者ボランティアについて 講師：福井みどり (臨床心理ファミリー相談室室長)
14:00~14:30	LPC ボランティアになって 講師：SP ボランティア
14:40~16:00	看護教育における SP の役割 講師：城戸 滋里 (北里大学看護学部准教授)
第3回 2008年3月14日(金) 参加者数 51名	
13:30~14:30	医学教育における SP の役割 講師：大滝 純司 (東京医科大学病院教授)
14:40~16:00	LPC 模擬患者ボランティア活動の紹介
第4回 2008年3月21日(金) 参加者数 47名	
13:30~14:30	模擬患者としてのフィードバックについて 講師：阿部 幸恵 (東京医科大学病院卒後臨床研修センター助教)
14:40~16:00	SP 体験学習 講師：SP ボランティア



熱心な SP 養成講座の受講生

擬患者 SP (Simulated Patient/Standardized Patient) の概念とその活用した「SP 参加による教育法」を紹介した。

その後、米国・カナダから講師を招聘して、同様のワークショップを3回開催してきたが、当初はほとんど普及しなかった。

日本では、長い間、医師の国家試験は知識試験に限られ、臨床能力をテストする出題に欠けていることが問題となっており、ようやく1990年代に入り医療コミュニケー

ションや医療面接の教育が拡充がされるようになった。それに伴い、体験学習に患者役として参加する模擬患者が少しずつ普及していった。2005年度より患者ときちんと話をして丁寧に診察できる医師や歯科医師を育てるために全国108の医学部、歯学部のある大学が4年生を対象に本格的に共通試験 (OSCE) が行われることとなり、にわかに模擬患者の養成がさかんになった。当財団では1997年度より SP の養成に着手していたが、医科大学等からの要請に応えるため2003年度から模擬患者養成講座を始めた。模擬患者を一人でも多く養成することが目的である。

本年度は、SP ボランティアの活動が財団のボランティアとしての活動の一環であることを周知徹底するために、第1回目の講義でライフ・プランニング・センターの事業と活動、ボランティア活動について説明した。

2006年度から SP ボランティア養成入門講座はボランティア自身で企画運営を行っている。活動内容のビデオ視聴や SP のロールプレイを経験者と共にグループワークで体験してもらったり、SP 活動の体験談を披露してもらったり、創意工夫を凝らした内容であった。

また、模擬患者の資質として重要なことは学生へのフィードバックである。フィードバックとは学習者の態度や言動が SP に及ぼした影響について学習者に伝えるコミュ

ニケーションである。SP がフィードバックした一言が良くも悪くも学生に大きな影響を与える。普段の SP の練習では学生のまず良いところをほめ、悪いところを指摘し、最後に良いところをほめる練習をしている。今回の講座ではこのフィードバックについて専門的に研究されている東京医科大学の阿部幸恵先生から「模擬患者としてのフィードバックについて」講義をしていただいた。SP は学生の教育に参画していることを強く意識し、人を育てる視点と姿勢がとても大切である。学生に「もっと聞いてほしかった」というフィードバックはないものなで、SP は学生とのやりとりの中で実際に起きた自分の中に湧き上がる気持ちを大切に学生に戻すことが望まれている。「もっと聞いてほしかった」という言い方ではなく、「悪い病気ではないかと不安だったのでその気持ちを話したいと思っていました」とか、また、「とても元気でよかった」という評価は漠然としていて、学生の印象に残らず、「うなずいて聞いてくれたのでとても安心して話せました」とフィードバックすると学生は何がよかったのか良く理解する。このような具体的な事例を挙げての講義で受講生は模擬患者ボランティアの奥の深さを実感した。

本講座から2007年度 LPC ボランティアとして登録された方は17名であった。次年度は58名でスタートする。

2 SP ボランティアの活動

1995年度から養成が始まった LPC 模擬患者 (SP) ボランティアは、養成当初はなかなか SP そのものの要請が少なく、当財団が行うセミナーなどの参加のみで年に2～3回ほどであった。しかし、2004年度より全国108の医学部、歯学部のある大学が4年生を対象に本格的に共通試験 (OSCE) が行われることになった影響で、当財団の SP への要請依頼も2005年は22件、2006年度は51件にまで上った。活動延べ人数も2005年度115名、2006年度295名と倍以上に増え、2007年度も大学等要請依頼60回、活動延べ人数298名であった。今後ますます需要が高まることが予測される。

2006年度より東京医科大学医学部において5年生の臨床実習に「SP との医療面接実習」が組み込まれ、授業への参加を1年間継続して行った。学生は SP とのロールプレイを通して傾聴技術、患者や病状を理解するための技法、医療者の心理と患者の心理などを学習した。医学部における SP の役割も OSCE のツールとしてだけで



施設でのデモンストレーションは60回にも及んだ

はなく日々の医学教育へ参画することで、一般市民としての声をより医学教育に反映でき、SP 活動の本来の意義を深められたと感じている。参加した SP はそれぞれに学生へのフィードバックの難しさを感じており、学生のプライドを傷つけずに患者の感情や心理状態が説明できるようによりフィードバックの練習に力を入れている。

また、2007年度の特徴としては模擬患者養成のために経験豊富な SP ボランティアが講演を行ったり、片麻痺患者への看護技術の模範技術のための患者役となり看護技術ビデオづくり、一般病院の医師や看護師への研修に参画したりしたことがあげられる。それらの活動は模擬患者ボランティア自身のやりがいにもつながる良い体験となっている。

看護学部からも、基本的な看護技術援助の SP 役とし

てだけではなく、血圧測定等バイタルサインのとり方からシーツ交換など基本的な看護技術のOSCEとしてSPを活用する学校もあった。また老年看護学の一環として認知症患者とのコミュニケーションとしての依頼もあり、学生にとっては高齢者と触れ合う良い機会となり、また高齢の模擬患者は自分たちが学生の役に立っていることに大いに満足している。その他、歯学部、作業療法学科からの依頼もあり、要請内容もコミュニケーション、試験、バイタルサインや関節可動域の測定のツールとしてなど多様になってきており、SPは臨機応変に教育側の要請に応えることが求められてきている。

また、本年度には神奈川県足柄上病院で事例のロールプレイを通してご家族とのより良いコミュニケーション技術を学ぶ「認知症患者の胃瘻造設をめぐる」と題する研修に参加し、医師、看護師、模擬患者とも改めてコミュニケーションの難しさ大切さを認識した。

SPの活動が学生の教育だけではなく、臨床の医療従事者教育にも今後大いに活用されていくことを願っている。

2007年度 SP 活動内容

月日	施設	内容	人数
4/6		定例会	31
4/10	東京医科大学	臨床実習	2
4/19	明海歯科大学	医療面接授業	10
4/23	明海歯科大学	OSCE 打ち合わせ	2
4/20		スタッフミーティング	7
4/24	東京医科大学	臨床実習	2
4/26	明海歯科大学	医療面接授業	9
4/28	明海歯科大学	OSCE トライアル	9
5/8	聖母大学	Com 演習	3
5/9		定例会	27
5/12	LPC	フィジカル講座	1
5/15	東京医科大学	臨床実習	2
5/18		スタッフミーティング	9
5/19	LPC	フィジカル講座	3
5/24	北里大学看護学部	看護基礎実習	7
5/29	東京医科大学	臨床実習	2
6/8		定例会	29
6/8	埼玉県立大学看護学部	インタビュー	1
6/12	東京医科大学	臨床実習	2
6/22		スタッフミーティング	9
6/26	東京医科大学	臨床実習	2
6/28	北里大学看護学部	看護基礎実習	7
6/29	埼玉県立大学看護学部	インタビュー	1
7/5	首都大学東京	関節可動域	10

月日	施設	内容	人数
7/6		定例会	34
7/10	東京医科大学	臨床実習	2
7/13	明海大学	OSCE	9
7/14	明海大学	OSCE	10
7/17	横浜市立大学看護学部	清潔ケア	20
7/20		スタッフミーティング	12
7/24	東京医科大学	臨床実習	2
7/27	川崎医療生協	研修参加	1
8/3		定例会	29
8/4	癌り八 (厚労省)	セミナー参加	2
8/24		スタッフミーティング	11
9/7		定例会	25
9/11	東京医科大学	臨床実習	2
9/21		スタッフミーティング	16
9/25	東京医科大学	臨床実習	2
10/5		定例会	34
10/9	東京医科大学	臨床実習	2
10/19		スタッフミーティング	12
10/23	東京医科大学	臨床実習	2
10/31	聖路加国際病院	研修医の教育	2
11/2		定例会	33
11/6	東京医科大学	臨床実習	2
11/7	首都大学東京	徒手筋力	11
11/7	神奈川県立大学よこはま	基礎看護学	1
11/9	横浜市立看護学科	コミュニケーション	16
11/10	埼玉県立大学	講演	2
11/16		スタッフミーティング	13
11/20	東京医科大学	臨床実習	2
11/21	神奈川県立大学よこはま	コミュニケーション	2
11/21	共立女子大学	コミュニケーション	4
11/25	埼玉県立大学	SP 養成講座講義	2
11/28	北里大学看護学部	看護基礎技術	7
11/28	共立女子大学	コミュニケーション	4
12/4	東京医科大学	臨床実習	2
12/7		定例会	32
12/12	神奈川県立保健福祉大学	脳梗塞患者	1
12/17	神奈川県立保健福祉大学	〃	2
12/18	東京医科大学	臨床実習	2
12/21		スタッフミーティング	12
12/26	聖路加国際病院	医療面接	3
1/9	首都大学東京	コミュニケーション	11
1/11		定例会	33
1/12	東海大学	アドバンスOSCE	24
1/15	東京医科大学	臨床実習	2
1/16	首都大学東京	OSCE	6
1/17	首都大学東京	OSCE	6

月日	施設	内容	人数
1/25		スタッフミーティング	11
1/29	東京医科大学	臨床実習	2
2/8		定例会	33
2/12	東京医科大学	臨床実習	2
2/21	東邦大学	基礎看護学	2
2/22		スタッフミーティング	10
2/25	首都大学東京	OSCE	6
2/26	東京医科大学	臨床実習	2
3/1	東京医科大学	アドバンスOSCE	30
3/4	足柄上病院	医師看護師研修	7
3/7		定例会	30
3/8	群馬大学医学部	基礎看護学	3
3/21		スタッフミーティング	18
3/22	医師研修会	コミュニケーション	1

延べ研修会	12回370名
延べスタッフミーティング	12回140名
延べSP派遣要請回数	60回
延べSP派遣者数	298名

3 血圧測定ボランティア研修 (グラントシニア)

血圧測定ボランティアとして登録している人たちを対象に継続教育の一環として年間5回開催している。2007

年度もメンバーの関心が高い「加齢によって起こってくる問題」の中から、グループごとにテーマを決めて学習したことをプレゼンテーションし、参加者から質問を受けてディスカッションを深めていく。この研修には道場信孝先生が同席され、医学的なコメントをしてもらうなど、血圧に関する医学的知識の蓄積を図っている。

今年度は6回実施し、延べ89名のグラントシニアが参加した。

4 血圧測定ボランティアの活動

2007年度の登録者は18名で、健康教育サービスセンターの教育プログラムにおいて血圧の測り方を指導したり、血圧自己測定講習会の指導に参加した。また、例年通りホームヘルパー2級養成講座の受講者15名を対象に、6月21・28日の両日10名のボランティアが実技指導に当たった。

最近では自動血圧計の普及により、聴診法で血圧の測り方を習得しようという人は少なくなり、年間を通じて血圧測定講習会に参加した人はわずか3名であり、3名のボランティアが実技指導を担当した。

報告 / 平野真澄 (健康教育サービスセンター所長)



カウンセリング 臨床心理ファミリー相談室

所在地：東京都千代田区平河町2-7-5 砂防会館5階

カウンセリングの目標は自己の世界の確認と柔軟性の養成にあり、人の成長と発達への援助活動である。カウンセリングを利用するクライアント層のうち子どもでは不登校や摂食障害、大人ではうつ等の気分障害や不安神経症など精神疾患的な問題を抱えた方が多いのが現状である。

当センターのように医療機関の外で行うカウンセリングでは、精神疾患的な問題を抱えたクライアントを信頼のできる精神科医や他の医師にいかに関わりよくコンサルテーションを行い、医師と連携をとりながらカウンセリングを継続していくのが大きな課題となっている。

カウンセリングの社会的役割を鑑みると、メンタルヘルスの予防、教育的な関わりをもつことなどが期待されている。学校や企業でのカウンセリング活動を主軸に、今後のカウンセリング活動を展開していきたいと考えている。

1 健康教育サービスセンター（砂防会館）での個別カウンセリングについて

健康教育サービスセンターでの個別カウンセリングには複雑で多岐にわたるさまざまな相談が持ち込まれてくる。したがってカウンセリング手法もケース・バイ・ケースであるが、TEG（東大式エゴグラム）による性格分析、SDS（うつ性自己評価尺度）をベースに必要と思われるケースにはMMPI（ミネソタ多面的人格目録）、BDI（ベック抑うつ質問表）を行い、カウンセリングのみで対応できないケースは精神科医へコンサルテーションをしている。これらの心理テストをベースに認知療法を行うなど、「自己の世界の確認と柔軟性の養成」を心がけている。最近の傾向として、子どものことや親のこと、そして夫婦のことなど、自分以外の人たちの問題で相談に来て、カウンセリングを通して自分の受け取り方の問題や感情に気づき、他者との関係の調整をしていくケースが多かった。あるケースは夫婦間の調整を希望され、当初は夫への怒りがあらわにされていたが、「カウンセリングを通してはじめて夫の本当の気持ちがわかった。夫を違う視点で見られるようになり、自分の考え方が変わった」と、本人がカウンセリングを受けながら問題を整理し、自分自身で新たな道を見出していくケースや、自分ではなか

なか決断がつかなかった問題が、カウンセラーの支援を受けて勇気をもって決断できていくクライアントもいた。カウンセラーとしてはクライアント自身が自分で判断し道を選んでいくことを何よりも大切にしている。

2 聖路加看護大学の学生職員を対象にしたカウンセリング

2006年11月から健康教育サービスセンターで行っていた学生カウンセリングを、月2回大学内で実施することにした。学内でカウンセリングを行うことは、これまでうつなど深刻なケースに片寄りがちであった相談内容が、「こんなことでも相談してもよいですか」といって気軽にカウンセリングを利用する学生が来室するようになった。相談室側では継続してフォローがしやすくなり、あわせてフィジカルな面での問題でこれまで以上に健康管理室や校医との連携がとりやすくなった。カウンセリングが自殺やうつなど深刻な問題となる前の予防として今後も役に立てばよいと考えている。

2007年度の学生の相談内容は、実習でのこと、指導教官とのこと、家族も含めた対人関係のトラブル、個人の性格に起因すること、うつなど気分障害を呈していることなど大きく5つに分けることができる。

カウンセリング手法は学生の状況に合わせて行っているが、ブリーフセラピー（解決志向カウンセリング）を心がけ、できるだけ学生自らの問題解決能力を引き出すことを大切にしている。心理テストはTEG（東大式エゴグラム）による性格分析、SDS（うつ性自己評価尺度）をベースに、必要と思われるケースにはMMPI（ミネソタ多面的人格目録）、BDI（ベック抑うつ質問表）をさらに行い、カウンセリングのみで対応できないケースは精神科医へコンサルテーションをしている。

3 企業におけるメンタルヘルス対策への取り組み

うつ病を中心とした勤労者の心の病は増加傾向にあり、改めて企業のメンタルヘルス対策の見直しが求められている。特に30代の社員のうつ病や神経症が増加傾向にあることが指摘されている。

現在、聖路加国際病院、葉っぱのフレディヘルパーセンターほか3カ所で提携し、職員へのメンタルヘルス対策へ参入している。自発的にカウンセリングを受けたい方への無料カウンセリング、電話相談のほか、健康相談の一環としてTEGによる性格分析とSDSによるうつ度のチェックを行っている。問題があつての面談ではないが、明らかに抑うつ状態で精神科医にコンサルテーションしたケースもあり、継続的にフォローを行っている。その他、職場での人間関係の持ち方や家族のメンタルな病気に対する相談や、部下とのコミュニケーションの持ち方などの相談も持ち込まれている。

4 聖路加国際病院カウンセリング

広報誌『明るい窓』の「無料カウンセリングのお知らせ」の記事を見て予約を取られたケースが3件あり、いずれもカウンセリングを行った。

表1 カウンセリング相談総数

4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	総計
32	24	16	21	5	13	12	11	13	10	13	10	180

表2 心理テスト総数

4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	総計
9	11	10	8	1	5	9	3	7	7	6	3	79

5 新老人のためのコンサルテーション

2004年度より新老人を対象にしたコンサルテーションを行っている。2007年度は2件の利用があった。

6 葉っぱのフレディヘルパーセンター、モレコーポレーションにおけるメンタルヘルス対策への取り組み

健康相談の一環としてTEGによる性格分析とSDSによるうつ度のチェックを行っている。何か問題があつての面談ではないが、明らかに抑うつ状態で精神科医にコンサルテーションしたケースが1例あり、継続的にフォローを行っている。

報告 / 福井みどり (健康教育サービスセンターカウンセラー)



国際フォーラム & ワークショップ

1 音楽療法

テーマ 脳機能回復の促進をめざした音楽療法
- スウェーデン生まれの音楽療法 -

日時 2007年4月29日(日) 10:00~16:30

会場 聖路加看護大学講堂

講師

アニータ・クランベルイ (カールスタッド総合大学イン
ゲスンド音楽大学)

加勢 園子 (ストックホルム・エステルマイム音楽アカ
デミー院長)

吉井 文均 (東海大学医学部神経内科教授)

日野原重明 (当財団理事長)

参加者数 146名

本講演会は、医療、看護、福祉関係者ら146名が参加した。実演に先立ちスウェーデン在住のピアニスト加勢園子さんがスウェーデンの文化と生活に影響を与えている音楽について解説をし、日野原重明理事長、東海大学医学部の吉井文均神経内科教授が脳機能回復を促進するために音楽療法が果たす役割の医学的検証や将来の可能性などについて講演した。ついで、FMT (脳機能回復音楽療法) の創始者であるラッセ・イエルク氏から指導を受けたスウェーデンのアニータ・クランベルイさんが参加者を相手にFMTを実演し、解説を行った。FMTは、通常、療法士が、患者の打楽器演奏に合わせてピアノを弾く形をとる。治療中には患者とは言葉を交わさず、音の振動や、打楽器を打つ筋肉神経的な動作を通して、患



音楽療法の国際ワークショップ

者の脳機能の回復を目指す療法である。スウェーデン国内のFMTセラピストの75%が学校関係、残り25%が医療機関で活躍している実態も紹介した。この国の福祉の基本理念は「すべての国民が同等となれる条件を整えるようにすることである」という言葉に代表される。学校で広くこの種の音楽療法が実践されていることは、早い段階でそれが必要とされる児童に平等に適用される環境が整っているということであろう。脳機能の回復は、まだ未解明な部分が多いといわれおり、日本の医療分野でもこの種の療法の有用性が実証され、音楽療法が広く活用されることを期待したい。

2 いのちの畏敬と生命倫理

テーマ いのちの畏敬と生命倫理 - 医療・看護の現場でもとめられるもの -

日時 2007年8月10日(金) 10:30~16:30

8月11日(土) 10:00~16:30

会場 女性と仕事の未来館ホール (東京都港区)

講師

ラックラン・フォロー (ハーバードメディカルスクール
准教授)

木村 利人 (恵泉女学園大学学長)

手島 恵 (千葉大学大学院看護学研究科教授)

日野原重明 (当財団理事長、聖路加国際病院理事長)

鶴若 麻理 (聖路加看護大学助教)

延べ参加者数 222名

プログラム

- ・医療従事者にとってのバイオエシックス.....木村 利人
- ・臨床における生命倫理の問題 看護の立場から
.....手島 恵
- ・ハーバード大学・看護学における生命倫理の教育カリ
キュラムについて.....ラックラン・フォロー
- ・バイオエシックスに関する演習 (グループワーク)
グループワークから見てきたもの
- ・いのちといじめの問題の取り組み.....日野原重明
[日本オスラー協会記念講演会]
- ・シュバイツァー博士の思想を受け継ぐ バイオエシッ
クスの今日の意味.....ラックラン・フォロー

対 談

・オスラー博士の考える生命の尊厳について語り合う
.....日野原重明 vs 木村 利人

本年度は8月10、11日の2日間にわたり、「いのちの畏敬と生命倫理」と題した国際フォーラムを実施した。講師は日本における生命倫理の第一人者である木村利人先生、看護学研究者の手島恵先生、医師であり核戦争防止国際医師会議（IPPNW）前議長でもあるラックラン・フォロー先生という多彩な分野にわたる講師陣であった。

参加者の職種も医師、看護師、看護教諭など医療関係者ばかりでなく、人文系、人間科学、工学系などさまざまな分野の教職者や学生、また牧師や住職など宗教者、老人保健施設の職員、老人問題等の研究者、一般企業の社員と多彩であった。参加者の分野が多岐にわたったのは国際フォーラムの大きな特徴と思われる。

「患者の権利の章典」が世界で初めて書かれたのは1972年ベス・イスラエル・ディーコネス・メディカルセンター（BIDMC）であり、そのころすでにBIDMCにおいてはすべての医療分野において倫理面のセクションが設けられていた。その後BIDMCでは今日まで、人道主義的医療を患者と家族のケアに展開しており、全米の医療における倫理プログラムをリードしてきた施設である。今回、「いのちの畏敬と生命倫理」をテーマに国際フォーラムが当財団の主催で開かれるにあたり、このBIDMCから倫理プログラムのコーディネーターを長らく務めているラックラン・フォロー先生（ハーバードメディカルスクール准教授）の招聘が実現した。

医療やケアの場面における倫理問題は、ようやくわが国でも施設内で倫理委員会を設置したり、倫理的な視点から臨床現場での業務の見直しや検証が始まりつつある。

木村利人先生（恵泉女子大学学長）は講演の中で、「バイオエシックスは1960年代に世界的に沸き起こった人種・年齢・性差別に対する市民運動の展開から生まれ、旧弊な“パターナリズム”への挑戦へと展開していった。医療分野においては、医療者の権威の下に支配されていた意思決定プロセスをクライアントと医療者の平等な関係性の中で捉えていこうとする原動力となった」と紹介し、さらに意志決定のプロセスにおいて重要な視座は、多様な価値観に基づく意思決定を尊重することだと語った。

看護の立場から倫理問題の研究を進めている手島恵先生（千葉大学教授）は、「教育講演の中で、わが国では看護倫理教育分野の人材が不足しており、教育において期



「いのちの畏敬と生命倫理」国際ワークショップ

待されるような十分な成果は上がっていない。また、臨床業務の中では問題解決型の指向だけにとらわれず、潜在力を使つてのビジョンの実現を目指すアプローチが倫理問題に取り組むためには必要であろう」と述べた。

これに対してフォロー教授は、「倫理というのは、日常の業務のすべての瞬間の中にあり、ジレンマを解決したり、倫理的な問題について答えを見出したりする特別なことだけではない。また、倫理的に優れた医師や看護師は高度な技術を身につけ、思いやりのあるケアを行うことができる。さらに、倫理的アプローチとは義務ではなく、何をなすべきか、道徳的に優れていることは何なのかを考えることが重要だ」と述べられた。そして、「道徳的に満足し、誇りをもって仕事ができる環境ではさらに肯定的なエネルギーが生まれ、自分のスキルアップへの意欲も育まれる」という上昇スパイラルが生まれていくと解説された。

講演に引き続いて、医療者が臨床で直面するさまざまなジレンマに対処する方策を考えるグループワークを行った。フォロー教授から提供された「重篤な火傷を負った患者の救命における倫理問題」に関する事例をもとに、今回のフォーラムの参加者がディスカッションを行うことによって自分の問題としては体験する演習を体験した。

フォロー教授は、医療者が治療において何を行うべきか明確でないときにするように、倫理的な問題についても以下の5つの項目、すなわち 事実の収集と評価、重点と争点となる価値観の分析、可能な医療行為の方針のプランニング、計画の選択とその理由の説明、予防的倫理の観点から、倫理的ワークアップを日ごろから学習プログラムに取り入れることの必要性を強調された。

報告 / 平野 真澄（健康教育サービスセンター）



海外医療事情調査

ヨーロッパ糖尿病会議 (EASAD ; Euro
pean Association Study of Diabetes) に参
加して日本の糖尿病協会を思う

出張者 朝比奈崇介 (ライフ・プランニング・クリニック所長)

期 間 2007年9月17日 - 20日

ヨーロッパ糖尿病会議 (EASD) に参加するためにオランダのアムステルダムに行った。私は社団法人日本糖尿病協会 (Japan Association for Diabetes Education and Care ; JADEC) の広報担当委員でもあり、ヨーロッパの国々の糖尿病協会の活動を調査することが目的であった。日本では1億2,000万人の人口に対しておよそ600万人の糖尿病患者がいると考えられているが、実際に糖尿病協会の会員は8万人ほどである。糖尿病協会がなすべきことは「糖尿病に関する正しい知識の普及啓発を行うことにより国民の健康増進に寄与すること」とあり、この「国民」は決して糖尿病に関係する国民ばかりではない。それゆえ、JADECはその会員に対するサービスのみならず、あまねく日本国民に対して予防活動を行い、そのことがもう少し国民に浸透してもよいはずであるが、協会がしている活動は決して広く国民に膾炙されているとはいえない。ヨーロッパの国々では糖尿病協会はどのような活動、特に広報活動を行っているのか、どのように資金を調達しているのか、また会員のリクルートをどうしているのか以前より疑問であった。

詳細は当財団発行の同名の報告書に譲るが、カザフスタン、ベラルーシ、イタリア、フランス、フィンランド、イギリス、ドイツ、ロシアなどのブースを回り、各国の協会の活動は各国の経済状態に一番依存しているように思えた。先進国は糖尿病の患者の権利を復活、維持するような活動まで行っていたが、経済状態が思わしくない国々では最低の医療レベルを維持するのにやっとの状態だった。先進国では会員獲得はそれなりに苦労しているが、このような活動は医療の現場で比較的国民に知らされていてそれで加入者は日本よりずっと多かった。

現在、日本の糖尿病協会の定款に書かれている目的は「糖尿病に関する正しい知識の普及啓発、糖尿病患者及びその家族の療養指導、糖尿病に関する調査研究を行うことにより国民の健康増進に寄与すること」とされてい

る。学会のみならず協会の事業の中にも「糖尿病の予防及び治療に関する調査・研究」を行うとあるが、この調査研究は現在微々たるものしか行われておらず、現実的には日本では学会が糖尿病学に関する研究をする機関であり、協会は国民の健康のために啓発・指導を行う機関である。しかし現在 JADEC が行っている事業はその大半が協会の支部の統括と協会会員に向けての会報の配布・販売による啓蒙であり、その他一般の活動内容が見えにくい。そしてまた支部の活動状況も会員の親睦、ウォーキングラリーや勉強会などにすぎない。

日本では国民当たりで糖尿病協会の会員になっている人は今回調査したヨーロッパの国々に比べて少ない。決して日本の糖尿病患者数がヨーロッパの他国に比べて少ないわけではないので、現在これだけ糖尿病患者が増えながらほとんど会員数が増加しないのは、一般社会へ働きかける活動が少なく、JADECが行っている活動がほとんど国民に見えないことが主であると思われる。

今回、他国の協会活動を垣間見て、地道ながら色々な活動を通じて国民全体の健康に還元しようとしている事業がいくつもあることがわかった。

それに照らし合わせてわが国の糖尿病協会が本来の定款に書かれている目的をなすために強化すべきこととして大事だと思ったのは、糖尿病協会会員だけを対象にする事業ではなく、全国的に糖尿病を減らす活動すること、そしてそれらの活動を国民に知らしめて、一般企業や国民からの寄付を受け入れることである。

そしてそれはすなわち以下のようなことになる。

- 1) 糖尿病協会会員だけでなく全糖尿病患者・全国民に対する糖尿病予防キャンペーンを行う
- 2) 糖尿病協会活動を全糖尿病患者・国民に周知させ、それによるロビー活動の強化
- 3) またそれらを背景に一般企業や国からの寄付、予算を取り付け、財政基盤を強化
- 4) 糖尿病学会にも科学研究費の補助などを行うことにより学会に対する発言力の強化
- 5) 協会の会員だけでなく全国の糖尿病患者に対し提供できる糖尿病治療に関わる情報とサービス網の強化

これからの本部は、支部が行い得ないような財政的な背景を基盤に提供するサービスを行うという棲み分けが大事と思われた。

4 教育的健康管理の実践

ライフ・プランニング・クリニック

所在地：東京都港区三田3-12-12 笹川記念会館11階

1 クリニックの目指すもの

「医療とは健康教育とその実践である」とは1902年に東京・築地に聖路加国際病院を創設したルドルフ・B・トイスラー先生の唱えた予防医学的見地から見た医療のあり方であるが、それはまた1973年に設立されて以来、当財団の根本的な理念でもある。これに基づき (1) 一般の人々がそれぞれに健康とは何かについて、その意義を考え、理解してもらうこと、(2) 健康を維持するため

の良い生活習慣とはどんなものかについての理解を深めてもらうこと、(3) 生涯を通じて健康を維持するために各自に合った生活のデザインを工夫し、これを良い生活習慣として実践するための方策を共に考えることの3つを柱とし、これを実践できるようにするための教育的支援を行うことが当財団の目標である。生活習慣に起因した疾病、つまり生活習慣病という名称は、このように予防医学的見地から見た疾病を、当財団の日野原理事長が唱え始めて広まったものである。

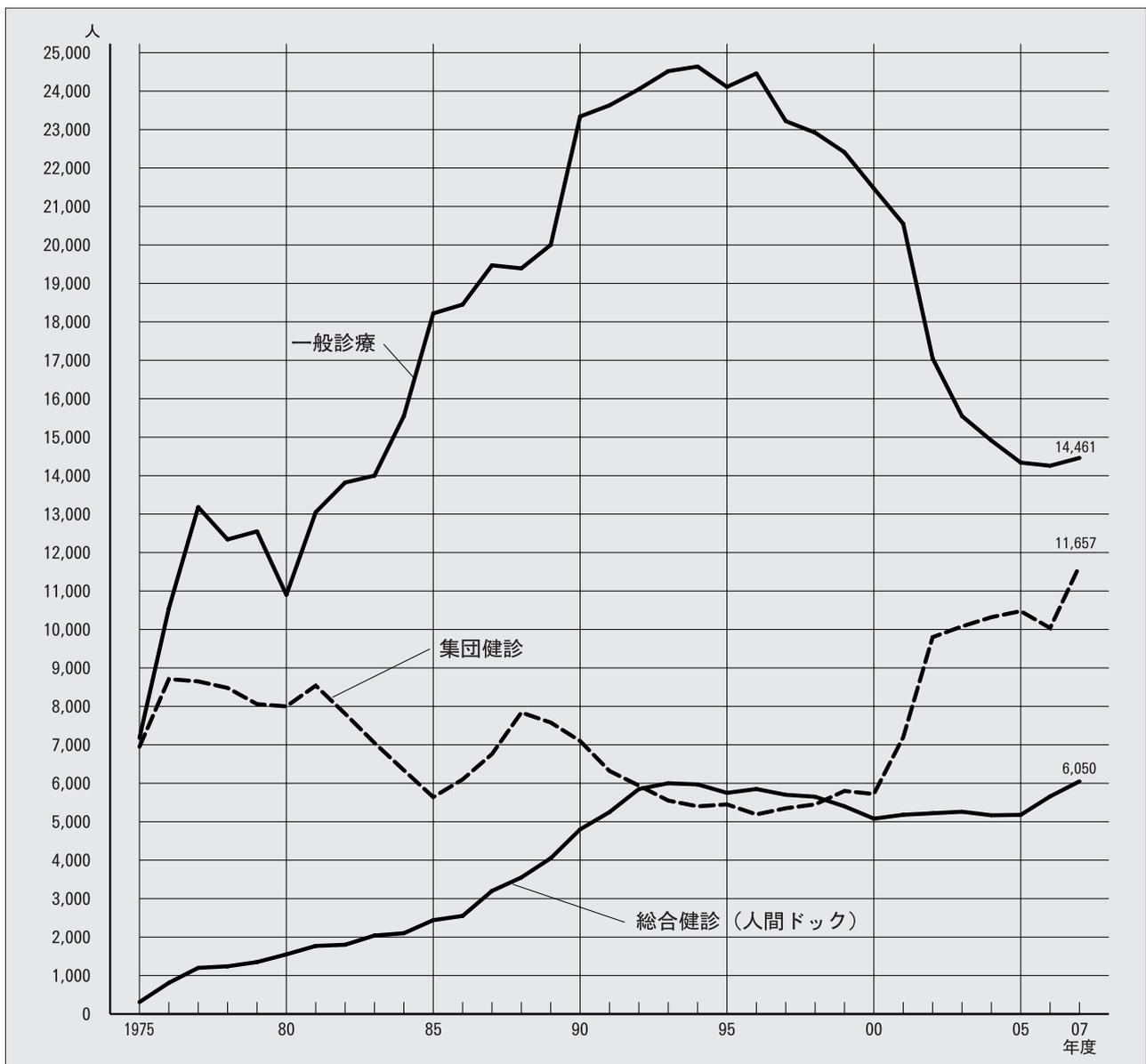


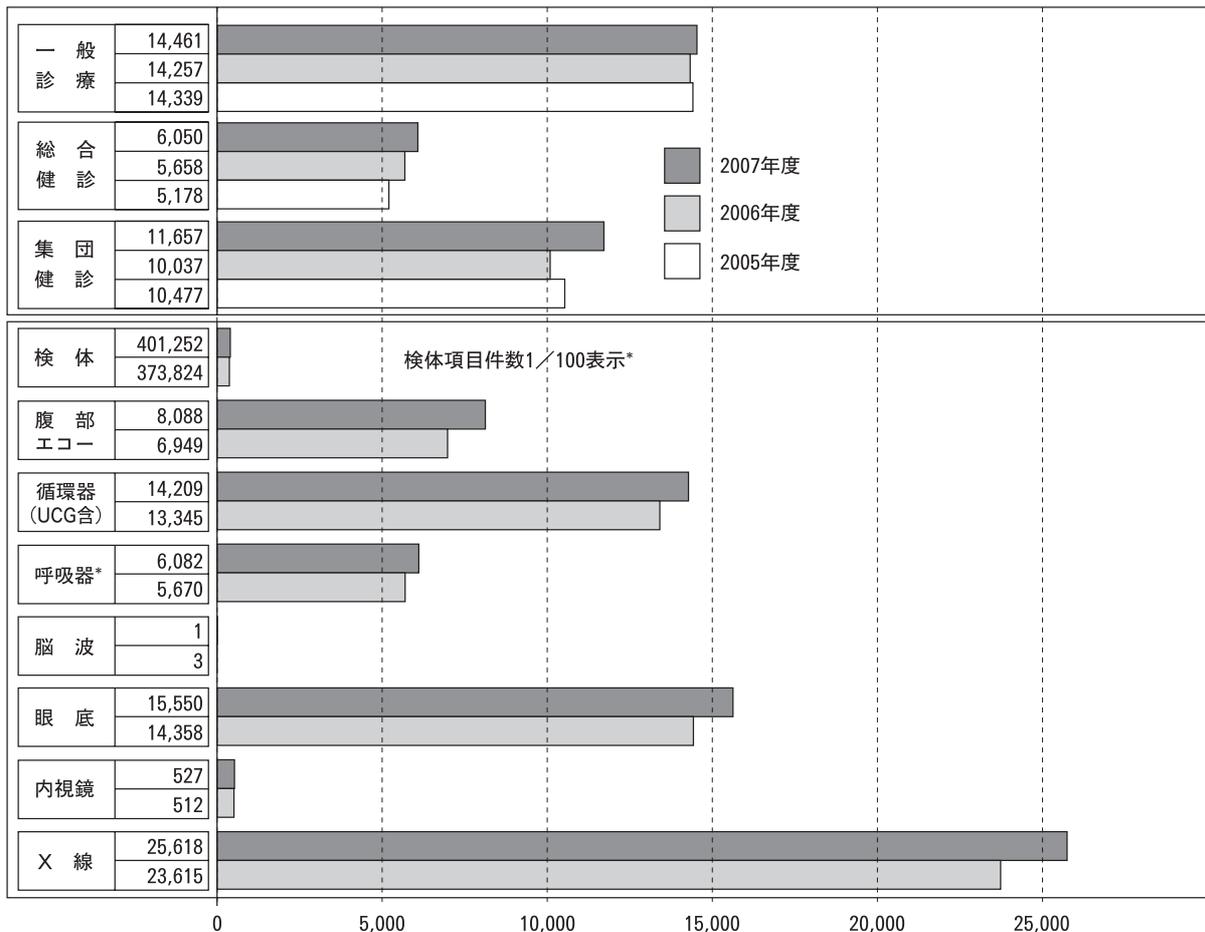
図1 受診者の推移

現在の日本人の総死亡原因の3分の1はがんなどの悪性新生物であり、また3分の1は動脈硬化を基にした心臓・脳血管障害である。最近まで一般に総合健診（人間ドック）や集団健診はがんなどの現在その受診者の生命を及ぼす危険性の高い疾患の早期発見をすること、つまり2次予防が目的であった。しかし私たちはがんの早期発見と同等に残りの死因の半分を占める心臓・脳血管障害の原因である動脈硬化の危険因子を発見し、未然に除去すること（＝一次予防）こそ重要であると当初より考えていた。つまり糖尿病、高脂血症、喫煙、高血圧、肥満など動脈硬化の危険因子を受診者から見出し、それを受診者にフィードバックして受診者の生活習慣が変わるように指導してこそドックや健診の本来の意味があると実に35年前から考え、実践してきたのである。

近年、医療制度改革大綱が決定され、生活習慣病予防の徹底を図るため平成20年4月より医療保険者に対して

糖尿病等の生活習慣病に関する健康調査（「特定健診」）及び特定健診の結果により健康の保持に努める必要がある者に対する保健指導（「保健指導」）の実施を義務づけられることとなった。これは健診の事後指導の重要性を国がようやく認めたことになるが、これはとりもなおさず私たちが35年前からしてきたことが正しかったことを証明するものである。しかし他方で、生活習慣への介入は非常に個人的な問題であるので、一般論を人々に押し付けても習慣はなかなか変わらない。その個人の生活、環境、嗜好、考え方などに合わせて指導する「個別化」が重要であり、非常に時間とマンパワーを必要とする。

昨年から、当クリニックはパイロットスタディとして一企業と組んで、未病であっても体重減少と禁煙を希望する社員に対して3カ月の個人面談、メール指導を行い、平均75kgの被検者の体重を平均4kg有意に落とすことに成功した。これまでも事後指導はしてきたが、方法論



*呼吸器（2004年度より肺気量分画測定とフローボリュームカーブをセットで1件とした）

図2 2007年度来所者数・検査件数

表1 総合健診の年代別受診者数

年齢区分	男性	女性	合計
29歳以下	26名 (0.6%)	22名 (1.2%)	48名 (0.8%)
30～39歳	1,001 (23.6)	299 (16.7)	1,300 (21.5)
40～49歳	1,279 (30.1)	484 (27.1)	1,763 (29.2)
50～59歳	1,074 (25.3)	483 (27.1)	1,557 (25.8)
60～69歳	627 (14.8)	328 (18.3)	955 (15.8)
70～79歳	197 (4.6)	132 (7.3)	329 (5.5)
80歳以上	42 (1.0)	41 (2.3)	83 (1.4)
合計	4,246 (100.0)	1,789 (100.0)	6,035 (100.0)

(「新老人ドック」受診者15名分含まず)

表2 検体検査

項目 年度	血液・生化学	血清学	血液学	尿	便	細胞診	細菌・その他	合計 (件)
2007	273,885	43,610	16,252	44,772	20,750	1,976	7	401,252
2006	252,059	40,581	15,381	44,941	19,259	1,591	12	373,824

表3 循環器機能検査

項目 年度	E C G			その他 (UCG 含まず)	合計 (件)
	安静時	ストレステスト	24時間モニター		
2007	14,014	65	22	8	14,109
2006	13,145	55	23	15	13,238

を定めて指導プログラムを組んで結果をまとめたことがなく、今回の成果を受けて平成20 (2008) 年度からの特定健診・保険指導にもこのような指導を試みていくつもりであり、今後も個人的な集団指導の方法の開発を継続して模索する予定である。

当クリニックにおける診療の特徴は、受診者が医師、看護師、栄養士その他の医療従事者やボランティアとの十分な対話を介した心の触れ合いの中で、自らの持つ健康上の諸問題を明確に自覚し、自らの生活習慣との関連を認識していただくよう指導することにある。このような診療方針に沿った具体的な方策として、受診者に関わるすべての職種の者がチームを組んで個々の受診者に対応し、それぞれの専門分野の立場から問題点に対しての意見を述べ、全人的かつ包括的医療がなされるように配

慮している。しかしただ相手の気持ちを思うだけでなく、常に自分たちのしている方法論を客観的に眺めることが必要であり、今後も科学的に評価をしながら方法論を考えていく発展性を有したい。

2 診療の概要

受診者数の推移を図1に示した。

診療の内容は、一般診療、総合健診 (人間ドック)、ならびに集団健診に大別されるが、一般診療は前年の1万4,257名に比べ、1万4,461名となり、204名 (1.4%) の増加となった。前年に固定した常勤医による診察に徐々に患者が固定してきたことによると思われる。

総合健診 (人間ドック) は政府管掌健保を含め、新規

の契約先が増えたこともあり、また、既存の契約先が順調に受診者数を増やしていただいたおかげで5,658名から6,050人と、392名(6.9%)の増加となった。集団健診についても1万37名から1万1,657名と、1620名(16%)の大幅な増加であった。

図2は2007年度の来所者数を前年・前々年度と比べて診療種目別にしたものである。

表1は2007年度の総合健診(人間ドック)の年代別受診者数の一覧である。

3 各種検査数の推移

1. 検体検査(表2)

本年度の取り扱い件数は昨年の37万3,824件より2万7,428件(7.3%)増えて総数40万1,252件である。一般診療、総合健診(ドック)、集団健診ともいずれも増えているのに従って増加しているものと思われる。

2. 循環器機能検査(表3)

安静時心電図検査は6.6%、ストレス検査は18%と共に増えている。少しずつではあるがオプションでストレス心電図を希望する受診者が増える傾向にある。

表4 脳波検査

年度	項目	
	12誘導	合計(件)
2007	1	1
2006	3	3

表5 超音波検査

年度	項目					
	上腹部	乳房	婦人科	甲状腺	心エコー	合計(件)
2007	7,353	686	11	38	100	8,188
2006	6,723	177	12	37	107	7,056

表6 レントゲン検査(胸部間接は出張健診時実施)

年度	胸部		消化管			乳房	骨量測定	その他	合計(件)
	直接	間接	胃部直接	胃部間接	注腸				
2007	14,825	321	7,879	741	2	1,437	396	17	25,618
2006	13,672	301	7,837	277	19	1,221	275	13	23,615

3. 脳波検査(表4)

今年も1件とほとんどないに等しかったが、航空身体検査が増えれば増える可能性はある。

4. 超音波検査(表5)

超音波検査は8,188件と、昨年の7,056件に比べ1,132件(16%)の増加である。この内訳を見ると、6,723件から7,353件と630件(9.3%)増えた腹部に比べ、177件から686件に288%と著しく増加した乳房エコーの伸びが目立つ。今後も乳がん健診の必要性の認識に伴いさらに増加すると思われる。

5. レントゲン検査(表6)

検査件数は昨年の2万3,615件より2,003件(8.5%)増えて2万5,618件となった。上部消化管造影は総受診数の増加に比べ低い、必要な受診者には胃カメラをお勧めしているとその差し替えの件数が増えてきたことによるとと思われる。乳房(マンモグラフィ)が1,221件から1,437件と17.7%、骨量測定が275件から396件と44%増えているが、今後も増加する可能性が高い。

6. 呼吸器機能検査(表7)

検査数は昨年より412件増えて7.2%と総合健診増加分と同様であった。

7. 子宮頸部がん細胞診(PAP検査)、子宮体部がん細胞診(表8、表9)

本年度、子宮頸部がんの早期発見のための細胞診を行った件数は、人間ドックで1,077件、健診で526件、一般診療で101件であった。細胞診判定の内訳は表8の通りで

表7 呼吸器機能検査

項目 年度	ルーティン 〔予測肺活量 1秒率〕 + FV曲線	合計 (件)
2007	6,082	6,082
2006	5,670	5,670

表8 子宮頸部がん細胞診

異形度 年度				a	b			合計 (件)
2007	701	972	7	23	1	0	0	1,704
2006	440	891	4	22	0	0	0	1,357

表9 子宮体部がん細胞診

異形度 年度				a	b			合計 (件)
2007	11	1	2	0	0	0	0	14
2006	13	4	1	0	0	0	0	18

表10 総合健診後呼び出し項目別件数 (3カ月～6カ月後)

項目	エコー				肝障害	脂質	貧血	血糖	尿酸	白血球 数異常	他血液	尿	腎機能	腫瘍 マーカー	X線 胸部	消化管	循環器 外来検	受診	
	腹	胆のう	肝	実数															
年合計	件数	21	11	2	34	33	28	71	37	6	11	35	180	13	41	17	14	5	4
	受診数	11	3	0	13	10	10	13	14	3	4	11	51	4	22	10	5	2	2
	率(%)	52.4	27.3	0.0	38.2	30.3	35.7	18.3	37.8	50.0	36.4	31.4	28.3	50	64.3	58.8	35.7	37.5	42.9

表11 総合健診後呼び出し件数 (率)
男女別, 受診回数別, 伝達法別比較

項目	全体	性別		受診回数		伝達法別		
		男	女	初回	複数回	当日	後日	郵送
呼び出し数	461	325	136	95	366	251	9	201
受診者数	148	108	40	23	125	82	2	64
%	32.1	33.2	29.4	24.2	34.1	32.6	22.2	31.8

ある。クラス・aは、専門医にて定期的に経過観察、または各病院に紹介した。bの1件は受診がなく、その後の経過は不明である。

また、子宮体部がん検査（ホルモン補充療法時のチェックなど）は全体で14件で細胞診判定の内訳は表9の通りである。

8. 眼底検査, 上部消化管内視鏡検査

眼底検査 (1,192件・8.3%増) と内視鏡 (15件・2.9%増) は総数の増加以上には増えていないが、特に内視鏡は今後もピロリ菌やペプシノーゲンの意味が一般に周知されるとともに増加していくものと思われる (図2参照)。

4 総合健診 (人間ドック)

総合健診・結果伝達状況およびその内容

ドック結果について、受診者は希望により、おおそ3通りの方法で説明・伝達される。結果について健診受診当日に説明し、生活指導・その他を行う (完成された結果成績表は後日郵送する)。健診日より1週間以降に来所し、結果説明を受けていただき、その場で結果成績表をお渡しする。後日結果成績表を郵送する、という方法である (ただし、契約により 一部の保険組合もある)。

総合健診受信者6,050名のうち、2,758名 (46%) が当日結果説明を受けられた。

要経過観察者のフォローアップ状況

ドック成績の結果3カ月～6カ月後に検査・精密検査が必要なケースについては、封書による案内を行っている。

2007年4月より2008年3月までの案内件数は461件、うち受診に応じたのは148件 (32.1%)、呼び出し内容については表10のごとくであった。また、男女別・受診回数別・結果伝達法別についての比較は表11に示した。

表12 総合健診の異常発見率

性・数	順位	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
男	病名	高コレステロール血症	肥満	高中性脂肪血症	肝機能検査異常	高血圧	高尿酸血症	糖代謝異常	顕微鏡的血尿	聴力異常	尿中白血球増
4,246名	発見率(%)	44.9	43.9	30.2	28.9	22.9	12.4	12.2	10.1	10.0	7.5
女	病名	高コレステロール血症	顕微鏡的血尿	肥満	高血圧	高中性脂肪血症	糖代謝異常	聴力異常	尿中白血球増	肝機能検査異常	貧血
1,789名	発見率(%)	48.7	23.1	17.0	13.3	8.3	5.7	5.6	5.0	4.7	4.6

(「新老人ドック」受診者15名分含まず)

表13 総合健診で発見された消化器疾患

(ドック：男4,246名，女1,789名)

	食道		胃		十二指腸	
	男	女	男	女	男	女
悪性腫瘍	0	0	1	0	0	0
悪性腫瘍の疑い	0	0	1	0	0	0
潰瘍	0	0	8	1	2	1
潰瘍の疑い	0	0	7	0	8	1
ポリープ	19	15	326	314	7	2
ポリープの疑い	13	2	86	40	11	1
粘膜下腫瘍	2	1	15	17	2	1
粘膜下腫瘍の疑い	0	0	13	8	0	0
胃炎，びらん	0	0	356	133	7	0
潰瘍癒痕	0	0	21	3	90	7
合計	34	18	834	516	127	13

(「新老人ドック」受診者15名分含まず)

総合健診の異常発見率 (表12)

総合健診の総合判定の結果から異常発見率の高い病態順に列挙すると、男では 高コレステロール血症，肥満，高中性脂肪血症，肝機能検査異常，高血圧，高尿酸血症，糖代謝異常，顕微鏡的血尿，聴力異常，尿中白血球増，尿蛋白陽性，肺機能検査異常，便潜血陽性，貧血の順であった。

女では，高コレステロール，顕微鏡的血尿，肥満，高血圧，高中性脂肪血症，糖代謝異常，聴力異常，尿中白血球増，肝機能検査異常，貧血，便潜血陽性，肺機能検査異常，尿蛋白陽性，高尿酸血症の順であった。

また，総合健診および集団健診で発見された消化器疾患は表13の通りである。

表14 内視鏡検査所見内訳

疾患名	例数
食道がん	3
胃がん	5
胃潰瘍	22
十二指腸潰瘍	9
ポリープ	137
粘膜下腫瘍	38
食道静脈瘤	6
胃・十二指腸潰瘍癒痕	108
食道炎	46
胃炎・びらん	371
十二指腸炎	10
その他	7
正常・正常範囲	26

表15 上部消化管病理組織診断結果

例数	241	26	2	1	6

表16 腹部超音波検査結果 (総合健診時)

疾患名	男	女
胆嚢ポリープ	717	167
胆嚢ポリープ(疑)	4	2
胆石	219	73
胆石(疑)	7	3
肝嚢胞	546	309
脂肪肝	1,161	146
腎嚢胞	732	172
悪性腫瘍	0	1
合計	3,386	873

表17 集団の健康管理（下記について継続的な健康管理を行っている）

	団体名	実施人数（人）	内容	担当医師名
1	モーターボート選手，実務者関係	657	登録更新検査 実務者入学時健診	朝比奈 他
2	一般事業所	10,183	職員定期健診（二次検査含む） 雇入れ時健診 家族健診	朝比奈，落合 他
3	出張健診	817	2事業所	矢澤 他

5 集団の健康管理

上部消化管内視鏡検査（表14・15）

総合健診や一般健診からの精密検査，一般外来での経過観察，ヘリコバクター・ピロリ除菌後などから行われた上部消化管内視鏡検査は527例（うち病理組織検査276例）であった。また，一部健保機関は健診時ペプシノーゲン検査が行われ，その結果で次年度には健診時に内視鏡検査が施行されるようになっている。

内視鏡検査，組織診断結果は表14，表15の通りである。このうち，9例に組織診断～，1例に内視鏡のみで悪性疑いが呈され，ただちに内視鏡担当医または主治医によりフォローアッププランが立てられ，うち8例が専門医医療機関への紹介となった。

また，粘膜下腫瘍などについては継続的にフォローされている。

胃・十二指腸潰瘍，潰瘍癒痕においては，ヘリコバクターピロリ菌の有無の判定（ギムザ染色判定）を116例に実施，うち62例が陽性であった。さらに除菌治療・効果判定のため尿素呼気テストの検査78例が行われた。

総合健診で発見された悪性腫瘍は，胃がん4例，食道がん3例，直腸がん1例，大腸がん1例，甲状腺がん1例，乳がん2例，肺がん2例であった（これらはいずれも紹介先医療機関からの返答書で確認されたケースである）。

腹部超音波検査結果は，表16のごとくである。

総合健診（ドック）以外の集団検診で，継続的に健康管理を行っている団体は表17のごとくである。

6 健康担当者セミナー

日時 2007年11月28日(水)

会場 笹川記念会館4階 会議室

参加者 56団体・67名

内容 契約を結んでいる団体の担当者を招待して予防医療に関するセミナーを行った。

講演

- 1) 不健康感をどうして克服するか
日野原重明（財団理事長）
- 2) 当センターにおける保健指導の実践例
朝比奈崇介（ライフ・プランニング・クリニック所長）
- 3) ヘルス・リテラシー（健康知力）が健康増進の重要なカギ
徳田 安春（聖ルカ・ライフサイエンス研究所・臨床実践研究推進センター）

健康知力（ヘルス・リテラシー）とは，毎日の生活を健全に送るために必要な能力で，人々の健康増進のために必要な健康情報を探し出す能力やその情報の正しさについて判断できる能力である。しかし例えば米国では，約9,000万人の人々が健康情報を理解することは難しいと感じている。

人々の健康知力レベルは，人々の健康に加え，医療システムのありかたにも影響を及ぼす。例えば高校を卒業している人でも医療システムを十分に活用できていない人々が実際にいる。健康知力不足の患者は，健康知力の高い患者より「入院する」リスクが高い。

人々の健康知力はどのくらいあるのだろうか。2005年，英国は成人2,000名に健康知力について調査した。それによると5人中1人は健康のための簡単な情報の理解に必要な基礎知識に問題があることがわかった。他にも貧困層の人々は健康問題のための情報やアドバイスを探すことは少なかった。例えば，富裕層の45%の人々はかかりつけ医に尋ねるが，社会経済的に低い層の人々は35%であった。裕福層の39%はインターネットで健康に関する情報を探していたが，それと比較して貧困層は16%のみであった。

健康知力不足の結果として，例えば救急室をよく気軽に利用する，病院によく入院する，薬の服用について指

示に従わない、予防医学を実施しない、そのため高額医療費を負うなどが認められ、健康知力は人々の健康の最重要課題となっている。

先進国では健康知力を高めるために以下のようなことをしている。

カナダ：国家全体の健康知力の調査は1994年に初めて行われた。その後国家や州レベルで健康知力を高める活動が公的にウェブサイトに掲載され始めた（ヘルス・カナダ 2003）。

米国：連邦医学研究所は健康知力について画期的となる研究を「健康知力：混乱の終わり」と題して2003年に発行し、健康知力の経済的評価も行った（連邦医学研究所 2003）。

英国：教育省と健康省が共同で、健康知力を高めるための環境の整備について調べることに着手した。2006年、国民健康知力共同研究プロジェクトを設立し、地域共同体の政策を国民政策へと発展させた。

まとめると、まだヘルス・リテラシーの概念は端緒についたばかりである。ヘルス・リテラシーのレベルは教育レベルに比例する部分が多いが、それだけではない。こういう問題の存在、そしてこれらを単に無教養と片づけずに対策を考えないと、医療資源の分配や医療費に余分なノスを生じさせることを理解しておかなければならない。

7 クリニックにおける看護の役割

当クリニックでは、これまで予防的・教育的医療の見地から、総合健診（人間ドック）、生活習慣病健診、内科、特殊外来を含む外来診療において疾病予防のための教育や成人の慢性疾患の継続管理を推進してきた。一般に外来受診者の特徴として、受診者自身の症状の観察、服薬、療養生活や食事療法など、治療に関する行動やその受診に至る行動決定までも、受診者自身に委ねられていることが挙げられる。これら受診者の持つ健康上の問題は身体的、社会的、および精神的なものまで多数あるが、高血圧、心臓病、糖尿病、肝臓病、がんなどは、その人の生活習慣や行動様式のあり方が発病の誘因とされている。

このような受診者には受診者自身の治療への参加、動機づけと生活習慣を含む行動変容が治療を成功させる鍵となる。したがって、これらの疾病の予防や治療においては、薬の投与のみならず、病気の誘因となる好ましくない生活習慣や行動様式などの改善、変容が重要となる。

受診者が自分の健康上の問題に気づき、正しい知識や技術をもってセルフケアを有効に行えるよう援助することが、ケアする上で看護師の重要な役割となる。そのためには、看護師は受診者の持つ問題を全人的、包括的にとらえる必要がある。また、受診者自身が自分の問題に気づき健康を回復していく過程で、疾病を受け入れ、さらに、それを理解し、生活習慣の変容を効果的に行えるように協力し、協調の関係を保ちながら看護の立場で判断し、受診者のケアに参加していく必要がある。一方、医師とともに、看護師、その他の医療従事者も受診者のケアに関与する。その際、看護師は常に全体的な立場に立って、状況を理解し、全体を調整する医療チームの中でのコーディネーターとしての役割も求められている。その上で、生活習慣の変容を長期的にわたって維持させることが必要である。

このような観点から、当クリニックではこれまでにいくつもの試みを行い、外来医療を効果的なものにしてきた。

1) 看護師によるインタビュー

初診で、外来を受診すると最初に看護師がインタビューを行い、つづいて医師が診察を行う。受診者との最初の接触であるインタビューを看護師が行う目的は、まず人間関係を作ることである。受診者自身の病状そのものに対する不安、医師も含めた医療スタッフ、また医療施設に対する不安や緊張を看護師によるインタビューによって軽減するようにしている。受診者の問題を全体的に理解するために訴えを聞くところから始まり、健康問題に影響する生活像を明確にする。またその問題に対して受診者がどのような関わり方をしているのか、どのような問題解決を望んでいるのか、あるいはクリニックに対してどのような期待を持っているのかなどを聞く。看護師と話をすることにより、受診者自身、自分の問題に気づくこともある。

さらに、インタビューを通して受診者自身が病気を自己管理していく能力などについて確認する。主訴、現病歴に関しては、病気の経過だけではなく、クリニックを受診するまでの受診行動、既往歴がある場合その時の治療に対するコンプライアンスはどうであったか、などについても確認する。

初診時、看護師が包括的なインタビューを行うことは、受診者の問題を全体的に把握し、その後のケアプランを立てる上でも有用である。またその後の経過の中で、必

要時、インタビューを行い、医師へフィードバックしていくことも治療を効果的に継続する上で重要となる。これらは、受診者と看護師とのコミュニケーションを築く上で有効であり、受診者にとって満足度の高い診療となる。

また、ドックや生活習慣病健診においても、現在の症状や治療などを記入した問診表を持参してもらい、それをもとに限られた時間を有効に使い、問題点を把握するために問診を行っている。看護師が総合健診（人間ドック）を受ける受診者の問診をすることで、生活習慣、および検査データに出ない症状や心理、社会的な問題を把握することが可能となり、問診情報と検査データとリンクさせることで包括的に健康評価ができる。さらには個別性を持った結果の提供が可能となる。

総合健診の検査結果は、当日に聞くことができ、緊急な問題点への迅速な対応、食習慣の改善のための栄養士の専門的指導、問題点に応じた専門医受診、さらなる精密検査、医療機関への紹介を行っている。また、再検査および生活習慣変容後のフォローアップ検査も継続的に実施している。

2004年5月に「新老人ドック」が導入されたが、それに先立って「新老人の会」の会員のうち約300名のヘルス・リサーチ・ボランティアに対して、生活全般・病罹患の状況、服薬状況、心の問題、認知機能の問題など、加齢に伴って生じる心身の形態や機能の変化を客観的に評価するための総合問診と認知機能検査に関わった。この問診が健康評価における最も重要な部分となる。この問診で得られる情報から多くの問題点が抽出され、最終的に、修復や補強が必要な問題や、健康の維持・増進ができる部分が明らかになり、それに対するプランが立てられる。今後も引き続きこの経験を生かし、「新老人ドック」受診者が質の高い生活設計を実現していけるようサポートすることも看護師に必要な役割の一つとなる。

2) 電話相談

当クリニックでは開設以来、医療に電話を取り入れている。

初診時は、いつ頃からどのような症状があるのか、当クリニックの医療に対する期待など、受診する理由や目的を聞きながら緊急性の有無、当クリニックで対応することの適否も含めて、看護師が電話で対応し判断している。

また、慢性疾患で継続管理中の受診者の電話は、1)

前回受診時の検査結果を聞く、また、薬物療法開始後の状況（副作用など）、2)受診者が自己観察して得た経過の報告と相談、3)新たに問題が発生した時の相談などに分けられるが、最近は患者の高齢化もあり、3)の相談が多くなっている。一本の電話で相手の情報を受けて療養指導することができ、医療のコミュニケーションを高めるためにも非常に有用である。

3) 自己観察（セルフチェック）に基づく受診者の参加

慢性疾患継続管理の過程で、受診者が病気をコントロールするためのデータは自分でとり、記録することを勧めている。例えば、高血圧で薬物療法中に血圧の自己測定を行い、それを記録する。それらのデータから服薬の効果を知り、副作用の有無などの情報を得ることができる。このような受診者の記録は、ほかに体重管理表、食事記録表、狭心症などの症状記録表や排尿記録表などがあり、受診者が記録することにより気づきを得て、自己コントロールしていく効果がある。

慢性疾患継続受診者への長期処方が可能となり、受診回数が少なくなっている状況下において、受診の機会に看護師は受診者と適切な関わりを持ち、症状の変化などのサインを収集し、医師へフィードバックすることが必要とされる。

4) 特定保健指導

2008年4月1日より高齢者の医療の確保に関する法律により、40歳から74歳までの日本国民全員が対象の特定健診及び特定保健指導が開始される。その実施に当たっては決められた問診の実施、メタボリック判定と保健指導対象者の選別、ポイントが細かく決められた保健指導の実施、健診及び保健指導の結果を決められた電子データにより提出することが求められる。当センターが開設以来推進してきた予防的・教育的医療が法律として制定されたともいえる。今まで培った知識や経験を特定保健指導に生かし、効果的な指導を行っていく必要がある。

2007年度においては、各部署と協力して検討委員会を設置し準備を進めた。

8 システム開発

1) 計測機器のオンライン化

計測機器にノートパソコンをつけ無線LANにてデータの転送ができるようにした。これにより計測機器など

の場所が変更されても自由に対応できるようになった。
2007年4月16日よりテストを開始し、4月23日より本番へ移行した。

- 身長, 体重計 2台
- 視力計 2台
- 聴力計 2台
- 血圧計 1台
- 肺機能 1台
- 眼圧 1台

以上の9台に設置しオンラインできるようにした。

2) 新規判定ロジックの作成

新規にそれぞれの項目の判定ロジックを作成し文章化できるようにし、2007年9月3日より移行した。

主な判定ロジック変更点

F判定は、保健指導を受ける必要のある場合をF1、医師の診察を受ける必要のある場合をF2と分けて記載する。

食事指導は「栄養士のコメント」として別個に記載する。

肥満の評価はBMIをもとに判定し、低い場合も“やせ傾向”として記載する。

高血圧の判定に“正常範囲内で高めの血圧”に相当する判定区分を作る。

LDL値については、日本動脈硬化学会の基準に従って、各個人の目標値との比較によって判定する。

メタボリック・シンドロームの判定を加え、その予備群や境界型の判定区分を作る。

高尿酸血症のコメントを独立した内容で記載する。

その他、総蛋白濃度、RF、CRPなどの自動判定を作る。

3) 結果表の変更

健診結果表に乳房X線及び乳房超音波などの所見を表示するようプログラムを変更し、9月の健診より実行した。

4) 政府管掌健康保険組合へのフロッピー作成

政府管掌健康保険組合へのデータをフロッピー化するためのプログラムを作成した。

5) 特定健診について

2008年4月より始まる特定健診及び特定健診保健指導

表18 年間栄養相談件数

	2005年	2006年	2007年
合計	828	786	856

表19 病態別栄養指導状況 (延べ人数)

	減量	高脂血症	糖代謝異常	肝機能異常	高尿酸血症	高血圧	その他
人数	476	447	360	194	127	116	21
%	27	26	21	11	7	7	1

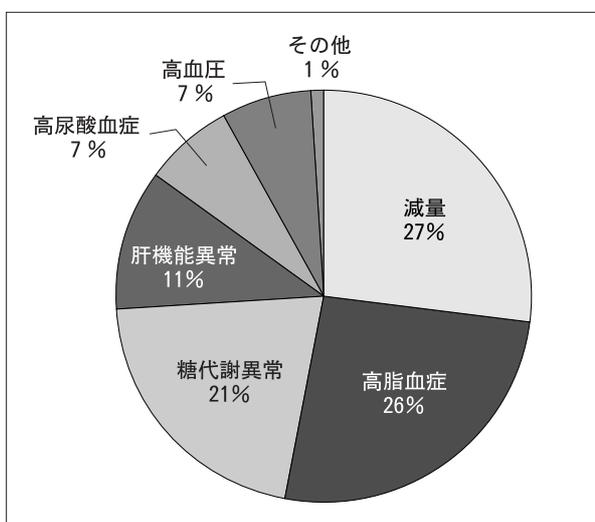


図3 病態別栄養指導の割合

について内部委員会をつくり、2007年10月より検討を開始した。

9 食事栄養相談

1) 相談人数と相談内容 (表18)

2007年度食事栄養相談人数は延べ856名であった。総合健診(人間ドック)の結果説明で医師より食事相談を受けるよう指示があった受診者には、食事指導依頼票が出され当日、または後日栄養相談を実施している。一般健診においても、生活習慣病の問題点があると栄養相談の案内がされ、最初の面接で改善目標を立て2回目の面接と採血で改善を確認している。

2) 病態別栄養相談の割合 (表19) (図3)

減量27%、高脂血症26%、糖代謝異常21%、肝機能異常11%、高尿酸血症7%、高血圧7%、

その他 1% (腎疾患, 貧血, 食生活確認) であった。

昨年と比較して減量のパーセントに変わりはないが, 30代が若干増えてきている。その他の食生活確認は特に疾患はないが, 食習慣の確認に訪れる方もいた。

3) 年代別相談

20歳代 1%, 30歳代 20%, 40歳代 29%, 50歳代 31%, 60歳代 14%, 70歳代 4%, 80歳代 1% であった。

4) 特定検診・保健指導

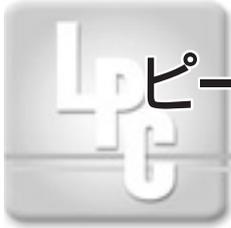
2008年 4月 からメタボリック・シンドローム (内臓脂肪症候群) 予防を目的として特定検診・保健指導が義務化される。長寿社会といわれながら生活習慣病は増え続けている中で予防医学を早くから唱えている当クリニックではますますその役割が重要になってきている。

10 禁煙外来

従来, 当クリニックで自由診療として行われていた禁煙教室・禁煙指導は, 2006年 4月 よりニコチン依存症管理料として禁煙治療が保険適用になり, クリニックでも新しく呼気一酸化炭素濃度測定器を揃え, 12月 より開始された。

各担当医師と専門ナースが中心となって, 薬物療法を基本に面接指導が行われている。3カ月中 5回の受診を限度として保険が適用される。2007年 4月以降 2008年 3月までに初回指導を受けられたのは 24名 (男性 21名, 女性 3名) (うち自費 3名) であった。ドック・健診・一般診療受診中に勧められた (15名), 禁煙外来を目的として受診した (9名) ケースなどがある。

報告 / 朝比奈崇介 (ライフ・プランニング・クリニック 所長)



ピースハウス病院 (ホスピス)

所在地：神奈川県足柄上郡中井町井ノ口1000 - 1

ピースハウス病院は、2008年秋に開設15周年を迎える独立型ホスピスで、主として終末期のがん患者に症状緩和、QOL向上・維持に役立つケアを提供している。神奈川県西部の丘陵地帯の一角、西に富士、北に丹沢を望む高台にあり、庭には四季の花々が咲き、樹木が木陰を提供する。約6,000坪の敷地に、大きな家を思わせる約1,000坪の建物がある。「やすらぎの家」として、全人的ホスピスケアの提供、家族の支援、チームワーク、およびモデル施設としての役割を果たすことを目指している。併設のホスピス教育研究所でホスピスケアについての啓発・普及や研究、教育などを行っている。

ピースハウスのような専門施設を利用できる患者は限られているので、一般病棟や療養施設、福祉施設などにおいても、また在宅でも良質の緩和ケアを提供できるようにしていく必要がある。個々の事業体における努力も大切であるが、多種の関連事業体が有機的に連携して、必要としている者に最適の緩和ケアを最適の場所で最適の時期に提供できるような仕組み、地域緩和ケアネットワークを構築することが求められている。

施設概要

開設日	1993年9月1日
管理者	西立野研二
入院基本料	緩和ケア病棟入院料
看護配置	7 : 1
届出病床数	22床
敷地面積 (内借地)	5,645坪 (1,413坪)
建物面積 (本館) (新館)	1,037坪 (939坪) (98坪)

表1 入退院状況

1) 入院患者数	237名延べ239名
2) 性別 男性	137名
女性	100名
計	237名
3) 平均年齢	71.0歳
4) 平均在院日数	27.4日
5) 退院	241名
死亡	233名
その他	8名

表2 原発疾患 (複数回答) (名)

肺がん	45	子宮がん	7	甲状腺	1
胃がん	27	直腸がん	6	副鼻腔	1
結腸がん	17	咽頭がん	6	小腸	1
膵がん	13	腎がん	5	口唇	1
肝がん	11	前立腺がん	5	肛門	1
食道がん	10	膀胱がん	5	喉頭	1
乳がん	8	口腔	4	原発不明	3
胆道がん	8	胆管がん	3	他	5
卵巣がん	8	脳腫瘍	2		

表3 患者住所分布 名 (%)

神奈川県	214 (91%)	川崎市	6	[湘南西部]	
東京都	18	横浜市	21	平塚市	37
福島県	1	鎌倉市	2	伊勢原市	12
栃木県	1	逗子市	1	秦野市	23
埼玉県	1	横須賀市	2	中郡	20
静岡県	1	大和市	4	計92 (39%)	
長野県	1	綾瀬市	1	[県西部]	
		座間市	2	小田原市	25
		海老名市	3	南足柄市	1
		厚木市	10	足柄上郡	10
		藤沢市	6	足柄下郡	6
		茅ヶ崎市	6	計42 (18%)	
		相模原市	12		
		愛甲郡	4		

I 診療

2007年度の入院患者は239名(前年比24%増)、延べ6,579名(3%増)であった。性別では、やや男性が多く、平均年齢は71歳と上昇した。平均在院日数は約27日で前年よりさらに短くなった。ほぼ70%が4週間以内の入院であり、その中でも1週間以内が最も多い。原発疾患については、最近の例に漏れず肺がんが多かった。

表4 紹介元病院 (件)

東海大学伊勢原	47	神奈川県立がんセンター	2
小田原市立病院	15	東京女子医大	2
平塚共済病院	15	藤沢湘南台病院	2
東海大学大磯	12	済生会平塚病院	2
平塚市民病院	10	西嶋医院	2
北里大学東病院	10	丹羽病院	2
国立がんセンター	8	横浜新緑総合病院	2
秦野赤十字病院	7	いのうえクリニック	2
伊勢原協同病院	6	聖隷横浜病院	2
神奈川病院	5	小澤病院	2
東名厚木病院	4	横浜市立大学病院	2
藤沢市民病院	4	聖マリアンナ西部病院	2
聖マリアンナ医大	3	横浜労災病院	2
海老名総合病院	3	厚木市立病院	2
山近記念病院	3		

表5 入院時の主な症状

		(%)
痛み	67.0	5.0
意識障害	25.0	5.0
呼吸困難	20.0	4.0
腹部不快	10.0	3.0
悪心・嘔吐	8.0	
		5.0
		5.0
		4.0
		3.0

患者住所は91%が神奈川県、57%が湘南西部・県西部であった。紹介元の医療機関については、東海大学医学部付属病院及び大磯病院からのものが合わせて59件(24%)であった。

2 相談・外来・デイケア・往診

ピースハウス病院は、国および県のがん対策推進の地域割である2次医療圏において、神奈川県西部地域に属している。しかし、当院が隣接する湘南西部地域との境界線上に位置していること、この両地域には当院以外に緩和ケア病棟がないこと、両医療圏のがん診療連携拠点病院である小田原市立病院、東海大学医学部付属病院から直接もしくはそれらの病院から市中の病院での療養や在宅療養後にピースハウスを紹介されることが圧倒的に多いことから、現在取り組んでいる地域緩和ケアネットワーク構築のプロジェクトでは、この2つの2次医療圏におけるネットワーク構築のあり方を検討している。その過程で、当院におけるホスピス相談の窓口をよりわかりやすくするために、2007年度より「地域連携室」という名称にして活動した。

地域連携室スタッフは、2006年度と同様で、MSW、看護主任が基本メンバーで必要に応じて看護部長がサポー

表7 外来・デイケア・往診

・外来：22名 (デイケア：5名)
・入院 外来 (デイケア)：4名
・入院 在宅ケア 5名
・在宅ケア：25名 (看取り：8名)

トに入る体制として、年末年始以外毎日相談を受ける体制を確保した。

2007年度の相談件数は表6の通りであり、また外来・デイケア・往診件数は表7の通りである。

2007年度の相談の傾向は、昨年度に引き続き病状の進行が相当深刻になってきてからの相談、在宅療養中で適切な支援を受けないまま困り果てて相談に来るケース、単身者で社会的な課題の調整支援を要するケースが考えられた。この背景には、在院日数短縮化によって病床利用効率を上げる急性期病院の事情や、高齢化や社会経済状況を反映していると思われる。ちなみに、入院患者の22%が単身生活者であり、前者と重なりは認めないが、同じく22%が経済的に困難もしくはやや困難であり、個室利用等に制限があった方々である。

外来・デイケア・往診数は、医師の診療体制が整い、表7の通り2006年度よりも増加した。特に在宅療養を支援する往診は2005年度の往診数に近づいた。デイケアは5例と少数であり、うち3例はADLは自立しているがピースハウスとの繋がりやスタッフとの交流を通して療養生活を整える目的で定期的に来院した方がであり、2例は家族の休息、入浴や食事介助を提供する滞在介護を要する例であった。外来再診として診療しているため、デイケア活用のための積極的なアピールができていないこ

表6 相談件数一覧 (2005年度～)

2005年度	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	計
初回電話相談	100	92	87	50	47	55	71	63	49	66	73	56	809
初回来院相談	35	19	30	23	22	22	31	26	29	22	29	26	314
%	35	21	34	46	47	40	44	41	59	33	40	46	39

2006年度	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	計
初回電話相談	54	60	54	61	61	49	47	63	52	53	67	57	678
初回来院相談	26	18	23	23	31	23	18	21	29	21	24	30	287
%	48	30	43	38	51	47	38	33	56	40	36	53	42

2007年度	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	計
初回電話相談	84	72	52	67	90	89	69	75	51	69	71	87	876
初回来院相談	34	32	27	25	31	43	30	31	23	30	35	25	366
%	41	44	52	37	34	48	44	41	45	44	49	29	42

とが、利用者が少数にとどまっている原因と考えている。

ホスピス相談を通して見えてくる課題は、当院においても、あるいはまた一般のがん診療を行う医療機関にしても、外来や在宅における緩和ケアの提供体制が患者のQOL維持向上に貢献する内容となっているのかを評価する仕組みの構築であると思われる。

3 入院ケア

入院ケアは、平均在院日数が27日ということからも、また、入退院数からも日常の入院ケアは多忙を極めた。在院期間が短いと短期間に患者家族のニーズを的確に把握し、苦痛症状を緩和し、できるだけ安心して快適な療養状況になるよう支援するには、入院当日を含めた最初の数日間のケアがたいへんに重要であることを実感する。そのような状況にあって、入院を待っている方々に早急に入院ベッドを提供するために、一日に複数の入院を受け入れることも積極的に行ってきた。

ケアにおいては、症状マネジメント、看護ケア、心理社会的な側面のケア、スピリチュアルケアにおいて学習の機会を持ちながら、プライマリナースを中心に多職種連携協働によって、患者と家族に添ったケアを心がけた。

カンファレンスでは、デスカンファレンスの持ち方を変更し、毎週火曜日に、それまでの1週間に死亡された方々を心に留め、ケアの振り返りを全ケースについて行うこととして実行している。

4 遺族ケア

2007年度に入院した方のうち、死亡退院は233名であった。今年度は、5月13日と10月8日に「しのぶ会」を開催した。開催状況は表9の通りである。

5 ボランティア活動

2007年度は、3月に完成した新棟デイケアセンター、訪問看護ステーション中井を基盤に、病院から地域へとボランティアにも新しい活動の場が求められるものと思われた。ピースハウスでは2008年秋の開院15周年に向けて2日間にわたる施設見学会やホスピス講演会などが開催され、ボランティアの全面的な協力のもとに啓蒙活動が展開された。また、2005年度にスタートした新生ボランティアの会は3年目を迎え、2期目を迎えた幹事会はその活動を充実させるために奔走した1年であった。

登録ボランティアは12月1日には過去最高の114名に達したが休会者も16名と多く、有職者でも活動が継続できるようによりフレキシブルな活動を受け入れる体制を整えたが、まだ十分に機能していない。

2008年4月1日現在のボランティア登録者数は99名(うち男性16名)で、その実態は以下の通りである。

平均年齢は58.9歳(最高齢78歳,最低齢34歳)、年齢構成は70代15名,60代37名,50代28名,40代16名,30代3名となっている。

県内在住者が85名(86%)を占め、うち64名(65%)が秦野,平塚,大磯,小田原など15km以内に住んでいる。

表8 月別入退院数

月	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	計
入院	17	22	16	13	26	27	21	15	20	27	13	18	239
退院 (在宅)	19 (1)	21 (0)	14 (1)	19 (0)	22 (2)	26 (1)	21 (0)	14 (0)	19 (2)	30 (0)	17 (0)	19 (1)	242 (8)
入院 日数	544	551	495	495	554	531	611	595	588	561	545	503	6,579

表9 しなの会概況

	2004年		2005年		2006年		2007年	
	第17回	第18回	第19回	第20回	第21回	第22回	第23回	第24回
対象患者数	61	67	86	59	91	94	105	95
出席家族数	24	26	43	24	22	32	33	26
出席人数	50	69	96	59	39	79	75	55
参加率	39.3	38.8	50	40.7	24.2	34.4	31.4	27.4

活動期間をみると6年以上のベテランが37名(37%)で活動の中核をなしている。

この1年を振り返ると、入会者25名、退会者17名、休会者は7名となっている。

2007年度のピースハウスボランティアの総活動時間は2万6,734時間、活動参加回数は3,878回で、活動時間では前年度比+2,669時間で9.6%増、活動参加回数では+314回で8.8%増となっている。

以下に2007年度における主な活動を報告する。

1) ボランティアの会の活動

総会では「ボランティアルームの整備、アドバンスト講座への積極的な取り組み、機関紙『花水木』の3回発行、インシデント・アクシデントレポートの導入、総合受付の時間延長、活動の優先順位決定、季節の行事の担当曜日固定化」などを成果であったと総括している。

2007年度は総会1回、幹事会7回、役員会5回を開催して会の運営に当たった。各曜日ごとに意見を出し合い、幹事会・役員会で決定するというリーダー制が定着した。

2) ボランティア活動資金収支とフレンズショップ会計

活動資金の主な収入は前年度繰越126万円、募金箱65万円、府中はなみずき寄付10万円、バザー8万円、支出はティータイム食材費52万円、美容費7万円、LPC寄付8万円、活動費5万円などで、次年度に145万円を繰り越している。フレンズショップ会計は前年度繰越68万円、売り上げ87万円、支出は仕入れ56万円で、次年度繰

越98万円となっている。

3) 特技ボランティアの状況

毎週日曜日の午後行われている4名チームのアロマセラピー、金曜のナイトケアで実施されるマッサージは好評である。また、火曜午後のアニマルセラピーも犬好きの患者に喜ばれている。その他に、園芸や庭園の環境整備に関わるボランティア、一級建築士による営繕活動、設備関係の保守管理やパソコンなどIT関係のメンテナンスに関わるボランティアなどその活動は多彩である。ただ、ナイトケアについては退会者や休会者が続出し、現在、金曜と土曜のみの活動となっている。

4) 総合受付と見学案内

ボランティアによる総合受付は2006年度の10:30~12:30、13:30~16:00から、フルタイム10:30~17:00となった。従来から行われてきた入院相談者の見学案内は好評続行中で占床率の向上に著しく寄与している。

5) 機関紙『花水木』の発行

『花水木』は第43号~第45号が刊行された。写真、投稿などを幅広く集め4ページ以上の読み物として内容も充実させた。

6) 見学・交流の実施

2007年度の見学は11月29日(休)のねむの木学園見学ツアー(参加者45名)1回のみにも留まったが、日本病院ボランティ

表10 アドバンスト講座

開催日	テ マ ・ 講 師	参加者数
4月17日(火)	・ボランティアの会総会 ・講演「ボランティア精神と人と人とのかわり」 六甲病院緩和ケア病棟チャプレン・カウンセラー 沼野 直美	36名
7月11日(水)	・「共に学ぼう看護の技術」-不安なくケアに携わるために アドバイザー 看護部 瀬戸ひとみ・米山由希子 感染予防院内研修会 米山由希子	45名
9月20日(木)	・ホスピスケア「園芸を通して患者さん、ご家族とのかかわりを考える」 近藤 孫範・岡田 美幸(V) ・「アートプログラムを体験しよう」 枝松茂杜子(V) ・「私・ホスピス・出会い」	39名
12月7日(金)	・「共に学ぼう看護の技術」-不安なくケアに携わるために アドバイザー 看護部 瀬戸ひとみ・米山由希子 感染予防院内研修会 米山由希子	34名
3月8日(土)	・ピースハウス交流会 ピースハウス視聴覚室 *昼食会 ・「引き継がれるホスピスの心」 鈴木 千介(顧問)	ボランティア:42名 職員:28名

ホスピスボランティアの活躍



写真上段左：納涼祭，同右：ティーパーティーの準備

写真下段左：外部ゲストによるコンサート，同中：アドバンス講座に参加，同右：クリスマスパーティー



ア協会の総会や関東地区病院ボランティアの会には積極的に参加し、発表や交歓を行った。

7) アドバンス講座への参加

アドバンス講座は5回開催された。テーマと参加人員は表10の通りである。

8) 高校生、学生の夏期ボランティア体験実習指導

例年のごとく2007年度も7月下旬から8月中旬まで1カ月にわたりボランティア体験実習を受け入れた。今年は、高校生は2校から8名(秦野曾屋高校4名、七里ヶ浜高校4名)、大学生は3校から5名(日本社会事業大学1名、ルーテル学院大学3名、滋賀医科大学1名)の計13名の実習指導が行われた。

七里ヶ浜高校生の体験学習報告書から

(前略) 死は避けられません。だとしたら、私は死としっかりと向き合いたいです。死と向き合うことは自分の人生を見つめることになると思います。そして安らかに最期を迎えられる。こんな医療が現代に必要なのかなと感じました。と同時に、将来私は絶対にホスピスのボランティアを行おうと思います。緑のように、存在で人を癒せるように。そして幹の

太い木のように、しっかりと病院と患者さん、ご家族を支えられるように。3日間の研修を終えて心に決めました。(後略)

9) アートプログラム・ティータイムサービス

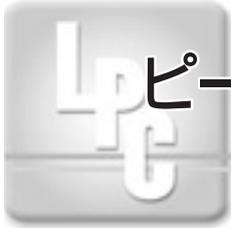
日曜・祝祭日、年末年始、ボランティアアドバンス講座開講の日を除き、毎日行ってきた。アートプログラムの内容は、押し花(月)、絵と書(火)、フラワーアレンジメント(水)、ゆび編み・さをり(木)、歌う会(金)、庭さんぽ(金)、折り紙(土)、いなご会《俳句・川柳》(月1回)。

開催回数は285回(前年度比+24回)、参加者は延べ1,733名(前年度比+91名)で一回平均6.1名(前年度比-0.2名)、そのうち患者・家族の参加者は683名(前年度比0名)、一回平均2.4名(前年度比-0.2名)であった。

ティータイムサービスは毎日午後3時~4時ティーラウンジで行われ、合計284日(前年度-3日)、一日の中で最も楽しいひと時を演出してきた。そのうち5回がボランティアの演奏家を招いてティータイムコンサートという形で実施された。

報告/西立野研二(院長)、二見典子(看護部長)、

志村靖雄(ホスピスボランティアコーディネーター)



ピースハウスホスピス教育研究所

所在地：神奈川県足柄上郡中井町井ノ口1000 - 1

ホスピス教育研究所の主な活動は、1) ホスピス・緩和ケアに関する一般への啓発・普及活動、2) ケアに従事する専門職・ボランティアを対象とする講座・セミナー・ワークショップの開催、3) ケアの実際を臨床の場で体験する研修の受け入れ、4) 各種研究会の開催、5) 研究所会員への文献案内サービス、6) 機関紙の発行、7) 国内外のホスピス緩和ケア関係者との情報交換・ネットワーク作りなどである。特に、2007年度は地域における緩和ケアネットワーク構築に向けた活動の基盤作りを進めた。

また、「日本ホスピス緩和ケア協会」事務局として、年次大会・理事会・総会・専門委員会の開催、全国の緩和ケアの現状調査、セミナーや講演会の開催、ニュースレターの発行など、並行して行っている。

1 活動の全体像

1) ホスピス緩和ケアの啓発・普及

ホスピス緩和ケアについての正しい理解を広め、ケアを有効に活用していただくことを目的に一般の方向けの教育プログラムを企画し多くの参加を得た。特に地域で活動する民生児童委員などへの公開セミナーや地域住民へ施設を公開するオープンハウス、また、病院内ではなく、市の公共施設を利用した講演会など、地域の方々にホスピスを身近に感じていただく機会を提供し、病院・在宅・ホスピスの連携についても理解を深めていただけたものとする。

2) 講座・セミナーの開催

ホスピス緩和ケアの最近の動向を受けて、緩和ケアのあり方、家族のケア、倫理的課題などをテーマにセミナーを開催し、多数の参加を得た。

ホスピス緩和ケア講座では、ピースハウス病院の医師と看護師の協働による症状マネジメントの講義、ホスピスワークショップでは、外部から招聘した講師の講義とともに院内スタッフによる事例検討など、理論だけでなく、ホスピスにおけるケアの実際を紹介することができ、参加者からも高い評価を得た。院内スタッフの教育という視点からも、スタッフによる講座への協力を依頼しているが、資料の準備や講義の進め方など質的向上がみら

れ、教育的意義が高いと考える。

3) ホスピス国際ワークショップの開催

開設以来年一回、海外から講師を招いての本ワークショップは、今年度、第15回目ということで、「ホスピス緩和ケア - 東洋と西洋の対話 -」をメインテーマとした。講師の一人、ショー医師は、アジア太平洋ホスピス緩和ケアネットワークの事務局長として、アジア各国の緩和ケアをリードし、世界の事情にも精通した方で、一方、英国のチューデイン博士は看護倫理の専門家である。スピリチュアリティと倫理に焦点をあてて、2名の講師、そして参加者との意見交換は、まさに東洋と西洋の対話となり、社会文化的背景を考慮したケアの必要性とともに、国や地域を越えて共通するケアの基本を確認することができた。



講師のショー先生



講師のチューデイン先生

4) 研究会の開催

事例検討会、ホスピスケア研究会、Study Day など、各種研究会は、日常の業務を客観的に見直し、考える場となっている。医師・看護師・栄養士・チャプレン・音楽療法士・ボランティアコーディネーター・ハウスキーパーなど、それぞれの視点からの発表が行われ、意見交換をすることで、他職種への理解を深め、互いに学びあう機会となった。

地域緩和ケア研究会は、ピースハウスホスピスと近隣の医療福祉関係者との協働で開催するもので、今年度は各病院や診療所からの事例報告とともに、テーマに関するコメンテーターも交代で担当していただいた。当研究所の主催で開催している研究会ではあるが、皆で作りに上げていくという意識が生まれてきているように思う。また、研究会での共通認識は、施設間の継続ケアに関するカンファレンスへとつながり、「地域緩和ケアネットワーク」の構築に向けた歩みが進んでいる。

5) 研修の受け入れと派遣

高校生のボランティア体験実習、医学・看護学生の臨床実習、緩和ケアに従事する医師や看護師の研修など幅

広く受け入れ、ホスピス緩和ケアの実際を体験学習できる場を提供することができた。研修生との交流は、院内のスタッフやボランティアにとって、自分たちのケアについて自ら説明をし、逆に、客観的なフィードバックを受けるなど、学習の機会となっている。

一方、院内のスタッフを学会や研究会、他の緩和ケア病棟での研修などに派遣し、新たな学びや気づきを得たスタッフから研修報告を受けることは、ピースハウス全体のケアの質の向上に繋がっていると考えられる。

6) ホスピス緩和ケア関係者との連携

今年度は、9月にフィリピンのマニラにて、アジア太平洋ホスピス緩和ケアネットワークの理事会とカンファレンスが開催され、各国代表者と直接意見交換をすることができた。会議では、今後、地球規模でホスピス緩和ケアの課題に取り組んでいく必要性が確認され、日本としてどのような貢献ができるのかが課題である。

10月6日の「世界ホスピス緩和ケアデー」では、日本ホスピス緩和ケア協会が、(財)日本ホスピス・緩和ケア研究振興財団、NHK 厚生文化事業団、NHK との共催により、ホスピス緩和ケアフォーラムを開催し、また、

表 講座・セミナー

講座名	日時	日数	講師(所属)	参加人数
ホスピス緩和ケア講座	2007年10月～11月	2	西立野研二(ピースハウス病院院長)他7名	延88
ホスピスセミナー がん患者と家族が直面する苦悩への支援	2007年6月	1	梅田恵(オフィス梅田代表 がん看護専門看護師)	91
ホスピスセミナー 愛する人を亡くすとき - 家族・遺族の心理とグリーフケア -	2007年10月	1	坂口幸弘(関西福祉科学大学健康福祉学部准教授)	55
ホスピスセミナー スピリチュアル・ケア - 終末期患者の危機的・実存的問いと援助者のあり方 -	2007年12月	1	賀来周一(キリスト教カウンセリングセンター相談室長)	89
ホスピスワークショップ 終末期における臨床倫理	2008年2月	1	清水哲郎(東京大学大学院人文社会系研究科次世代人文学開発センター上廣死生学講座教授)	83
春期ボランティア講座	2007年5月～7月	8	志村靖雄(ピースハウス病院ボランティアコーディネーター)他7名	21
秋期ボランティア講座	2007年10月～12月	8	志村靖雄(ピースハウス病院ボランティアコーディネーター)他7名	9
ボランティアアドバンス講座	2007年6月～ 2008年3月	5	沼野尚美((六甲病院緩和ケア病棟チャプレン・カウンセラー)他8名	延215
ホスピス公開セミナー (対象:ホスピスに関心を持つ個人など)	2007年4月～ 2008年2月	11	瀬戸ひとみ(ピースハウス病院がん性疼痛看護認定看護師)	延195
ホスピス公開セミナー (対象:民生委員,ボランティア団体など)	2007年7月～ 2007年11月	6	森口恵子(ピースハウス病院ハウスキーパー)他2名	延105

全国各地でホスピス緩和ケアの普及のためにさまざまな催物を開催した。協会の事務局として、全国の関係者と連携するとともに、世界規模の運動に参加、協力することができた。

2 教育研究活動の実際

1) 講座・セミナーの開催 (表)

2) ホスピス講演会の開催

日 時 2007年9月1日

会 場 神奈川県・平塚市民センター

参加者 1,375名 (一般, 医療福祉関係者)

テ ー マ 自分らしく生きる

講演1. がんと共に生きる

がんの痛みは恐くない

田中 曜 (東海大学医学部附属病院緩和ケアチーム)

家で暮らしたい

井上 育夫 (いのうえクリニック院長)

最期まで自分らしく生きる

二見 典子 (ピースハウス病院看護部長)

講演2. 与えられた人生 - いかに生き、老い、病み、死を迎えるか -

日野原重明 (財団法人ライフ・プランニング・センター理事長)

3) オープンハウスの開催

日 時 2007年6月8日

会 場 ピースハウス病院

対 象 緩和ケアに関心のある一般, 医療福祉関係者など

延参加者 327名

内 容 施設案内, 展示パネルなどを通してケアの紹介と地域の方々との交流

4) 第15回ホスピス国際ワークショップの開催

日 時 2008年2月2日~3日

会 場 ホスピス教育研究所

テ ー マ ホスピス緩和ケア 東洋と西洋の対話
- スピリチュアリティと倫理に焦点をあてて -

講 師 Dr. Rosalie Jean Shaw

Executive Director of Asia Pacific

Hospice Palliative Care Network

Consultant, Department of Palliative Medicine, National Cancer Centre Singapore

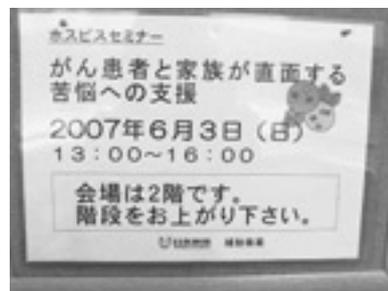
Visiting Consultant, KK Women's and Children Hospital, Singapore

Dr. Verena Tschudin

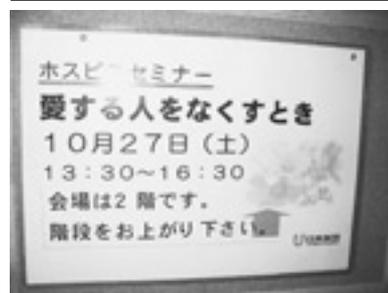
Director of the International Centre for Nursing Ethics, London, England

Part-time Reader in Nursing Ethics, University of Surrey, Guildford, England

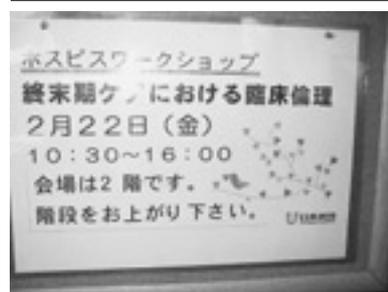
ホスピスセミナー



梅田 恵講師



坂口幸弘講師



清水哲郎講師

スピリチュアル・ケアについて話す
賀来周一講師



講演内容

第1日

- ・ホスピス緩和ケアの現状 - 世界の動向, そしてアジアの国々 -
- ・エンドオブライフケア - 倫理的課題を考える -
- ・生命を脅かす疾患に直面した患者のスピリチュアリティ - 臨床現場で遭遇する課題と対応 -

第2日

- ・喪失と悲嘆へのアプローチ - カウンセリングを通して -
- ・スピリチュアルペインとセデーション - 倫理的視点から考える -
- ・緩和ケアに従事するという事 - 自己への気づきと成長 -

参加者数 112名

5) 研修生の受け入れ

医療職のためのホスピス研修 (計3名)

秋本病院医師 (1), 亀田ファミリークリニック館山医師 (1), 遠藤医院医師 (1)

ホスピスナース養成研修 (計14名)

- . 日本看護協会「緩和ケアナース養成研修」(12名)
川崎市立井田病院 (1), 新潟県立がんセンター新潟病院 (1), 南部郷厚生病院 (1), 館林厚生病院 (1), 戸田中央総合病院 (1), 上都賀総合病院 (1), 諏訪赤十字病院 (1), 岩手県立花巻厚生病院 (1), 特別医療法人栄光会 栄光病院 (1), 協仁会小松病院 (1), 山形県立新庄病院 (1), 名古屋第一赤十字病院 (1)

- . 日本看護協会「認定看護師研修」(2名)
東京通信病院 (1), 立正佼成会付属佼成病院 (1)
神奈川県看護協会ホスピスケア認定看護師教育課程
研修生, 教員 (35名)

医学生のためのホスピス研修

東海大学医学部 (10名)

看護学生のためのホスピス研修

慶應義塾大学看護医療学部 (2名)

ホスピス体験実習 (計4名)

神奈川県立七里ヶ浜高等学校生徒 (3), 神奈川県立七里ヶ浜高等学校教諭 (1)

6) ピースハウス見学者への対応 53件 343名

主な見学団体

愛知国際病院, 金沢大学医学部附属病院, 横浜甞生病院, 救世軍清瀬病院, 鶴巻温泉病院, 福原病院, 羊蹄グリーン病院, あそかピハークリニック, 訪問診療サンクリニック, 鎌倉常磐クリニック, 聖隷クリストファー大学大学院看護学研究科, 慶應義塾大学文学部, 東洋英和女学院, 聖心女子大学, 昭和音楽大学音楽療法コース, 小田原看護専門学校, 湘南学園高校, 中井町井ノ口小学校PTA, ホスピスボランティア日韓交換プログラム, 日本財団, 神奈川県医療社会事業協会, 日本福音ルーテル武蔵野教会, 田園調布ルーテル教会, 日本基督教団蒲田新生教会牧師, ウエルエイジ (高齢者施設), 日蓮宗神奈川第三部社会教化事業協会, 中外製薬がん領域学術推進部, 医療コーディネーション・ジャパン, (株)デスティニー, (株)ティー・エー・シー企画, 博報堂総合研究所, 三井不動産ケアデザイン室他

7) 研究会の開催

事例検討会

期 間 2007年4月~2008年3月 (10回)

延参加者数 191名

主なテーマ

- ・患者の意思の尊重と代理意思決定
- ・摂食嚥下障害の支援を考える
- ・鎮静をとりまく課題 - あらためてなぜ鎮静をするのか -
- ・早く逝くためにピースハウス病院を選んだ患者への関わり
- ・死' についてもう一度考える
- ・子供達の面会を拒む患者とその家族への関わり
 - 青年期に父親を失う兄弟へのケアを体験して -
- ・療法目標, 療養の場の変更が求められるとき
 - 患者・家族の意思決定の過程をいかに支援していくのか -
- ・「...にもかかわらず生きる」ことを支えるケア
 - 骨折後に抑うつ状態となり, 自ら鎮静を希望した事例から考える -

ホスピスケア研究会

期 間 2007年4月~2008年2月 (5回)

延参加者数 49名

主なテーマ

- ・「みる」ということ

- ・生老病死
- ・喪失と悲嘆
- ・俳句と死生観
- ・宗教・音楽・人生

Study Day 症状マネジメントを学ぶ

期 間 2007年5月～2008年3月(5回)

延参加者数 77名

主なテーマ

- ・疼痛マネジメント - オピオイドの使い方 -
- ・せん妄
- ・終末期患者の呼吸困難マネジメントとケア
- ・終末期がん患者に対する摂食・嚥下、口腔ケア
- ・スピリチュアリティって何だろう？

地域ホスピスケア研究会

期 間 2007年4月～2008年1月(5回)

延参加者数 323名

主なテーマ

- ・在宅ケアと地域緩和ケアネットワーク
- ・苦痛緩和における鎮静
- ・病気の親をもつ子供への告知・病状説明について
- ・終末期せん妄患者の症状緩和
- ・緩和ケアにおける薬剤師の役割
- ・地域緩和ケアネットワーク - 今、何が求められ、何が
できるのか -

8) 図書・文献整備, 文献利用サービス

購入図書 14冊

定期購読雑誌 14誌(洋雑誌7誌・和雑誌7誌)

9) 研究所会員制度(図書貸出, 文献検索サービスなど)

会員数 30名(医師9名, 看護師9名, ソーシャルワーカー
2名, 音楽療法士1名, 薬剤師1名, 栄養士1名, 理学療法
士1名, 生活指導員1名, ボランティア1名 他4)

10) 機関誌発行

ピースハウス活動報告(『ふれんず』Issue No.13)

5,000部

3 「日本ホスピス緩和ケア協会」事務局 として

協会は、1991年に「全国ホスピス緩和ケア病棟連絡協議会」として発足し、その後、緩和ケアの提供形態が病棟だけでなく、緩和ケアチームや在宅ケアとしても提供されるようになり、2004年、名称を改め「日本ホスピス緩和ケア協会」となった。これまでは任意団体として活動してきたが、2007年10月31日、NPO 法人として認可され、以下の事業を中心に活動を進めることとなった。

- 1) ホスピス緩和ケアの啓発普及に関するセミナー、講演会等の開催事業
- 2) ホスピス緩和ケアに従事する者に対するセミナー・講座・研修会等の開催事業
- 3) ホスピス緩和ケアの質の確保と向上に関する調査・研究事業
- 4) ホスピス緩和ケアに関する広報活動、情報提供、情報交換事業
- 5) 国内外の関連団体との連絡、連携に関する事業

2007年度、事務局としては、通常の業務の他に法人化移行に向けた準備、法人化後の事業の調整や広報活動など、業務は多岐にわたった。特に、世界のホスピス緩和ケア関係団体が参加する「世界ホスピス緩和ケアデー」(2007.10.6)では、世界を音楽でつなぐ「ホスピスムーブメント」の開催事業と重なり、第1部：シンポジウム、第2部：バイオリン演奏と合唱という構成で、「ホスピス緩和ケアフォーラム」を開催した。また、協会では、9月31日から10月6日までの1週間を「ホスピス緩和ケア週間」とし、日本各地で、会員施設・支部が講演会・施設見学会・展示会・コンサートなどさまざまなイベントを開催した。事務局では全国の活動をとりまとめ、イギリスの本部に日本の活動を報告し、世界の人々と情報交換を行った。

一方、2007年4月より「がん対策基本法」が施行され、6月には、「がん対策推進基本計画」が策定されたことで、緩和ケアの果たす役割がますます大きくなっている。各都道府県での取り組みも具体化し、協会会員施設もさまざまな形で参加協力しており、各地の状況を把握しながら、厚生労働省との意見交換を進めるなど、事務局として果たす役割が大きくなっている。

報告 / 松島たつ子(ピースハウスホスピス教育研究所所長)



訪問看護ステーション千代田

所在地：東京都千代田区平河町2-7-5 砂防会館5階

開設10年目を迎えた2007年度は常勤看護師4名、非常勤看護師2名、うち4名がケアマネジャーを兼務、そして事務1名（平成19年4月採用）のメンバーで業務に取り組んだ。

I 訪問看護業務

利用者の利用保険別推移

利用者の保険の内訳は例年通り介護保険利用が主であるが、表1、2に示す通り医療保険の利用者は全体の1割から2割であった。医療保険の内訳は神経難病とがん末期の利用者である。難病の利用者は一昨年度後半から増え、引き続き訪問看護を利用しながら在宅療養を継続していることが現れている。その一方、介護保険の利用者は減少した。

毎月新規の依頼はあるものの、今までの利用者が更なる高齢化と天寿を全うされるなどで訪問看護終了者が続いたことが影響している。なかには軽快したので訪問看護終了のケースもあったが、この不況の状況下、なるべく出費を抑えたいとの意向から訪問看護の回数を減らすケースも少なくなかった。軽症のうちから予防的に訪問看護を利用して症状を早期発見し、適切に対応していくことが出費をより抑えることにつながり、介護を受けながらQOLを維持、向上していく介護保険の目的に添ったものとなる。しかし、この意識が利用者には浸透しておらず、また福祉職をベースとするケアマネジャー（最近医療職のケアマネジャーは少ない）の医療アセスメント力が弱いことから、ケアプランの中に訪問看護を計画で

きていないのも利用者が増えない一要因ともいえる。実際、依頼を受けてから訪問してみると、なぜもっと早くに訪問看護を導入しなかったのかと思うケースは相変わらず多い。

2006年度より導入されたものに予防介護制度がある。これは、老化による心身機能の低下をできる限り予防して、健康で自立した生活ができるように新たに設置された制度である。この予防介護制度の中に位置する予防訪問看護の計画が2006年度より開始された。このため予防訪問看護を提供できるステーションとして東京都に届け出も行った。2007年度の予防訪問看護の利用者は延べ2名であった。まだまだ少ないが、今後も予防の観点から訪問看護を利用してもらうために、予防介護の中心拠点である地域包括支援センター（前在宅介護支援センター）とも今まで以上に連携をとっている。具体的な方法としては要介護状態であった利用者が状態改善し要支援に認定されるケースは、引き続き訪問看護の利用を計画してもらうように働きかけている。この逆の場合として要支援の方が要介護に認定されるケースもあり、同様に訪問看護の継続利用を働きかけている。

他に地域包括支援センターからは医療アセスメントをはじめとした相談を受けることも増えた。同様に他居宅介護支援事業所のケアマネジャーから相談を受けることもあった。

2006年度から、ケアプランに必要とされるサービス担当者会議を必ず行うことがケアマネジャーに義務づけられた。これによりサービス担当者会議への出席依頼が増え、会議に時間を割く回数が倍増したが、よりよいサー

表1 訪問看護件数の推移

月	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	合計(件)
医療保険(件)	63	57	73	49	104	48	68	57	50	63	63	88	783
介護保険(件)	202	227	203	221	239	193	228	216	202	215	197	213	2,556
自費訪問(件)	5	7	6	4	3	6	6	8	7	5	4	9	70
総訪問件数	270	291	282	274	336	247	302	282	259	283	270	315	3,411

表2 利用者人数

月	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
医療保険(人)	6	7	8	7	7	6	8	6	7	7	8	9
介護保険(人)	51	49	50	49	48	47	48	48	51	51	48	51
利用者総数(人)	57	56	58	56	55	53	56	54	58	58	56	60

ビスへと意見が反映されることも多くなった。反面、看護師としての判断・意見をケアマネジャーはじめ他職種に伝えていく難しさも痛感するようになった。今後の課題としたい。

千代田区は高齢化が進んでいいるものの住民が少ないという現状があり、新規依頼はあるものの、介護度の重い場合やがん末期の場合など亡くなるケースも多いので、安定した利用者数を確保することは困難な一面もある。今後は千代田区ばかりでなく、隣接する港区においても利用者を増やすことを検討していきたい。

2007年度から自費訪問（保険外訪問）の数が増えたので表1に示した。2006年度から介護保険サービス利用の規制が厳しくなり、以前は認められていたサービスが認められなくなったものが増えている。たとえば訪問看護は最高1時間30分までの利用が認められているが、訪問中に状態変化があって診察を必要とし、そのために医師と連絡をとったり、時には救急車で病院搬送の手配を必要とすることが起こる。この場合1時間30分では時間が足りず延長になるが、この延長分は保険で認められなくなり自費訪問となった。他には利用可能な限度額を越えてしまっているが訪問看護を希望する利用者がいて、保険外訪問が増えたこともある。

2 介護保険利用者の利用時間内訳と年齢別・疾患別内訳

利用者が減少したのでそれぞれの訪問回数も減少している。

訪問看護の利用者は介護度が重く、ケアをはじめ医療処置等で訪問に少なくとも1時間は要することが多い。30分の訪問看護利用者は比較的介護度が低いケースが多い。体調管理をはじめとする健康相談等が多い。

緊急時訪問看護加算は24時間看護師と連絡可能なシステムであり、介護保険の中では任意契約になる。この利用者は介護保険利用者のうち半分の契約である。安心のために契約する方もあれば、医療ニーズで必然的に契約

している方もいる。どちらにせよ24時間看護師と連絡可能なシステムは安心して在宅療養するためには必要な支援といえる。しかしこれも一時期に比べ契約者は減少している。その理由は先にも述べた出費を抑えることが関連しているものと思われる。

実際の緊急訪問は1カ月に0～5回程度であり、日々の看護がこの回数に影響する。つまり予測してケアをする、事前にケア方法を説明する等の配慮が安心感につながり、緊急訪問回数を少なくさせる。実際には電話相談だけで安心していただくことも多い。

特別管理加算とは医療処置や管理を必要とする場合で、もっとも多いのは胃ろう管理である。他にカテーテル類や在宅酸素管理などがあげられる。これは任意契約でなく、処置を行っている場合には必然的な契約となる。利用者の1～2割が医療管理を受けながら在宅療養をしていることが読み取れる。

訪問看護の利用者は介護度の重い方が多く、また後期高齢者が多い。高齢者の特徴として複数の疾患をもって療養していることが表4、5、6からわかる。今期は年間を通じてがん末期利用者に訪問看護を提供した。

3 看護内容と連携

他に傾聴や家族支援といった形には現れない必要不可欠なケアも多く、何らかの形でほぼ全利用者に提供している。利用者本人ばかりでなく、家族への健康状態確認等も行っている。訪問看護師による医療処置や看護技術の提供は業務のごく一部であり、看護業務で多くの時間を費やすのは在宅療養を軌道に乗せるためのマネジメントである。

病院から在宅へ移行してくる場合、疾患の説明と本人家族の受け止め方、在宅療養することへの考えや不安や希望、医療処置の実際等を退院前から病棟看護師と連携することは在宅療養支援として欠かせない点である。病院側も退院支援の窓口を設置し、そこに看護師を配置するようになり、以前よりも連携はとりやすくなった。た

表3 訪問時間（介護保険）内訳

月	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
訪問回数（30分未満）	42	52	43	44	56	47	50	49	42	42	41	42
（30分～1時間）	119	133	128	142	147	120	149	144	128	137	123	135
（1時間以上）	41	42	31	35	35	25	29	23	32	36	32	37
緊急時訪問看護加算	29	28	29	28	29	28	29	29	33	31	28	30
特別管理加算	7	7	7	6	6	6	6	6	7	9	9	9

だこの連携のために病院へ行くことについては医療保険では1回のみ、介護保険ではまったく算定することができないのは訪問看護ステーションにとって経営的に厳しいが、この連携の必要性を理解しているからこそ、持ち出しでも看護師を病院に派遣している。実際派遣するためにすでに決定しているスケジュールを調整し、看護師を派遣することは容易なことではない。しかも病院へ行きカンファレンスに参加するだけで2時間は要する。2時間あれば通常2件の訪問看護をこなすことができ、かつそれは約2万円の収入になる。今後この件について医療保険では若干改善されるが、利用者の多くは介護保険の利用なのに介護保険においては次回の改正を待たなければならない。在宅療養を支える訪問看護師としてこの点の制度改革を強く希望したいところである。

その他、訪問看護におけるリハビリテーションの実施については区の高齢介護課介護予防係に理学療法士である相談員が在席しているので、多くのケースで相談しアドバイスをいただいている。また難病ケースは保健師や行政の支援担当窓口と連携をとって支援している。

4 紹介先

新規ケースの紹介先はケアマネジャーが主である。医療相談室からの直接の依頼は、医療依存度の高いがんのターミナルケースであり、その際、あわせてケアマネジャーの依頼もあるが、訪問看護と兼務であるため多くのケースを受けることができない。その場合、こちらと連携のとりやすいケアマネジャーを紹介し、円滑に療養を支援できるようにしている。

5 実施指導

開設以来はじめての実施指導を受けた。指導内容を大きくあげると下記の通りである。

- ステーションの運営規定の確認
- 看護師の人員配置と勤務実態
- 契約書の確認
- 訪問看護業務の確認
- 訪問看護指示書の有無、訪問看護計画書・訪問看護報告書の有無と医師・利用者への提出とその確認
- 請求業務と請求内容確認
- 利用者からの負担金徴収方法の確認
- 事務所内の配置と使用物品確認

表4 2007年度訪問看護
利用者の内訳

介護度	人数
要支援	2
要介護1	14
2	9
3	16
4	15
5	25
計	81

表5 2007年度の介護
保険利用者の介護度

年齢	人数
30～40	0
40～49	1
50～59	0
60～69	9
70～79	41
80～89	32
90～99	1
100歳以上	1

利用者数は後期高齢者が多い。

表6 主な疾患（重複あり）

疾患名	人
循環器系	31
脳血管疾患	14
骨・筋系疾患	8
呼吸器疾患	8
消化器疾患	7
内分泌・代謝疾患	11
痴呆	39
難病	5
悪性新生物	4
腎・泌尿器疾患	6
その他	11

表7 看護の内容（重複あり）

病状・身体状況の観察	全利用者
生活・介護相談	ほぼ全利用者
保清・排泄	37
リハビリ	16
医療処置・指導等（排泄コントロール・薬の管理も含む）	29

表8 2007年度新規利用者の紹介先（23名）

紹介者	人数
ケアマネジャー	9
医療機関（病院相談室他）	8
利用者・家族	2
その他（支援センター他）	4

左記の点について半日を要して東京都職員と区職員の同席で実施指導がなされた。結果は予防給付に関する業務に携わっていることを運営規定に加えること、緊急訪問看護加算について利用者の同意を得ているが書面でも同意を残すことを指導され、早急に改善した。その他はおおむねよく運営されているのでこのまま業務に携わるとのことであった。

6 居宅介護支援事業所としての業務

4名の訪問看護師が兼務でケアマネジャーとして利用者のケアプランを作成している。

居宅介護支援事業は法令で定められた通り業務や作成しなければならない書類が増え、サービス利用の規制も厳しい。その中で本人の望む自立へのケアプラン作成には困難も生じ、さらに多くの時間を要するようになっていく。定められた中でプランを作成していると必要なサービスを導入できない現実にも直面することも多くなり、法を守るのか、高齢者の生活を守るのかわからなくなる一面もあった。

今まで看護業務との両立は厳しいものがあつたが、看護師として医療面・介護面をアセスメントしつつ生活する視点からプランを提案し地域に貢献してきた。このような中、区から居宅介護支援事業の業務に関する指導を受けた。結果は厳しいものであり、法令遵守ができていないという指導内容であった。なかには担当者会議など実際に行えていない面も指摘はされたが、実施しているにもかかわらず記録の不備で実施していないと判断されるものもあった。反省すべきことはあるが遺憾でもあつた。

このような指導を受け法令を遵守していくように業務の見直しを行い、記録を整備した。

しかしこれだけの業務を訪問看護業務と兼務していくことはたいへん厳しいものであり、実際、居宅介護支援業務は訪問看護ほどの収入も見込めず、訪問看護にも支障を来すことからさらに担当者数を限定することにした。昨今看護師のケアマネジャーが減少してきている中、残念ではあるが介護保険改正の流れの中ではやむを得ないことと考へた。と同時に訪問看護業務に専念できるようにケアマネジャーと兼務する看護師も2名とした。

業務の一環として千代田区主催の連絡会に出席し、地域や他事業所のケアマネジャーとの情報交換や連携に努めることは可能な範囲で継続している。また他のケアマネジャーに訪問看護の理解を深めてもらう場としても出席している。

表9 ケアプラン作成数

月	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
ケ ア プ ラ ン	17	16	15	16	16	16	5	5	5	5	5	5

7 その他

2005年1月に設立された訪問看護ステーション協議会にも所属し、看護サービスの質の向上や情報収集、情報交換、他の訪問看護ステーションとの交流に努めている。

カンファレンスの実施

毎月1回、日野原理事長指導のもとでケアカンファレンス(事例検討)を行っている。

この内容は2002年7月から日本看護協会出版会発行の『コミュニティケア』誌の取材を受け隔月に掲載されている。カンファレンスには医師、看護師、ケアマネジャーなど、在宅に関わる方々の出席があり、意見交換を行うとともに、訪問に生かせるアドバイスをいただいている。

在宅療養支援診療所医師とのカンファレンス

ステーション千代田の多くの利用者の主治医である在宅支援診療所のコンフォガーデンクリニック木下医師と2カ月に1回治療方針・看護方針を確認し、情報交換に努めている。

千代田区内の訪問看護ステーション連絡会を3カ月に1回開くことになり、情報交換を行っている。

中間サマリーによる看護の振り返り

年度末にサマリーを記録することによりおのおのが看護の振り返りと見直しを行っている。この記録を残すことで、急な入院時に病院へのサマリーを早急に準備することもでき、たいへん役立っている。

勉強会

毎月第一木曜日の業務終了後に勉強会を行っている。スタッフが交代で担当し、テーマは看護に限らずに実施している。

看護専門学校やヘルパー養成所の在宅実習指導を引き受けている。認定看護師の実習も引き受け、今後も継続していく予定である。



訪問看護ステーション中井

所在地：神奈川県足柄上郡中井町井ノ口1000-1（ピースハウスホスピス病院内）

訪問看護ステーション中井が開設してから9年が経過した。ピースハウス病院の外来・訪問診療が再開され、医師や地域連携部門との連携を強化している。

以下に2007年度の統計および活動について報告する。

1 訪問件数およびケアプラン作成

月平均の訪問件数は275.5件。

昨年度終わりにスタッフが1名減り、その後も1名減ったこともあり、新規利用者を受け入れられない状態が続き、それがスタッフを補充しても、新規利用者確保、訪問件数上昇には至らなかった。

ケアプランも上記同様の状態になっている。

2 業務時間外の電話相談件数と緊急訪問件数

ターミナルの利用者の有無や状態により、電話相談・緊急訪問件数はかなりの変動が見られている。

3 利用者の年齢分布、住所

中井町は人口約1万人と少なく小さい範囲のため、ステーションを中心に5～6km圏内の隣接する3市3町も対象地域にしている。

ピースハウス病院の利用者に関しては秦野市・小田原市・平塚市全域まで訪問範囲を広げている。

表3 利用者の年齢分布

年齢	(名)
0～19	0
20～29	0
30～39	1
40～49	1
50～59	8
60～69	21
70～79	33
80～89	18
90～99	11
100～	0

表4 利用者の居住地

住所	(名)
中井町	50
二宮町	15
秦野市	9
小田原市	6
平塚市	9
大磯町	2
その他	2

表1 訪問件数とケアプラン作成数

(件)

月	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	合計
利用者在籍数(名) (利用者実数)	56	54	54	55	53	55	54	54	51	49	52	45	632 (93)
総訪問件数(件)	275	257	289	287	290	255	297	277	264	231	291	293	3,306
医療保険	86	89	122	110	115	106	123	123	110	89	115	94	1,282
介護保険	189	168	167	177	175	149	175	154	154	141	175	194	2,018
訪問看護1(30分未満)	12	7	12	14	12	9	12	12	14	11	14	19	148
訪問看護2(60分未満)	168	155	145	150	153	132	156	134	134	123	148	158	1,756
訪問看護3(90分未満)	9	6	10	13	10	8	6	8	6	7	13	13	109
緊急時訪問看護加算	37	37	37	37	38	39	29	27	28	27	30	32	398
特別管理加算	5	4	5	5	5	5	5	4	6	5	6	7	62
ケアプラン	15	14	13	12	11	11	11	12	12	12	13	18	149

表2 業務時間外の電話相談件数と緊急訪問件数

月	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	合計
電話相談(件)	6	1	17	6	13	6	9	4	4	11	19	12	108
緊急訪問(件)	5	1	6	2	5	3	5	2	2	4	9	5	49

表5 紹介者

(名)

紹介者 / 年度	2002	2003	2004	2005	2006	2007
他事業所ケアマネージャー, 地域包括支援センター等	61	61	51	49	44	38
医療機関 (ソーシャルワーカー, ナース, 開業医等)	14	9	18	15	24	17
ピースハウス	8	14	15	7	4	14
行政 (福祉課, 保健婦等)	15	10	8	5	6	8
知人, 近所の方等	6	5	6	5	4	5
本人・家族から直接の申し込み	13	20	13	16	15	7

4 紹介者

他の事業所ケアマネージャーからの訪問依頼がほとんどであり, 難病やターミナル, 医療依存度の高い方については医療機関の地域連携室等からの依頼が多かった。ピースハウス外来再開に伴い, ピースハウスからの紹介は3倍以上増えた。

5 訪問看護内容

看護内容の重複あり。

リハビリケアのニーズが高く, 脳血管疾患の方やパーキンソン病の方への関節可動域運動, 立位・歩行訓練, 嚥下体操や, 呼吸器疾患の方への呼吸リハビリなどさまざまにリハビリを行っている。また, 筋力低下のために腹圧がかけられず自力排便が困難な方への排泄ケアも在宅における重要なケアとなっており, 年々ニーズが高くなっている。

6 介護保険対象者の介護度

訪問看護の特徴として要介護3～5の方が多く, 介護度の軽い方も, 介護予防としてリハビリケアを希望されている。

7 主な疾患

脳血管障害の対象者が多く, その利用者のほとんどにリハビリケアのニーズがある。

表6 訪問看護内容

内 容	(名)
病状の観察	93
リハビリケア	56
服薬指導	52
清潔・排泄ケア	65
医療処置	39
家族支援	93

表7 介護保険対象者の介護度

介護度	(名)
要支援1	0
要支援2	1
要介護1	3
要介護2	7
要介護3	10
要介護4	16
要介護5	13

表8 対象者の主な疾患

疾患名	(名)
脳・神経疾患	20
悪性新生物	25
循環器疾患	7
運動器疾患 (脊椎損傷等)	8
難病	13
呼吸器疾患	2
内分泌・代謝疾患	2
腎・泌尿器疾患	5
精神疾患	0
その他	11

表9 年度別にみた利用者の亡くなった場所

(名)

亡くなった場所 / 年度	2000	2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007
ピースハウス	13	12	2	6	11	6	7	14
自宅	11	5	6	8	10	6	3	7
合計	24	17	8	14	21	12	10	22

難病の方も年々増え、ALSで人工呼吸器を装着している方等、医療依存度も高い。

8 ピースハウスが主治医で、当ステーション利用者の亡くなった場所

2007年度は他病院に入院するケースが1件あった。他医療機関・診療所が主治医で在宅死を迎えたケースは4件だった。ステーションが関わった時点でターミナル末期の状態が多く、初回訪問だけで入院に至ったり、次の訪問がレスケアに伺うケースもあり、全体的に利用期間が短いといえる。

9 まとめ

開設当初からピースハウス病院内で開いてきた「地域

緩和ケア研究会」が少しずつ浸透し、参加者も幅広い職種の方々に出席いただけるようになってきた。またこの会で取り上げないケースを会の終了後にカンファレンスを開くなど、この会をいろいろな意味で有益に利用できていると思われる。今後もこの研究会を通して医療連携を強化し、地域の緩和ケアネットワークの拠点となるような働きかけをしていきたい。

居宅介護支援事業（ケアプラン）に関しては、2006年度にスタッフ減少による利用者の削減を行ったためにその影響が残り、スタッフが整った今もなかなか増えない状況である。先に述べたように、がん末期利用者のケアプランは短期間の利用であるので、ケアマネージャーは他疾患のケースよりスピーディに動く必要がある。また市町村からの委託を受けて要支援に対するケアプランも行っており、今後もどのケースにも対応できるよう、ケアサービスの向上を目指していきたい。

報告 / 新原真由子（訪問看護ステーション中井所長）



学会参加活動

学会発表

- ・朝比奈崇介：患者状態適応型パス統合システム(PCAPS)による循環式糖尿病外来管理パスの検討，第50回日本糖尿病学会年次学術集会，2007.5.23～26，仙台市
- ・松島たつ子，鶴若麻理，西立野研二：終末期における患者の意思決定に関する調査，第12回日本緩和医療学会，2007.6.22～23，岡山市
- ・松島たつ子，二見典子，新原真由子，西立野研二：地域における緩和ケアネットワーク - 学習の場の共有からケアの実践へ - ，第31回日本死の臨床研究会年次大会，2007.11.10～11，熊本市
- ・坂本 恵，新原真由子，張 修子，二見典子，松島たつ子，西立野研二：在宅での看取りと緩和ケアネットワーク - 検死になった事例から考える - ，第31回日本死の臨床研究会年次大会，2007.11.10～11，熊本市
- ・中武さやか，平野真澄：嚥下障害への支援の可能性とその意味，第31回日本死の臨床研究会年次大会，2007.11.10～11，熊本市
- ・福井みどり：真の自分との出会いへの支援 - 対決技法を取り入れて，日本カウンセリング学会第40回大会，2007.11.23～24，那覇市
- ・落合秀宣・宮内由美子・岡庭栄理・渡辺智子・井上仁志・宮崎倫子・甲斐なる美・佐藤淳子・朝比奈崇介・道場信孝・日野原重明：メタボリックシンドローム発現の経緯について～12年間の健診データによる検討～，日本総合健診医学会第36回大会，2008.1.25～26，神戸市
- ・西立野研二，小早川晶，二見典子，源 美希，清水直子，吉松知恵，鈴木雪枝，松島たつ子：日本緩和医療学会，6.22～23，岡山市
- ・岩本貴子：日本緩和医療学会 EPEC-O トレーナーズワークショップ，7.7～8，つくば市
- ・草島悦子：日本ホスピス緩和ケア協会年次大会，7.14～15，長野市
- ・張 修子，山内かおり：日本褥瘡学会，9.7～8，群馬県
- ・伊藤真実子，多田恵美子：日本摂食・嚥下リハビリテーション学会，9.14～15，埼玉県
- ・西立野研二，松島たつ子：アジア太平洋ホスピスカンファレンス，9.27～29，フィリピン・マニラ市
- ・志村靖雄：日本病院ボランティア協会総会，11.1～2，京都市
- ・坂本 恵，岩本貴子，安住和夏，平野真澄，中武さやか，西立野研二，松島たつ子：日本死の臨床研究会年次大会，11.10～11，熊本県
- ・白石桂子：日本生命倫理学会年次大会，11.10～11，東京都
- ・倉辻明子・有泉さくら：第17回日本乳癌検診学会，2007.11.21～22，横浜市
- ・伊部千恵子，西田真理，江森由紀子：日本サイコオンコロジー学会 / 日本総合病院精神医学会総会合同大会，11 / 29～30，札幌市
- ・三井英己・那須美智子：日本総合健診医学会第36回大会，2008.1.25～26，神戸市
- ・松島たつ子，瀬戸ひとみ：日本がん看護学会学術集会，2.9～10，名古屋市

学会・研究会・セミナー参加

- ・落合秀宣：第27回日本医学会総会，2007.4.6～8，大阪市
- ・渡辺智子・岡庭栄理・宮内由美子：第48回日本人間ドック学会，2007.8.30～31，東京都
- ・秀長米和：日総研セミナー，4.25，東京都

研 修

- ・白柳朱美，米山由希子：国家公務員等共済組合連合会六甲病院，9.26～27，神戸市
- ・長澤裕子：神奈川県看護協会研修会，10.15～17，横浜市



員

1 健康教育サービスセンター会員

健康教育サービスセンターの会員構成および地域分布を表および図1, 2に示した。

健康教育サービスセンターの会員に初期の頃から入会して下さっていた会員が「新老人の会」に移行傾向にあることや、「新老人の会」にジュニア会員やサポート会員枠を設け会員増強に取り組んでいることもあり、サービスセンターの会員は減少している（「新老人の会」会員には、健康教育サービスセンターの会員の特典も含まれている）。

表 会員職種内訳

会 員	男	女	合 計	
一 般	79	530	609	
専門職	医 師	7	2	9
	看護師	1	127	128
	その他	6	39	45
学 生	1	5	6	
男女別合計	94	703	797	

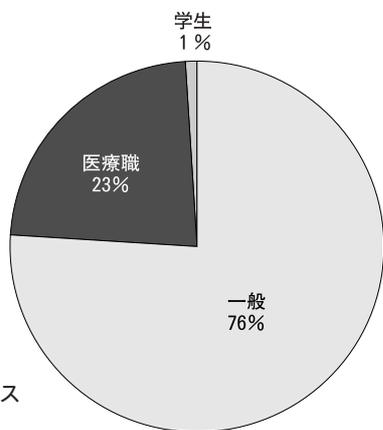


図1 健康教育サービスセンター会員構成

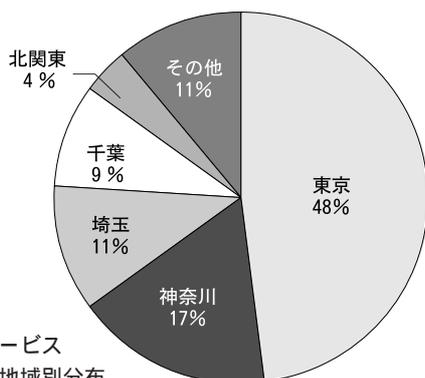


図2 健康教育サービスセンター会員地域別分布

ただし、新規入会の会員は2006年度が59名、2007年度は60名となっており、新規入会の会員数は減少していない。

また、医療職会員・一般会員・学生の会員構成、地域別分布の割合は昨年度とほぼ同じである。

2 健康教育サービスセンター団体会員

団体会員 A 会員 (合計 8 団体)

- 御茶の水歯科
- 聖路加看護大学
- 成蹊学園健康支援センター
- JA 東京厚生連健康管理部
- 西東京市医師会訪問看護ステーション
- 入間市医師会立入間看護学校
- 中野市健康福祉部健康長寿課
- 音楽療法研究所所長

団体会員 B 会員 (合計10団体)

- カレス法人統括本部事務所
- 計機健康保険組合
- 社団法人 全国労働衛生団体連合会
- 東京地下鉄株式会社 人事部保健医療センター
- 株式会社 中山書店
- 日本軽金属健康保険組合
- 株式会社 ポピズコーポレーション
- フランシスコ ヴィラ
- 株式会社 アリスの夢 訪問看護ステーション
- テルモ株式会社 駿河工場品質保証課

3 財団団体維持会員 (合計11団体)

- ティーベック(株)
- ドクター・フォーラム本部
- (財)野村生涯教育センター
- ポーソー油脂(株)
- 日本精密測器(株)
- エーザイ(株)医薬部
- (株)東機貿
- 東芝メディカルシステムズ(株)東京支社
- (株)ブリカ
- 医療法人財団慈生会 野村病院
- (株)メディカル・ジャーナル社

4 財団個人維持会員 (合計107名・内1名氏名未掲載希望・ 印今年度入会者6名) (2008年3月31日現在)

秋山 ちえ子	芦野 宏	井口 辰子	石井 倫子	井田 孝子
伊東 五郎	稲岡 寛	井上 清和	岩佐 瑛子	岩佐 倫雄
岩崎 善雄	植田 イツ子	海老沢 利春	緒方 笑子	加藤 朝子
兼松 真澄	川合 幹夫	川尻 泰子	北川 恵子	杵家 智恵子
杵家 完子	木下 照嶽	木村 一朗	久保田 光吉	久保田 美代
黒沢 マツ江	郷内 繁	郷内 延子	国領 久江	小寺 富美代
小西 正子	小林 薫	斉藤 和子	齋藤 正彦	佐伯 正博
櫻田 イソ子	作山 京子	櫻井 裕子	佐藤 君代	沢田 章男
笹井 秀治	笹井 淳子	塩原 きよ	芝 功子	芝 良計
清水 護	神野 たづ子	末 信幸	菅野 日龍	末沢 紀子
鈴木 とき子	鈴木 康子	鈴木 利助	住田 啓子	須磨 礼子
高岡 邦子	高野 實代	館 若菜	田中 一成	辻 恵美
筒井 千枝子	辻 貞子	堤 きよみ	寺岡 美由喜	寺田 朝子
寺田 平太郎	寺田 保信	外池 いずみ	外池 めぐみ	外池 百合子
時本 信明	中平 健吉	中嶋 貞子	中村 福子	中村 真理
西尾 寅夫	野村 侃司	橋本 美也	馬場 敏雄	濱田 俊子
原 恵子	広嶋 信子	藤野 貞子	藤崎 和子	布戸 春介
布戸 哲太	布戸 春	古澤 たけ	星野 喜世子	松下 眞美
光廣 知子	三富 正義	宮川 菊枝	宮崎 明子	宮原 和子
村山 美知子	村尾 麟一	村尾 洋	村田 正子	森本 俊子
山田 三栄	山田 礼子	山本 幸子	横山 澄子	吉田 澄枝
若林 健				

5 「維持会員の集い」から

2007年5月14日月曜日、個人維持会員の集いが開催された。会員とその家族や関係者25名、財団から事務局長、所長はじめスタッフが10名参加し33名の集いとなった。

1) 日野原理事長のお話から

日野原理事長のお話のテーマは「若さをどう上手に保つか」。95歳7カ月の日野原理事長の日常は年々、多忙を極めておられる。長生きしようすれば10年先の自分の予定を作ることであり、いつも自分に先の予定を立てておくことであるという。実際に理事長は4年先の12月に鹿児島での講演会が予定されている。

近年、医療は大きく変貌し、糖尿病や高血圧の慢性疾患を持ちながら長生きできるようになってきた。そのためには年に一回の健康診断を受けることや、骨折をしないように生活を送る注意を払うことが必要である。

高齢になってから若さを保ち元気に過ごすには、「新老人の会 - さっそうクラブ」での歩き方に注意を払うことである。そこでの指導は、歩き方は「踵から歩く」ことを心がける。踵から歩くことで膝や筋肉が伸びて

いく。段差で躓かなくなる等、歩き方に気をつけることにより、姿勢が良くなり、若さを保つことができる。安静による弊害について、これまでは「安静が体力を回復させる」と思われていたが、安静により骨のカルシウムが溶けて血液を介して体外に排泄されてしまい、骨粗鬆症を引き起こしたり、筋肉萎縮、消化器系や泌尿器系の働きが規制されるなどの報告がある。

最近の米国の研究で10日間トイレ以外に動かないでベッド上に寝たままでいると健康な人でも骨格筋が衰えてしまうと報告があった。この研究結果のように過度の安静が高齢者をダメにしてしまう。安静の概念が変わってきていることを認識していかなければならない。

「新老人 - 声のお洒落」では声楽家による発声の指導を行っている。発声の仕方次第で、遠くまで響くような声を出すことができるようになる。

自分たちが、70～80歳になった時にどんな人になりたいか、身近にモデルになる人がいて、自分の理想とする人に近づくために「生き方スタイル」を変えるこ

とである。また、環境が大切である。歳をとったらおしゃれをして年齢を超えて爽やかに生きることである。

2) スタッフからの報告

朝子芳松常務理事が、維持会員が高齢化し会員数減少していくなか、今後の財団の努力で維持会員増員に向けて検討していきたいと述べた。

倉辻検査部長より4月より乳房の超音波検査を行うことになった。この検査は45歳以下の女性が対象である。更にマンモグラフィ検査と併せて行うことにより乳がんの早期発見に繋がる。

甲斐保健管理部長より維持会員の方たちに「新老人ドック」のお勧めがあった。新老人ドックは従来のドックと異なり身体機能や認知障害の状況、詳細な問診によりデータに現れにくい身体症状を評価していくことができることの説明があった。

6 「新老人の会」会員の動向 (図3, 4, 5)

本年度末、会員数は6,038人。発足時から通算すると9,680人が入会し、退会者3,932人、退会率は約41%。退会率を下げるのができずにいるのは、発足から7年半が過ぎ、当初入会された75歳以上の会員の高齢化がいちばんの原因と考えられる。退会理由も「健康上」という断りが多くみられている。

それでも何とか右肩上がりに会員数が増え続けているのは、全国を網羅しつつある支部数の増加(22支部)とその運営の充実、また日野原会長と「新老人の会」の知名度アップにある。それを裏付けるように、本年度の地方講演会はどこも参加者1,000名を超える盛況ぶり、新入会員も増えている。

また2007年11月からはサポート会員(59歳以下)の年会費を半額の5,000円に割引し、幅広い年代を対象に、魅力ある会の運営を模索し始めた。新年度からは夫婦割引制度も導入する予定である。

1) 地方支部の設立

当初は、全国的な展開を推進していくために、全国を大きく10ブロックくらいに分けて、それぞれに地方支部を設立する方針で、2001年9月にまず九州支部が誕生した。続いて、2002年には阪神支部(現兵庫支部)、京滋支部、東海支部、北海道支部が設立された。しかし、大きなブロックのままでは地域に根ざした活動を推進する上で支障をきたすことが明らかになってきたため、県単位くらいまで支部を分けていくことに方針を変更した。2004年度には東北支部が、2005年度には四国支部など6支部、2006年度には鹿児島支部など5支部、2007年は岡山支部など2支部が設立された。その結果、現在、地方支部は22支部となったが、今後も大きな支部を分けて独立させる方針である。

2) ブランチの設立

地方支部の中でも、いくつかの県にまたがっている支部については、将来、支部として独立することを前提に、県単位のブランチを設立し地域に根ざした活動を展開していただくようにしている。

首都圏では東京を中心に本部で活動を展開しているが、周辺地域の方々には地域でも活動ができるようにブランチを設立する方針である。昨年度は「神奈川ブランチ」を設立し、横浜以西、湘南地域を中心に活動を展開している。今後は埼玉ブランチ、千葉ブランチへと広げていく方針である。

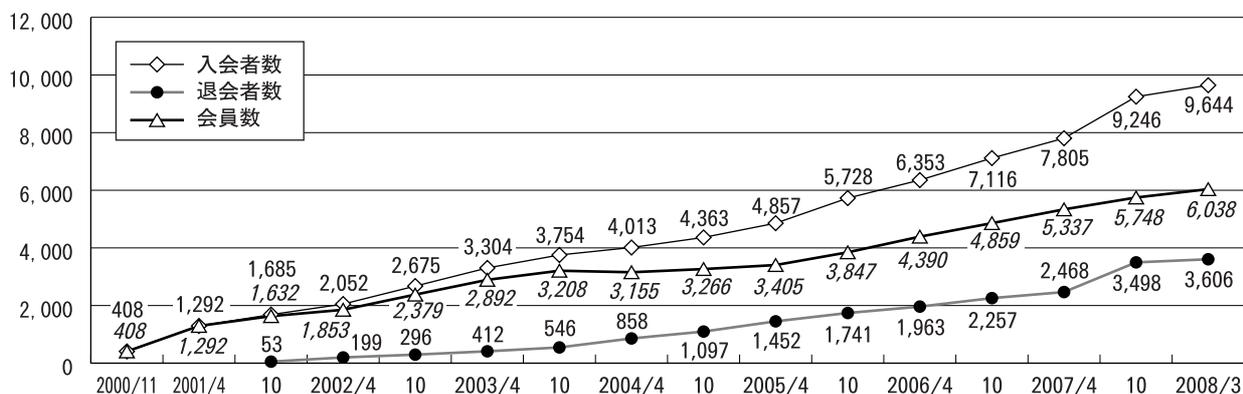


図3 会員数推移

	平均年齢	最少年齢	最高年齢
男	75.9	28	102
女	74.0	20	99
合計	74.8		

	サポート	ジュニア	シニア
男	133 (6%)	677 (28%)	1,549 (66%)
女	270 (8%)	1,147 (36%)	1,771 (56%)
合計	403 (7%)	1,824 (33%)	3,320 (60%)

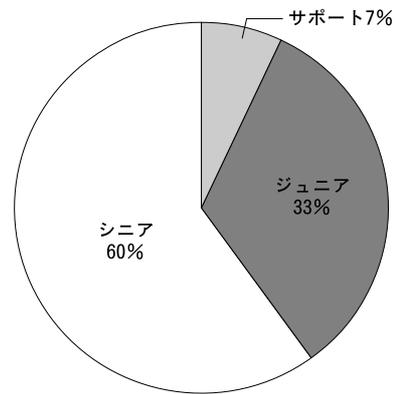


図4 会員別構成

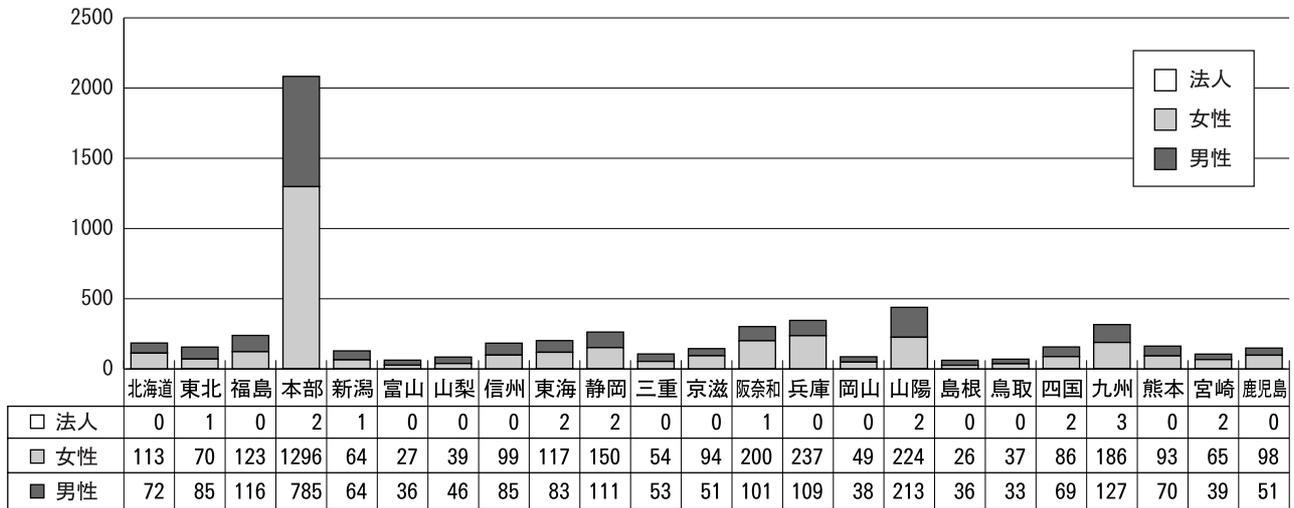


図5 支部別会員数



役員

2008年3月31日現在（五十音順）

理事長	日野原 重 明	非常勤	聖路加国際病院理事長・名誉院長
常務理事	朝 子 芳 松	常 勤	当財団事務局長
理 事	石清水 由紀子	常 勤	当財団健康教育サービスセンター「新老人の会」事務局長
	岩 塚 徹	非常勤	愛知県総合保健センター名誉所長
	岡 安 大 仁	非常勤	元日本大学医学部内科教授，ピースハウス病院最高顧問
	紀伊國 献 三	非常勤	財団法人笹川記念保健協力財団理事長
	久 代 登志男	非常勤	日本大学医学部総合健診センター所長
	児 島 五 郎	非常勤	聖テレジア病院名誉院長
	新 福 尚 武	非常勤	精神医学総合研究所所長
	寺 田 秀 夫	非常勤	聖路加国際病院内科顧問
	道 場 信 孝	非常勤	帝京平成大学教授，当財団研究教育部最高顧問
	土 肥 豊	非常勤	埼玉医科大学名誉教授
	西立野 研 二	常 勤	ピースハウス病院院長
	松 井 昭	非常勤	前ピースハウス病院院長，聖路加国際病院非常勤医
	松 島 たつ子	常 勤	ピースハウス病院ホスピス教育研究所所長
監 事	小 西 宏	非常勤	社団法人病院管理研究協議会顧問
	立 石 哲	非常勤	前当財団常務理事
評 議 員	岩 ■ 榮	非常勤	特定非営利活動法人卒後臨床研修評価機構専務理事
	植 村 研 一	非常勤	横浜市病院経営局総長・横浜市立脳血管医療センター長
	大 谷 藤 郎	非常勤	国際医療福祉大学総長，財団法人長寿科学振興財団理事長
	小 川 秋 實	非常勤	伊那中央病院院長
	行 天 良 雄	非常勤	医事評論家
	小 山 勝 一	非常勤	社会福祉法人日本医療伝道会総合病院衣笠病院内科医
	高 久 史 麿	非常勤	自治医科大学学長
	高 橋 美 智	非常勤	株式会社日本看護協会出版会取締役副社長
	苔米地 行 三	非常勤	前ブルーシー・アンド・グリーンランド財団会長
	長谷川 和 夫	非常勤	認知症介護研究・研修東京センター長
	平 山 峻	非常勤	聖路加国際病院形成外科顧問，東京メモリアルクリニック名誉院長
	本 多 虔 夫	非常勤	前横浜市立脳血管医療センター長
	前 田 大 作	非常勤	ルーテル学院大学名誉教授，日本社会事業大学名誉教授
	山 下 真	非常勤	山下クリニック院長
	湯 浅 洋	非常勤	財団法人笹川記念保健協力財団顧問，前国際らい学会会長



財 団 報 告

2008年3月31日現在

I 評議員会・理事会報告

1. 第15回評議員会・第79回理事会 (平成19年6月1日開催)

第1号議案 平成18年度事業報告の件

「平成18年度事業報告書」に基づき、財団の各部門の活動報告について各部門長より報告がなされ承認された。

第2号議案 平成18年度収支決算の件

「平成18年度決算報告書」に基づき、以下の報告がなされ承認された。

(1) 収支の状況

全体の収支は、686万円の黒字であった。前年度収支は2,008万円の赤字であったので表面上2,694万円の好転であるが、退職給与引当金を前年度分まで計上したので実質では前年度比4,456万円の収支好転。LPクリニックの収支は、2,957万円の黒字。

ピースハウス病院の収支は、2,933万円の黒字。

訪問看護ステーション千代田の収支は、505万円の赤字。

訪問看護ステーション中井の収支は、85万円の黒字。

本部・健康教育サービスセンター・ホスピス教育研究所・「新老人の会」の収支は、4,784万円の赤字。

「新老人の会」のみの収支は、29万円の赤字。

18年度収支686万円の黒字に前期繰越収支差額5,078万円を加えた5,764万円を次期繰越収支差額とする。

(2) 平成18年度決算報告書

18年度より公表するフロー式正味財産増減計算書では、当期経常増減額は4,469万円の黒字、経常外増減額は3,491万円の黒字となり、当期一般正味財産増減額は7,960万円の黒字となる。前期末の正味財産残高9億2,070万円を加えると18年度末の正味財産残高は10億30万円となる。

(3) 資産・負債の状況

平成19年3月31日現在の資産合計額は11億9,133万円、負債合計額は1億9,103万円、差引正味財産額は10億30万円である。

平成19年3月末現在のリース残高は9,780万円で、前年同月比897万円減少した。

なお、監事より平成18年度決算において公認会計士による外部監査が実施されたことが報告された。

第3号議案 笹川医学医療研究財団に対する平成19年度助成金交付申請に係る件

「ホスピスナース養成研究」として600万円、「ホスピスドクター養成研究」として420万円、そして新たな事業として「地域緩和ケアネットワークモデル事業」として1,000万円、総額2,020万円を申請したい旨の説明があり、承認された。

第4号議案 厚生労働省に対する平成19年度助成金交付申請に係る件

厚生労働省が、がんに関わる医療従事者ががん患者に対するリハビリテーションに関する研修等を行い、知識とリハビリテーション技術の両面に精通する医療従事者を育成するという委託事業の事務局を当財団が行う。事業の内容は、ワークショップ等による実務研修・研修用機材の作成、ホームページ等を用いての事業概要の紹介等による普及啓発活動であるとの説明があり、承認された。

第5号議案 平成19年度収支予算案修正の件

日本財団の助成金確定による修正と期初予算案作成後の諸要因の変化を織り込んだ修正がなされ、収入、支出ともに11億5,561万円で、期初予算比4,099万円の増加の修正案が提示され承認された。

第6号議案 規程の制定に係る件

個人情報の取扱いを外部に委託する場合のルールとなる「個人情報外部委託管理規程」を制定したいとの説明があり承認された。

第7号議案 評議員選任の件 (理事会のみ)

任期満了となる評議員15名全員の再任が承認された。

2. 第16回評議員会・第80回理事会

(平成19年10月25日開催)

第1号議案 平成20年度事業計画並びに収支予算案に関する件

資料に基づき、平成20年度の事業計画が承認され、また予算規模11億5,163万円で前年度比399万円減の収支予算案が承認された。

第2号議案 日本財団に対する平成20年度助成金交付申請に関する件

助成事業助成金について平成19年度と同様に(1)国際ワークショップの開催、(2)健康教育・ボランティア教育の啓

蒙普及並びに調査研究、③ターミナル・ケアの研究と人材の育成の3つの助成事業でそれぞれ個別に申請するが、申請総額は2,590万円。また基盤整備助成金については平成19年度と同額の1億円を申請したい旨の説明があり、承認された。

第3号議案 規程の制定に関する件

財団における個人情報保護に関する監査を実施するための「個人情報保護監査規程」を制定したいとの説明があり承認された。

第4号議案 役員選任の件（評議員会のみ）

任期満了となった寺田理事並びに土肥理事の再任が承認された。

2 寄 附

本年も財団各部門の運営支援のために多くの個人、団体からのご支援をいただいた。

受領部門	金 額
本部・公益部門	3,909,972円
LPクリニック	1,749,099円
ピースハウス病院	16,737,873円
「新老人の会」	8,264,500円
合 計	30,661,444円

3 フレンドの会

「ピースハウスフレンドの会」は、わが国最初の独立型ホスピスであるピースハウス病院の運営を支援していただくための会で、会員の方々から年1回会費の形で援助金を納めていただいている。平成19年度は、218件、374万円のご支援をいただいた。

ピースハウス病院は、平成19年9月23日に開設14年を迎え今後ともケア体制の整備充実、地域医療機関との連携強化を図り、理想とするホスピスケアの実現に向かい前進して参ります。会員皆様方のこれまでのご協力に感謝し、引き続きご支援と励ましをお願いいたします。

4 第22回 LPC バザー

開催日時 11月20日(火) 12:00～15:00
開催場所 砂防会館5階 健康教育サービスセンター
テ ー マ さらなる LPC の発展のために
入 場 者 100名

内 容

1) テーマの設定

今年財団は設立35年目への歩みを始めた。財団のすべての組織で経営に大変さがある。節目の年、初心に戻ってバザーの目的を財団全体の発展のために捧げることにした。

2) 開催準備

9月上旬に各部署から選出されたボランティアのバザー委員を招集し、職員担当者を含め、「バザー委員会」を組織した。委員長はオフィスボランティア（健康教育サービスセンター）コーディネーターが担当した。

職 員：オフィスボランティアコーディネーター（委員長）、財団ボランティアコーディネーター、ピースハウスボランティアコーディネーター

ボランティア：クリニックボランティア1名、ピースハウスボランティア2名、血压ボランティア2名、オフィスボランティア1名、模擬患者（SP）ボランティア2名、新老人サポートボランティア（パソコン）2名、ホスピスサポートチーム1名、府中はなみずき1名

この委員会で、献品種別・値付け作業日、協力ボランティア数、販売担当部署、売場レイアウト、集合時間等の詳細を決定した。

バザー開催案内チラシを印刷（例年、会報『健康教育』その他の仕事を依頼している㈱ブリカがサービス）し、健康教育サービスセンターの職員とボランティアの協力を得て配布した。なお、献品の依頼は文書によって維持会員にも協力を要請した。依頼品は手作り品、雑貨、食品、衣類、酒類である。

献品の受け入れは、原則として11月に入った開催日2週間前から始めた。献品は100件余り、献金は2件であった。

3) 開催当日

開催時間の30分以上も早く入場者が集まったが、整理札を配布して混雑なく買物してもらうことができた。ただし、以前のような高値のつく品物はごく少なく、食品・陶器が減り、日用雑貨が増えた。このため、かつて多く利用された宅配便（買上品の自宅送付・着払）は減った。

協力者：職員13名 / ボランティア約100名（財団内外のボランティア）

4) 講演会

開催時間の中ほどに1時間、日野原理事長による講演「健康な生き方とは - あらためて考えよう」がなされ、講演会会場（健康教育サービスセンター視聴覚室）は満席、79名が参加者された。

5) 収益金

約67万円

5 第25回 LPC 美術展

会 期 2007年6月5日(火)～7月3日(火)

開催場所 砂防会館5階 健康教育サービスセンター
「新老人の部屋」

出展数 33名

出展者数 33名（「新老人の会」会員26名、職員/元職員3名、ボランティア2名、LPクリニック利用者2名）

作品内容 作品タイトル

1) 出展内容

絵画の部（14点）：西洋人形，仲良し，二月堂への道（奈良），孫たち，憩いのとき，早春，東尋坊，ストックホルムの風景，塩原近郊にて，花と籠，ベレー帽の女，秋明菊，庭のチューリップ，ギリシャ（デルフォイ）の聖ルカ修道院

写真の部（7点）：飛騨，我が家のらん三種，同，同，朝のシンフォニー，華苑（昭和記念公園），春たけなわ - 西蔵王

その他（12点）：a）書（3点）「無常（和漢朗詠集）・百寿・望」，b）俳画（2点）「花水木，六瓢息災」，c）水墨画（2点）「水仙，シクラメン」，d）絵手紙（2点）「野原は自然博物館，京野菜を食べた錦市場」，e）和紙絵画（1点）「月見草」，f）ちぎり絵（1点）「友情の絆 - ふるさとの詩（うた）」，g）木彫（1点）「眼鏡置」

2) 概 観

今回から会期が秋から春に移行したが，前回から半年の期間しかなかったにもかかわらず，出展数は通常（昨年は一人的出展数が多かった）に戻った。

初めて出展された方が3名で，健康教育サービスセンター会員2名，「新老人の会」会員1名であった。

作品の大きさが大きくなりつつあり，それぞれの出来

栄えが上達している。

「新老人の会」会員が占める割合は，出展者総数の80%近い。

会期の最終日にもたれた茶話会では，作品の裏にある苦労話や思い出が語られ，参加者同士の良き交流と出会いの場となっている。

6 『研究業績年報（2006）』（27）の発行

2007年11月，今年度の職員および関係者の研究業績をまとめ，道場信孝当財団研究教育部最高顧問の監修により発行した。「総説」6編，「研究」8編はこれまで通りのスタイルをとっているが，それ以外では，それぞれの部門での活動がより理解されやすくなるように「ホスピス・緩和ケア」（8編），「訪問看護」（4編）というように分類した。研究のうち「高齢者健康疫学研究：ヘルス・リサーチ・ボランティア（HRV）研究」の共同研究者である日本大学医学部相馬正義教授の研究室より2編の論文が提出されているが，今後の発表が期待される。また，「A Study on Life Habit and the Health Status in Active Japanese Senior Citizens by the Survey Using Structured Self-check Questionnaires」は，ボランティアとして新老人運動事務局の種々の活動に関わっておられる松原義博氏の論文であるが，調査票を集計・分析する上記の活動の中から生まれたもので，専門誌へも掲載された。

当財団の規模からしてもたいへん多くの研究活動が行われていることは誇りである。

7 memento mori 2007の開催

日本財団，笹川医学医療研究財団と当財団が主催するホスピスセミナー「memento mori 2007 - 『死』をみつめ，『今』を生きる」が，広島市，東京都，秩父市，金沢市，秋田市の5会場で開催された。

5カ所とも当財団の日野原理事長が講演を行った。またピースハウス病院ホスピス教育研究所の松島たつ子所長が秋田市の会場でディスカッションのコーディネーターを務めた。内容は「健康教育活動」の項に紹介した。

8 ボランティアグループの活動

2007年の活動の主なる動きを追ってみながら，何が起きて何か変わったか，新しいエネルギーが加えられて，

それに応じて理想を求める目標に到達したかを振り返って見た。

200名を超えるボランティアの貴重な時間をいただいた効果が立証されたかどうか、独立したチームとして存在して、職員よりはるかに多い人数がその関わった総時間が経済的効果をもたらしたかについて問うことの必要性はないかもしれない。しかし、“大事なことは価値ある時間だ”と胸を張って参加しているみなさんに答えられるだろうか。

この問いに近い答えは、2008年2月14日に開催したボランティア研修会の主題でもあったので、そこに一部の答えを見いだすことができた。

周知のように、ライフ・プランニング・センターは広域にわたって事業を展開している。それぞれの部門に分かれて活動しているので、多くのボランティアは部門を別にすると交流の機会が非常に少ない。1年1回の研修会は願ってもない機会と積極的に参加を呼びかけている。

当日のプログラムは2部構成として、日野原理事長にも時間を割いていただき特別講演をお願いした。参加人員67名、詳しくは後に記述する。

1) ボランティア登録者数 (2008年3月31日現在)

総数 183名 (女性 155名, 男性 28名)

内訳

三田クリニックボランティア	23名
健康教育サービスセンター	
オフィスボランティア	17名
血圧自己測定指導ボランティア	18名
模擬患者ボランティア	41名
新老人サポートボランティア	18名
ピースハウスホスピスボランティア	99名

特記すべきことは、近年脚光を浴びている模擬患者ボランティアに男性の参加が増えてきたことである。ことに、これまでの女性に加わって男性が所定の講義を受講し、実践活動に参加している。「新老人の会」会員もアクティブな生き方にチャレンジしており、世代を越えた交流は頼もしい限りである。日頃の実践活動はそれぞれが希望した施設を拠点として、病院ボランティア、教育医療ボランティア、文化活動サポートボランティアとして特徴ある活動に参加できることは、ボランティアの多大なメリットであり、グローバルな視野を広げていく好機会になっていると思う。

2) 年間活動時間 (2007年4月1日 - 2008年3月31日)

総計	35,604時間
活動回数	5,878回

活動時間数は自主申告である。ボランティア活動は自由意志を尊重している。例年、財団で規定する奉仕時間の達成者には表彰状と記念品を贈呈している。詳細については別途報告した。

3) 2007年度の主な活動記録

2007年4月11日	LPC ボランティア連絡会議 部門別委員が出席、担当スタッフとの密なる会議を開催年間の財団行事に関わる活動計画を協議した。
5月23日	ボランティア表彰式 (キャピタルカフェにて開催) 35名が表彰された。表彰者を招き、日野原理事長、朝子局長も同席して懇親会をもった。
6月2日	財団設立記念講演会 (メメントモリ共催) に参加
7月13日	第2回連絡会議 部門別連絡員と担当スタッフで、今後の懸案事項について討議した。
9月4日	第22回バザー準備会議として、バザー開催の目的を「LPCのさらなる発展のために」と設定した。
11月20日	第22回LPCバザー開催 ボランティア65名が活動、75万円の収益を上げた。
12月19日	ボランティアクリスマス感謝会 三田の笹川記念館で開催した。クリスマス感謝会は、財団の特にホスピスサポート活動を長年にわたって続けていただいている方々へも感謝と交流の機会としてご招待している。67名参加された。
2008年1月22日	連絡会議、バザー反省会議
2月14日	LPC ボランティア研修会 (健康教育サービスセンター)
3月11日	最終連絡会議

9 LPC ボランティア研修会

日 時 2008年2月14日(木) 13時～16時

会 場 健康教育サービスセンター

出席ボランティア 67名

内 容

第1部 特別講演

演 題 コミュニケーションの上手な取り方、現場で経験するさまざまな出会いを想定して - 世代を越えた交わり - ...日野原重明理事長

要 旨

ボランティアとは、その人自身の生き方を自然に表すことだ。力まずに、自然な行動の中で世代を越えて誰とでも交わりを持ち、それぞれのかたの生き方を学び、だれかのために生きることだと話された。そのコツは、1) 快適なコミュニケーションの構築 - 快適な距離を置くことによって生じる。2) 気の合った人と群れないことであり、交流とは共に交わることであり、群を作ることは交流範囲を狭くする。

「いのちの授業」を聾学校で行った体験について触れ、生徒たちは手話だけではなく、唇の動き、顔の表情など全身で会話していることを経験して感動を覚えたと話された。

言語は交わり的手段であって、体全体から発信している声、表情、動作が補足しているのである。言葉を交わしていても心が繋がっていないことを感じる時もある。大切なものは目に見えないのである、と結ばれた。

第2部 グループワーク

・「聴く」「話す」「共感する」スキルのトレーニング
小編成のグループをつくり、持ち時間45分。コミュニケーションスキルは永遠の課題である。活動を通して自己自身の何が変わったか、人生観の変容、価値観などについて語ってもらった。以下、部門別に発言内容を紹介する。

三田クリニックボランティア

活動は午前8時30分開始である。ラッシュにもまれながらの出勤も板についた。気がつくと10年経過していた。20年以上のキャリア組から含蓄ある経験談を聞きながら、生活のリズムを作ってきている。私の生涯の仕事だと思っている。

ホスピスボランティア

勇んでホスピスボランティアを志したが、時が経る

につれゆったりした生活の流れに感動を覚えて、自分の生き方をその流れに委ねるようになった。共に生き共に歩みを合わせるようになり、見えなかった物が見えるようになって本物のボランティアになった。

模擬患者ボランティア

動機は患者の気持ちのわかる医療者に育ってほしいという願いからこの活動に参加した。与えられたテーマに沿って演技するが、時には実体験がオーバーラップしてしまうこともあり反省することしばしばである。しかし、懸命に学ぶ、学生に接して日本の将来に明るさを感じる。課題のシナリオ通りに、公平に演技ができることの大切さやコミュニケーションスキルを身をもって体験している。達成感が継続の原点である。

シニアボランティア

高齢になったが、元気である。ボランティア活動が生活のリズムになっている。もっと活用してほしい。ボランティア活動は条件を整えてからの出発ではなく、そこに身を置いて、悩みながら学びを得ていくのではないだろうか。仲間同士の交わりの中から先輩から後輩によき技をバトンタッチしていただきたいと願っているが、その答えをいろいろな場面で見いだすことができる。人との出会いの素晴らしさを感じていることを知って感謝している。

10 ボランティアクリスマス会

日 時 12月19日(水) 12:30～14:45

会 場 笹川記念会館4階 第4,5会議室

参加者 74名 (ボランティア64名、職員10名)

1) 内 容

第1部 キャンドル・サービス (12:30～13:00)

光の入場・点火、讃美、聖書朗読、祈祷、メッセージ

第2部 懇親のとき (13:00～14:45)

開会挨拶、会食、ゲスト紹介、コーラス (LPCコーラスグループ)、体操・ダンス、プレゼント交換、閉会挨拶

2) 概 要

参加者メンバーの顔ぶれが変わってきた。特に、数年前に健康教育サービスセンターに生まれた「模擬患者 (SP) ボランティア」は、50名近い登録者中、約20名が男性ということもあり、これまでの参加者のほとん

どが女性だった顔ぶれに、ところどころ男性の顔が入ってきて、良い傾向にある。

二十数年ともなると、初期から協力して下さっている財団内部ボランティアの高齢化が進み協力者は減りつつあるが、それとは反対に、外部でピースハウスをサポートして下さるボランティアの参加者が増えた。

活性化と若いメンバーに恵まれているピースハウスボランティアが会に若さを注いでくれている。

「新老人の会」に入会して下さっているボランティアも多く、会の使命として掲げている「子どもたちに平和と愛の大切さを伝えること」というメッセージが浸透してきており、キャンドルサービス（燭火礼拝）での祈祷とメッセージ、懇親会でのコーラス（「シャローム」という神による平安を求める曲で結んだ）と閉会挨拶は、すべて「平和」への思いが込められていた。

ボランティア側からは、1年間の外部でのバザー活動の収益金、外部での活動で得た交通費の合計を席上で財団・ピースハウスへの寄付として進呈された。

今回も礼拝での奏楽・コーラス等の伴奏、そして楽しい体操の指導は、参加ボランティアからそれぞれ1名の協力によるものだった。

11 ボランティア表彰式

日時 5月23日(水) 15:00~16:30

場所 キャピトル・カフェ（千代田区平河町）

参加者 31名（被表彰者19名 / 表彰対象外ボランティア4名 / 職員8名）

プログラム 理事長挨拶、表彰、各組織長からの感謝、ボランティア・コーディネーターからのことば、被表彰者のお礼のことば、ボランティアからの祝辞

内容

ここ数年、財団設立記念講演会の席上で表彰式を行っていたが、今年度の講演会が日本財団・笹川医学医療財団との共催だったため、以前行っていたように独立の形で行った。またこれまでのように健康教育サービスセンター内ではなく、センターに近い会場で行った。表彰時間数と人数は、500時間13名、1,000時間6名、2,000時間5名、3,000時間3名、4,000時間1名、6,000時間2名、7,000時間1名、8,000時間1名、1万1,000時間1名、1万3,000時間1名、1万4,000時間1名の、11段階・合計35名であった。特徴としては、ピースハ

ウス病院の受賞者が増えたため、受賞男性が数名あったことと、模擬患者としてのボランティア協力者の受賞者も増えてきている。

出席者は、被表彰ボランティアが19名で54%、表彰対象外のボランティアは4名でボランティア全体の2%、それに職員8名の合計31名であった。

財団からの挨拶・ことば

日野原重明理事長からは、時間数提供の最高者は1万4,000時間で、常勤職員の時間数に換算すると7年間ほどの勤務日数となること。また、聖路加国際病院のように養成講座を持たないボランティア組織は、人的回転が早く、就職の条件などに利用されるが、当財団は養成講座をもち、ユニークなサービスをも提供できるので、大いに誇りを持ってもらいたい。

西立野研二ピースハウス病院長からは、利用者が日常性を回復し、家庭の味を味わえるようなサービスを医療者と共に提供し、地域の連携のために協力して下さっていることに感謝。

平野真澄健康教育サービスセンター所長からは、会報等の発送のために全面的に協力して下さるオフィスボランティアのみならず、昨今では、時代の要請に伴って模擬患者としての訓練を受け、大学の医学部等に向いて下さるボランティア、「新老人の会」のサポーターとして協力して下さるボランティア活動に感謝。

甲斐なる美 LP クリニック保健管理部長から、朝の8時半から健診受診の方々のために協力して下さるボランティアに感謝し、ご本人たちの健康相談にはいつでも積極的に対応したい。

北川輝子財団ボランティア・コーディネーター、山村恵美子サービスセンターオフィスボランティア・コーディネーター、志村靖雄ピースハウスボランティア・コーディネーターより、それぞれ、30年近いボランティア活動の歴史にあって、当財団にはなくてはならない働き手となって下さっている。発送等のプロとして協力して下さっている。理想的な看取りの姿を提供して下さる等の奉仕に対して感謝の言葉が述べられた。更に、同労のボランティアから祝辞があった。

表彰の効果として、表彰されることによって少し足が遠のいていたボランティアが、再度働きを振り返るチャンスが与えられた。また、受賞者にとって、財団からの表彰状・記念品もうれしいものであるが、同労のボランティアからのお祝いの言葉が大きな励ましとなることがわかった。 報告 / 朝子 芳松（財団事務局長）

財団法人ライフ・プランニング・センター
年報 2007年度 (平成19年度 2007.4 - 2008.3) ・ 35

財団法人 ライフ・プランニング・センター
理事長 日野原重明

〒108-0073 東京都港区三田 3 - 12 - 12
笹川記念会館11階
電話 (03) 3454 - 5068 (代) FAX (03) 3445 - 1035
URL:<http://www.lpc.or.jp>

2008年 5月発行 (株)ブリカ

財団法人 ライフ・プランニング・センター

〒108-0073 東京都港区三田3-12-12 笹川記念会館11階
電話 (03) 3454-5068 FAX (03) 3455-1035

■ライフ・プランニング・クリニック

〒108-0073 東京都港区三田3-12-12 笹川記念会館11階
(03) 3454-5068 FAX (03) 3455-1035

■健康教育サービスセンター

〒102-0093 東京都千代田区平河町2-7-5 砂防会館5階
(03) 3265-1907 FAX (03) 3265-1909

■「新老人の会」事業部

〒102-0093 東京都千代田区平河町2-7-5 砂防会館5階
(03) 3265-1907 FAX (03) 3265-1909

■臨床心理・ファミリー相談室

〒102-0093 東京都千代田区平河町2-7-5 砂防会館5階
(03) 3265-1907 FAX (03) 3265-1909

■訪問看護ステーション千代田

〒102-0093 東京都千代田区平河町2-7-5 砂防会館5階
(03) 5211-5330 FAX (03) 5211-5636

■ピースハウス病院 (ホスピス)

〒259-0151 神奈川県足柄上郡中井町井ノ口1000-1
(0465) 81-8900 FAX (0465) 81-5520

■ホスピス教育研究所

〒259-0151 神奈川県足柄上郡中井町井ノ口1000-1
(0465) 81-8933 FAX (0465) 81-5521
全国ホスピス・緩和ケア病棟連絡協議会事務局
(0465) 80-1381 FAX (0465) 80-1382

■訪問看護ステーション中井

〒259-0151 神奈川県足柄上郡中井町井ノ口1000-1
ピースハウス病院地下1階
(0465) 80-3980 FAX (0465) 80-3979